

天津日を日神と仰ぎ奉る
國民的信仰に就いて



始



特217
493

明治天皇御製

あまてらす神の御光ありてこそ

わが日のもとほくもらさりけり

くもりなき朝日のはたにあまてらす

神のみいつをあふけ國民



(行の皇道精神 謹載)
二〇三頁

①

序

本編は、私自身の曰神に對し奉る信仰、又は見解を叙述しようとするものではない。只、文献にあらはれた、史料に依つて、「天津曰（太陽）を曰の神（天照大神）」と信奉しまつることは、我が肇國精神の基盤、國體觀念の源流をなし、國史を一貫せる國民的信仰であつて、これを外にして眞の日本精神を論ずることは、不可能なる所以を明かにして、聊か國民精神の振興に資せんとするものである。

然し乍ら、私は藏書の多くを散逸させた上に、図書館に依るの便宜を有せず其上、急遽稿を纏めたもので、蒐集文献も僅に一部分に止り、殊に史學者の學説は極めて狭い範圍に限られたことは遺憾である。他日を期して増補大成したいことは私の念願である。

漢文のものは多く漢字交り文に書き改めたが二三原文の儘のものもある。又文献、着者等の分類は嚴密な意味のものでなく、たゞ便宜の項にこれを挙げた。

昭和十四年一月二十日

目次

緒言

第一 古典に現れたる曰神の信仰

古事記

日本書記

古語拾遺

第二 國體明徴の根本宝典に明記せられたる曰神の信仰

神皇正統記——（北畠親房）

附 閑 載 書

伊勢神道の内容

三、大日本史——徳川光圀

附新論——會澤正志、佐久良東雄

第三 國學者の曰神信仰



③

二三

一九

一六

一五

一四

一〇

①

一、本居宣長	二
1. 古事記傳	二
2. 葛花	二
3. 直毘靈	二
二、伊勢神宮割竹の辨	二
1. 平田篤胤——古道大意	三
2. 服部中庸	三
3. 伴信友	三
4. 橘守部	三
5. 鈴木萬年（古事記正義）	三
6. 敷田年治（古事記標註）	三
7. 水谷清（古事記大講）	四
8. 附 菊花御紋章の解説	四
第四 神道學者と日神の信仰	四
一、神道に於ける天照大神の御位置	四

宮地直一博士——神社綱要	四
伊藤千真三——	四
二、伊勢神道と日神の信仰	五
1. 垂加神道（山崎闇齋）と日神の信仰	五
2. 天人唯一の道	五
3. 神籬磐境の傳	五
4. 續話續録	五
5. 神學大意	五
6. 玉籤集	五
四、崎門俊傑の國體顯揚と明治維新	五
1. 正親町公通——跡部良顯——淺見綱齋——若林強齋	五
2. 鶴飼鍊齋——栗山潜峰——三宅觀瀾——打越撲齋	五
3. 竹内式部——山縣大貳——藤井右門——唐崎常陸介	五
4. 梅田雲浜——有馬新七——橋本左内——頼山陽	五
第五 兵法家の日神信仰	六

一、北條氏長——北條流軍學……………六一
二、兵學諸家と武士階級……………六四

第六 勤王の志士と日神の信仰……………六七

一、山鹿素行——中朝事實……………六七

二、大石藏之助……………七〇

三、吉田松陰……………七一

四、乃木大將……………七五

〔附〕兎玉將軍……………七五

第七 學者思想家の日神信仰……………七七

一、思想家と日神……………七七

イ、佐藤信淵——天柱記……………七七

ロ、伊藤裕——日本精神原論……………七九

ハ、日神の信仰と日章旗——松波仁一郎博士……………八二

二、二宮尊徳と天照大神の信仰……………八四

三、神話學者……………八五

⑥

四、人類學者……………八六
日本神話傳説の研究——高木敏男……………八五
國民の日本史「大和時代」——西村眞次……………八六

第八 歴史學者と日神の信仰……………九二

一、古典そのまゝの叙述にとどめたるもの……………九二

帝國史略——有賀長雄……………九三

二、合理的に説明せむとするもの……………九四

イ、古代史研究——松本芳夫……………九四

ロ、日本古代史研究——太田亮……………九五

ハ、日本民俗學論考——中山太郎……………九六

ニ、合理論者の動向——新井白石……………九七

ホ、神代史の研究——津田博士……………九八

三、神話を神話として神典に對するもの……………九九

イ、國體新論——黑板勝美……………九九

ロ、綜合日本史概説——栗田元次……………一〇三

⑦

四、國民的信仰に立脚せるもの

平泉 澄博士

第九 宗教學者と日神の信仰

一、元亨釋書——虎関師練

二、日本宗教史——比屋根安定

第十 宗教家と日神の信仰

一、本地重跡説と日神の國民的信仰

東大寺要録

僧 空海——真言宗徒

二、日蓮の日神信仰

田中智學——大國聖日蓮上人

三、聖徳太子十七條憲法講話——曉鳥敏

四、國体の信仰と佛教——稻津記三

五、本間 俊平

六、黒住教の信奉する天照大神

第十一 文献に現れたる現代人の日神信仰

一、行の皇道精神——渡辺偉哉

二、世界を統一するもの——大森朴堂

三、太陽を産め——平松雄一

四、國体憲法學——里見岸雄

五、自治民範——權堂成卿

六、將來の日本と神道の新使命——溝口駒造

七、日本信仰——加藤一夫

八、大體國体精義——四宮憲章

九、國家と宗教——田川大吉郎

十、神道の宗教學的研究——加藤玄智

十一、神道の話——小倉鏗爾

十二、宮本武藏——吉川英治

十三、二宮尊徳翁全集 現代事業篇

十四、神ながらの道——寛 克彦

イ、神典の性質……………一六三

ロ、日神の御出生……………一六四

ハ、日神の御靈……………一六六

ニ、皇祖……………一六八

ホ、日神及須神と和魂及び荒魂……………一六八

ヘ、天石屋戸……………一六八

ト、ひかげのかつら……………一六九

チ、日像鏡……………一七〇

リ、明治天皇の御製……………一七一

十五、國體の本義——文部省……………一七一

以上

緒言

天津日（太陽）を日神と仰ぎ奉る國民的信仰に就いて

天津日（太陽）を天照大神（日の神）と仰ぎ奉る信仰は我國古代に於ける民族的信仰であるのみならず、三十年の我國史を一貫して、最も廣く深く行はれた我國民的信仰である。日神の信仰は我國體觀念、肇國精神の根幹たる神國思想の中核を爲し、萬き一系皇統御繼承を、天津日繼と申し上げ奉り、御位を日位とたゞへ奉り、皇祖日神は、山川草木と共に蒼生の總てを生み給ひて、君臣正に一体、日像の御鏡を日神の御靈代として天地の宗廟に齋さ祀り、日本を以て國名とし、日章を以て國旗と戴き、旭日を以て日本精神の象徴となせる、日神の信仰は、実に悠久の古より未永永劫に國史を一貫せる不磨の事實である。且、日輪を天照大神と信奉し奉る信仰、習俗は、古典、史籍は勿論國體明徴の偉人傑士の言行、並びに學者思想家の著書に明らかなると共に宗教、口碑、土俗により普く傳統せられたる、民族的信仰である。

然るに徳川中期以來、科學的論理、物質的理法を基調とせる西洋學術の輸入によりて、我が國古來の思想信仰に蕪雜を交へ、物質的自由主義的思想は流行

の主流をなし、殊に明治以來科學的論理を以て、認識、批判の基調となし、之に合致せざるものは悉く之を抹殺消去せんとする奇驕の傾向をさへ示すに至つた。

然るに眞摯堅実なる學者、神道家は、依然として、國史國學の正統を堅持し、純真素朴なる民衆は國民的信仰の傳統を信奉して微動だもしなかつたのであるが、西洋文化に眩惑しその思想に心酔せる一部の學者は、科學的理法を以て天地開闢の神話傳説を解剖し、國民的信仰を批判検討せんとして、奇怪、卑俗の學説を生じ、信仰的眞實を合理的常識的に説明せんとして、低調俗惡の附會を取へてするに至つた。而してかゝる唯物偏重の思想は廣く一般社會的に流布せられ、やがて普通教育に於ける國史教授も亦、國民的信仰の熱意と民族的信念の氣魄とを失つて、平板にして常識的敘述に陥り、茲に奇激なる西洋思想の浸入する間隙を生ずるに至つたことは誠に千歳の痛恨事である。

然るに我國の思想界は、漸く覺醒し、滿洲事変を一大轉期として茲に、日本精神の昂揚と國体明徴の氣運勃然として興起し、國史の研究も正しくその正道に復し、我國古來の、天照大神は日神（太陽）にましますとの國民的信仰は、

澎湃として起り毅然として叫び出され、眞摯熱烈なる信仰運動としてあらはるゝに至つたことは誠に當然にして又歡喜にたへない所である。今茲に、私見を挿まず、只管文献に依據して、日神信仰の史実と、天津日（太陽）を日神（天照大神）と信奉し奉る國民的信仰の現状とを概叙し、以て日本精神の發揚に資せんとするものである。

第一 古典に現れたる日神の信仰

一 古事記

「三卷……吾が國開闢より 推古天皇までの事を記す……」 天武天皇博聞強記なる稗田阿禮に、兼て親撰が給へる舊事を誦み習はしめしと、元明天皇和銅四年、博士太安麻呂が阿禮より聞き取り筆記して成る。」（増國史大辭典一〇六六頁）（和銅四年は一三七一年にして今年（昭和十四年）より一ニニ九年前に當る）本書は日本最古の史書であり、歴史家、國學者、神道家の神典として珍重せるは象知のこゝである。

○男神の楔杖の章に

「伊耶那岐命……かれ吾は御身の楔ひせなとのり玉ひて、筑紫の日向の橘の阿波岐原に到て坐して楔杖ひ玉ひき……是に左の御目を洗ひ玉ふ時に成りませる神の又名は天照大御神、次に右の御目を洗ひ玉ふ時に成りませる神の又名は月讀命……」（藤村作編、古事記一六一—一八頁）

○三貴子の分治の章に

「此の時伊耶那伊命、大に歡喜して詔り玉はく、吾は子生み生みて、生み終りに、三はしらの貴子を得たりと、のり玉ひて、即ち其の御頭の玉緒もゆらに取りゆらかして天照太御神に賜ひて詔りたまはく、汝が命は高天原を知らせし事おさい賜ひき。」（全一九頁）

（全書、須神昇天の章に、「かれこゝに、速須佐之男命のまをし玉はく、然らば天照大御神に請して罷りなむとまをし玉ひて、乃ち、天に参上り、ます、時に山川悉く動み國土皆震りき。」（全二〇頁）とあることにより古事記に曰ふ高天原は天上をさせることは明かである。）

○神武天皇御東征の章に

「是に（曰下之蓼津）登美毗古と戦ひ玉ふ時に、五瀬命、御手に登美毗古の痛矢串を負はしき、故れこゝに詔り玉はく、吾は、曰の神の御子として、日に向ひて戦ふこと良きはす、かれ賤奴が痛手をなも負はしき。今自りはも行き廻りて、日を背負ひてこそ撃ちてめとちざり玉ひて、南の方より廻り幸でます……。」（全七〇頁）

以上「古事記」の記載をその儘要約すれば、「天照大神は高天原（天上）を治しめされ日の神（太陽神）とならせ給ひ、神武天皇は正しく皇祖を曰神と仰ぎ給ふ」といふことである。

二、日本書紀

「三十卷……神代より持統天皇までの史實を、漢文にて編年体にて記述したる正史……元明天皇の養老四年、舍人親王及び太安麻呂等勅撰。」（増訂日本書紀一、九五九頁）

「國史の根本として最も重大な書物であります。昔は朝廷に於かれては、朝廷の盛なる時代に於ては、大抵三十年毎に御前に於て日本書紀の講義が行はれて居り、主なる公卿は皆之を承つたのであります。」（憲友三十二卷第七子七頁、八頁、平泉澄博士）

「養老四年以來博士等の進講……慶長四年勅版の神代卷」あり。（國史大辭典）等により、本書が古事記より九年遅れて撰録せられて居るが、勅撰の正史であり、代々御進講あらせられしもので、又勅版本の刊行等ありて、我國神代

の隨一にして、國體明徴の根本寶典であることは贅言と要せざる所である。

○ 神代卷に、

「伊弉諾尊、伊弉冉尊、ニはしらの神、彼の嶋（磯敷盧嶋）に降りまして、夫婦して洲國を産生んと欲す。……既にして伊弉諾尊、伊弉冉尊共に議りて曰く、吾れ已に大八洲國及山川草木を生めり。い何にぞ天下之主者を生まさらむやと。こゝに共に **曰神** と生みまつりなす。大日靈貴と號す。（一書に云、天照大神）此の女子光華明彩して六合の内に照り徹る。かれニ **神喜** びて曰く、吾が息多にありと雖も、未だかく靈異児は有らず。むべ、久く此國に留むべからず。自ら當早く人天に送りまつりて、授くるに天の事を以てすべしと。是時天地相去ること未だ遠からず。かれ天柱を以て、天上に擧ぐ。次に月、神を生みまつる。其の光彩しきこと日に垂けり。以て日に配べて、治すべし。かれ亦た天に、送りまつる。（大阪朝日新聞社編六國又、日本書記上卷九頁）

○ 「一書曰、日月既に生れ給ひぬ。次に蛭児を生み玉ふ。」（同上二〇頁）

○ 「一書曰、伊弉諾尊三子に勅任して曰く、天照大神は以て高天原を御す可し。月夜見尊は以て日に配て天事を知らす可し。素戔嗚尊は以て滄海之原を御すべし。

し。既にいて天照大神天上に在して曰く……。」（同上九頁）

○ 神武天皇御東征の巻に

「戊午年……夏四月……（長髓彦）之を孔舍衛坂に擡り與に會戦ふ。流矢有りて五瀬命の脇脛に中れり。皇師進み戦ふこと能はず。天皇憂ひたまふ。乃ち神策を冲衿にさだめたまひて曰く、今我は是れ **曰神** の子孫にして日に向ひて虜を征つは此れ天の道に逆れり。退き還りて弱きを示し、**神** と禮祭りて **曰神** の威を背負ひて、影のまゝに壓ひ躡むに若かず。かゝらば、則ち曾て及に血ぬらすして虜必ず自らに敗れなむ……。」（同上八三頁）

○ 「既にして皇師中洲に趣かむと欲す。山ノ中峻絶して、復行く可きの路無し。乃ち擡違ひて其跋涉所を知らず。時に夜夢み玉はく、天照大神（日の神）天皇に訓へまつりて曰く、朕今頭八咫鳥を遣す。宜以て卿導したまへと。果して、頭八咫鳥有り。空自り翔び降る。天皇曰、此の鳥の來ること自に祥夢に叶へり。大哉赫なるかな。我皇祖天照大神（日神）以て基業を助成むとおもほせるか……。」（同上八四―八五頁）

○ 神武天皇の條に

「四年春二月……詔曰く、我皇祖之靈天自り降り、鑿りて、朕が躬を光助せ玉へり。今諸の勢已に平ぎ、海内事無し。以て天の神を郊祀て大^ニ奉を申べたまふ可き者なり。乃ち靈時を鳥見ノ山の中に立つ……用て皇祖天ツ神（日神）を祭り玉ふ。」（全上五頁）

○用明天皇の條に

「蘇香手姫皇女を以て伊勢ノ神宮に拜して **日ノ神**の祀に奉らしむ。 （天の皇女は此の天照の神より、故皇祖の天皇、世に起るまで、日ノ神の神紀に奉る。自ら葛城に遷りて、是れ也。故皇祖の天皇紀に見ゆ、或る本に云く、三十七年の間、日ノ神の祀に奉りて自ら退りて是れ也。）」（國史大系第一卷、日本書紀卷第二十一、三六一頁）

○皇極天皇四年中大兄皇子蘇我入鹿を誅するの條に、

「中ノ大兄地に伏して奉して曰く、鞍作蓋に天宗を滅して、將に **日位**を傾けむとす。豈天孫を以て鞍作に代へむ耶。」（全上、四二二頁）

以上、日本書紀の記載を要約すれば、若冉二尊は日神を生み給ひ、天に送つて、天上のこゝをしろしめさしめ給ひ、月神を生みたまひて日に配して天の事を知らしめさしめ給ふ。これは、正しく日のあたり仰ぎまつる日月の神であつて、神武天皇御躬ら、天津日（太陽）を皇祖天照大神と仰ぎたまひ、皇祖の神助により

て天業を成さしめ給ひ、靈時を鳥見山に立て、皇祖曰ノ神を祭り給ひしこと、又、伊勢神宮は正に皇祖日ノ神をまつり給ふこと。更に、代々の天皇は日ノ神の御裔にまします。皇位をあらはすに曰位^イの文字を以てしたることである。
尚日本書紀には「日ノ神」の文字あらはるゝこと三十二回に及ぶ。

三、古語拾遺

平城天皇の大同二年（古事記の撰録に後るゝこと六十六年）齋部の廣成が、其祖先は、中臣氏の祖と五角の勢であつたものが、中臣氏は勢を得、齋部氏は僅に六位五位の官に留りしを嘆き、憤り悲しみて、十一箇條の漏れ残りたる事跡を拾ひ書き立て、つくりし書で（國史大系第一〇五八頁）、古代史研究の重要文獻として、紀、記に次ぐものである。

○「一に聞く、夫れ開闢の初め、伊弉諾伊弉冉の二神共に夫婦と爲りて大八洲國及び山川草木を生み玉ひ。次に **日ノ神**を生み、次に **月ノ神**を生み、最後に素戔嗚ノ神を生み給ふ……。」（註、古語拾遺講義、五頁）

○「是に於て素戔嗚神 **日ノ神** （天照大神）に奉辞せんと欲して天に昇り玉ふの時に櫛明玉、

命迎へ奉りて献るに瑞の八坂瓊之曲玉を以てす。素戔嗚神之を受けて轉じて

曰神

に奉り玉ひぬ………（全上・二六頁）

○「天照大神本帝と殿を同じたまへり。故に供奉之儀若神一體なること天上自り始れり。中臣・齋部二氏相副て日神を祈り奉り猿女之祖も亦神の怒を解きたり………」（全上・二〇〇頁）

以上「古語拾遺」を要約すれば「天照大神は日の神にましまし、天上をしらしめし給ふ」ことが明記せられてをる。

右の如く、我國古代史研究の根本史料たる古典は、何れも其軌を一にして、皇祖天照大神は日の神（太陽神）にましまし、天上を治し給ふことを明記し、更に、伊勢神宮には日の神を奉祀し奉ることを明かにしてをる。

上掲三書の撰録せられたのは、何れも今より千二百年以前の事で、神武天皇御即位と去る約千四百年の頃であつて、我紀元年数の半以上は、明かに、天照大神は日の神にましまし、天津日と輝きましまして天を治しめし給ふことは、深き國民的信仰となつて、傳統せられたものであることは明白である。

然も日本書紀卷第三、

神武天皇の條に「天祖の降跡まして自りこのかた一百七

十九万二千四百七十餘歳………」なりと記載せられた如く實に天照大神が日の神にましますとの信仰は悠久の古より我日本民族に深く廣く信奉せられたる民族的信仰であつたことが伺はれるのである。

第二、國體明徴の根本寶典に明記せられたる 日神の信仰

一、神皇正統記

六卷 神代より 後村上天皇の政祿に至る迄の大業。皇統の由て來る所、神皇の正統たるを論ず。延元四年（一九九九年）秋なる。〔今より六〇〇年前〕（『史大辭典』）

本書は、「北畠親房公が、自分獨りの力を以て而も殆んど、参考書といふものは何も無く、唯箇單なる年代記を一冊持つてゐられたゞけで、極く僅かの間に、恐らく一、二ヶ月の間に、而も戦争の間に城（小田城）の中で、籠城して居られる間に於て、作られた書物でありまして、（憲反第三十二卷第七号、八頁、平泉澄博士）……後醍醐天皇は崩御に臨まれ、まして……此の親房公に頼之朝臣此二人に對して、御懇篤なる詔勅があります……後に御立になりましたのが、義良親王、後村上天皇……御年十二才にして此の難局に當り、天皇の御位を踐ま

せ給ふたのであります……親房公は、此の天皇を御輔佐申上げなければならぬといふ重大な責任を感じまして、自分が、吉野に居りますれば、直接、天皇を御輔導申上げるのであります。自分は今現に圍まれて悪戦苦闘をなされてゐる最中でありまして、己むを得ず筆を取つて書物を書き著はして、之を御前に捧呈されたのであります。（全上、一四—一五頁）……吉野朝廷が、非常な苦境に御立ちになつても、少しも屈せられることなく、五十年の長きに亘つて戦ひ續けられたのは、此處に「神皇正統記」が御輔佐申上げる力を考へねばならぬ……而して當時に於て是だけの影響を與へましたばかりでなく、六百年後に於きましては、御承知の「大日本史」をかゝしめるのであります。この書物が明治維新の大業を翼賛せしめるのであります。日本歴史の中に於て、殆んど眼目といふべき書物であります。之を讀むことなくして、「神皇正統記」の精神に觸れることなくして、日本歴史を理解しやうといふことは出来なないことでもあります。（全上）

○ 開卷第一にある有名な言葉は、

「大日本は神國なり。天祖始めて基を開き、

日ノ神

長く統を傳へ給ふ。我國

のみこの事あり、異朝には其の類なし。此の故に神國といふなり。」(村上寛註、
註神皇正統記、一頁)

○「大日本」とも大倭とも書くことは、此の國に漢字傳りて後、國の名を書くに、
字をは大日本と定めてしかも耶麻止と讀ませたるなり。大日靈(日神)の御國
なれば、其の義をむとれぬか。」(全上、二―三頁)

○「伊弉諾・伊弉冉の二神……先づ日神を生みます。此の御子光り麿はしくし
て國の内にてりしほる。二神悦びて、天に送り上げ、天上の事を授け給ふ。此
の時天地相去ること遠からず。天の御柱を以てあげ給ふ。是を大日靈尊と申す。
……又は天照大神とも申す……次に月神を生みます。其光日につげり。天にの
ほせて、夜の政を授け給ふ。」(全上、二―三頁)

○「地神第一代大日靈尊これを天照大神と申す。又日神とも皇祖とも申すなり。
この神生れ給ふこと三の説あり……又おはします所も、一には高天の原といひ、
二には日の小宮といひ、三には我が日本國これなり。」(註曰、凡意計り難し、凡人の考にて
ははかりかめると也)

○「天照大神怒りて天の石窟に籠り給ふ……天のやすのかほの辺にして、八百

万の神集へて相議し給ふ。其の御子に思兼といふ神のたばかりにより、石凝姥
といふ神をして日神の御形の鏡を鑄せしむ。」(全上、二六頁)

○「天照大神、吾勝の尊は、天上に留り給へど、地神の一、二にかきへ奉る。その始
め天下の主たるべしとして生まれ給ひし故にや。」(全上、三一頁)

○「三種の神器世に傳ふる事、日月星の天に在るに同じ。鏡は日の体なり。玉は月
の精なり。劔は星の氣なり。」(全上、三四頁)

以上を要約すれば「大日本は日の神永遠に統を傳へ給ふ神國である。大日本とい
ふは日ノ神の御國の故であらう。皇祖日ノ神は月の神と天にのほりまして、月神
は夜をしらしめす。天照大神は天上に留り給へど地神の第一にかきへるのは、そ
の始め天下の主たるべく生れましたが故であらう。その他所説あるも凡慮の及ぶ
ところではない。又、三種の神器の御鏡は日神の御形に鑄せしめ給ひしもので、
日の体である」といふにある。

附 関 城 書

「神皇正統記は延元四年筑波山の下に於て書かれたのである。聽て小田の城主小田治久足利に降参しまして後には関城に移られました。此に於て更に書直されたのであります。その関の城に居られた時分にもう一つ重要な物を書いて居られます。それは関城書と謂はれるものであります。……関城書は結城親朝に與へた手紙……（此人は）奥州白河に居った人……この人は親も兄弟も非常に忠義な人。故に之を頼みとしてしきりに手紙を出された。六年間倦まず、手紙を書いて、奮起を促して居る。しかし結城親朝は動かない。この手紙の中で最も有名なものが関城書である。そして自分の最後の言葉として書いて貰ひたいといつて……」

「我國は天祖經始の地。」

日神

統領の州なり。」

と。（憲法第三十二卷第八号）

平泉澄博士「國史の眼目」

この一言はまさに我輩國精神、國體觀念の中樞根幹をなす我國史を一貫する思想である。

著書に著はれたる信仰は、著者其者の信仰なるが故に、序ながら、南朝の柱石北畠親房公の信仰について一言附言する必要があると思ふ。公の時代は、本地垂迹の説に對する反本地垂迹説、即跡高本下の思想が芽ばえ、伊勢神道以下、神統説が鬱勃として興起した時である。而も日本書紀の研究が宗教的に變化した時代である。（中村直勝著、北畠親房、九一頁）。即ち「支那や印度を尊しとなし、自らを卑しとした時代から去つて、我國の神國であることを堅く信じ……更にまた、伊勢神宮なるものが、この時代と中心として民衆に非常に接近し初め、國家の宗社たるべき実を明確に捉し初めた。」（同上、九六頁）時である。即ち親房公の信仰に深い關係を以てする伊勢神道の興起を見たのも此の時代である。

●伊勢神道の内容

「伊勢神道といふものは要するに外宮神道であり、外宮の神宮である度會氏の唱道する所であるが故に、度會神道とも呼ばる、もので、結局のところ外宮の本體を論究して内宮と併立せしめるか、或は内宮以上の高さに置かんが爲めに、外宮の祭神を、天照大神の御祖神に當る國常立尊である」と言はんと

する度會神主の努力に外ならぬ。内宮の祭神、天照大神が、**太陽神**であり、火徳であらうに對して、外宮を水徳の神であるとして五行説の水剋火から採つて、それとなく外宮を内宮より以上の神であると暗示せんとした。……」(全上、三五六—三五七頁)

ことが其の重点である。しかしして(親房公の思想は)自ら其の中に外宮神道から外れた所があるのである。」(全上、三六一頁)

「中にも鏡を本とし宗廟の正体と仰がれ給ふ。鏡は明を形とせり。心性明なれば、慈悲決断は其の中にある」と言つて居る數言こそは、親房の創見であり、同時に、彼の神道觀の精致である。鏡を中心とする所に外宮神道そのまゝをなく、寧ろそれより大飛躍を試みて居るものであることを知る。」(全上、三六六頁)

これに依つて親房公の伊勢神宮の祭神が日ノ神にましますとの信仰は一層明瞭に立證せらるゝ譯である。

二、大日本史

「三百九十 卷 二百二十六冊 別に目錄五冊 神武天皇より 後小松天

皇に至る史實を紀傳体に編述したものの…… 神功皇后と皇妃に 弘文天皇を天皇に列し、神器の所在によりて、正朔を南朝に擧げたるは、本書の三大特筆と稱せられ、徳川光圀の最も意を用ひたる所とす。」(國史大辭典一六三—頁)

明暦三年編纂に着手、幾多の學者を集め、彰考館をたて、之に従事せしめ、水戸二十五万石中三分の一、八万石を以てこの經費に充て、二百五十年を経て明治二十九年完成。(憲法第三十二卷第七号、七一—八頁、平泉澄博士)

忠臣正成が悪逆無道の名をさせられたほどの二百数十年の暗雲が撥かれ、遂に、明治維新の大業の成就した。この思想的背景が大日本史によつて顕揚せられた國體觀念にあることは、云ふ迄もない。

○卷一 神武天皇の條に

「戊午歲……四月九日……東瞻駒山を征て中川に入らんと欲し、長髓彦彥を忌し之を孔舎衝坂に徹る。奥に戦ひて利あらず。五瀬命流天に中り、師進むこと能はず。天皇之を憂ふ。乃謀りて曰く、我は是れ**日神**の子孫、而るに日に向つて勇を征つ、是れ天に逆心なり。退き還りて弱きを示し、神祇を禮祭して**日神**の威を背負いて影に隨ひ壓躡するに若かず。則ち及に血ぬらすして廢必

ず自ら敗れん。(一四頁)

○卷第一、百六十五、列傳第九十二、源親房の條は、神皇正統記及び結城親朝に前後六年の間、後はず撓はず書き送った間、城書等によりて忠誠無二の事蹟と純忠の思想を叙し、其の手書に托して曰く、

「今日の事勢急なること星火の如し。其の類ふ所瞬息の頃持する所を喪けず、餘命を以て、光皇に報ずるにあり。大義善心死而後休む鳥の將に死せんとするや其鳴くも哀し。人の將に死せんとするや其言も善し。再信の統き難きを恐る、敢て之を盡言す。夫我國有太祖經始の地、**日神** 統領の州、聖々相承、所歷九十五代、誓つて無窮に及び遠越を容れず。凡不軌と畫る者は踵を旋さずして殄滅せん。尊氏何為者ぞ……」(一六頁)

以上「大日本史」は第一冊より第百冊に至るまで其冒頭に、「光國修、綱條校、治保重校」と明記して水戸家とあげて其責任を明かにし、皇統の正閏を正し、大義名分を明かにすることを生命としたことは、幕末勤王の志士真木泉守が切腹に際し三條實美公の許に届けさせた手紙の中に、「大日本史恐ろしく候間」と記して、孟子の所謂「孔子春秋を作つて乱臣賊子懼る」と云つたり同様の意義を表明

した。(憲友第三十二卷第九号五—六頁、平泉 澄博士) のによつて人の知る所であるが、本書にして、神武天皇が日神を皇祖と仰ぎ奉りし御事蹟並に、北畠親房の有名な間城書中の最後の有名なる「太祖經始の地、日神統領の州」と、我國肇國の大精神表明の大文字を引用したるは徳川光國を首領とする多数の水戸學派の學者志士に、日神を皇祖と仰ぐ信仰の廣く深く浸潤せることを明示すると共に、我國國體明徹の根本動力となつた尊皇愛國の思想の根底に日神の信仰の輝くことを教ゆるものであるが、更に之を確證する爲に水戸學派の日神に関する信仰の一端を眺めることとしまふ。

14) 新論——會澤正志

水戸學派の中、國體論の代表者と何人も之を認むる新論をあげ會澤安の日神の信仰を見るに、新論の開卷第一に、

○「謹みて按ずるに神州は太陽の出る所、元氣の始まる所にして、**天日之嗣** 世々宸極を御し、終古易らず。固に大地の元首にして萬國の綱紀なり。誠に宜しく宇内を照臨し、皇化の暨ぶ所遠通有る無かるべし。」(新論、卷之上、一頁)

○ **天胤** 四海に君臨し一姓歴々未だ嘗て一人の敢て天位を覬覦する者有らず。以て今日に至る者豈其偶然ならむ哉。 (全圖体上、二頁)

○ 「天祖肇めて鴻基を建つ、位は即**天位**、徳は即天徳、以て天業を經綸し、細大の事、一に天に非ざる者無し。徳は玉に比し、明は鏡に比し、威は劍に比し、天の仁を体し、天の明に則り、天の威を奮ひ、以て萬邦を照臨し、天下を以て皇孫に傳ふるに造びて手に三器を授け、以て**天位**の信と爲す、以て天徳に象り、而して天工に代へ天職を治め、然る後之を千萬世に傳ふ。天胤之尊、最乎として其れ犯すべからず。君臣の分定まりて大義以て明かなり。」 (全上、三頁)

○ 「天祖天に在りて下土に照臨し、天孫誠敬を下に盡して以て天祖に報ず。」 (全上、三頁)

○ **天日之胤** 天壤と異に終始して易らざるは蓋し以て之を致す有りて然るなり。 (全上、八頁)

右の如く新編に著しく現れてゐる天の文字は、單なる神聖の意でなく深く日神の天にましまして、皇國を神助せしめ給ふの意なることは、「天日の嗣」「天

日の胤」天祖天に在りて下土に照臨し、等の文字に現れたることは何人も否む能はざる所であり、會澤正志齋は考彰館の總裁として大日本史編纂の局に當つたことから及ても光國の日神信仰と其のまゝ、継嗣してこの文字あることは明かである。

(四) 佐久良東雄

「常陸真鍋善徳寺の僧還俗して神道に入る。佐久良東雄と名づけられた。藤田東湖先生は非常に之に感ぜられて、水戸に出でつかへられるやうに申した。私は主人持ちですからと心。東湖が不思議がるし、日本人として君と仰ぎ奉るべきは、天皇陛下の外にはない筈ではないか、更まつての御尋ね不思議に思ふ」と東海道を歩み京都に上られた。

一歩歩み歩めば歩むたひことに及ぶとに近くなりしうれしさ。安政の大獄の後井伊大老が殺されて後、先生は捕へられて殺される。それは大老を殺すと同時に京都に兵を擧げようとしたからである。先生いよゝゝ危しと見て遺言を認む。これは今も残つてゐる。

「我等先祖より皇恩、神恩何万年今日迄受け候や。教へ難し、此處をよく」

考へあきらむれば、この一身幾度か捨て御恩報じ候とも報じ難し。実に九牛の一毛にも足らぬことなり。よくよく此の事を考へあきらめすはや御大事と申す時には、一命を捨て報ひ奉るべし。然らざれば、我子孫にあらず。この賤しき身一つ、捨て勿体なくも長多くも嬉しくも恭けなくも今かおついに御照し遊ばされるこの御日様の御子孫様の天子様の御爲に相成り候こと、返すくも嬉しきことにあらずや。有難きことにあらずや。」(憲友第三十二卷第十号、平泉巻)

先生が、常陸の出身であり、水戸浪士の企てによる櫻田門外の變に呼應して京都に兵を擧げんとせられたことによつて、この日神の信仰は水戸学派の信仰即大日本史による感化の多きに在ることは言をまたない所であらう。

第三、國學者の日神信仰

一、本居宣長

イ、古事記傳 四十八卷

本居宣長翁が國學の四大人中の随一人であり、又復古神道の代表者であることは普く人の知る所である。殊に古事記傳は三十五年の歲月を費し畢生の努力を傾注した大著で、翁の識見非凡にして、古語・史実の研究精緻該博を極めたことは何人も驚嘆せざるを得ない所である。(國史大辭典一〇三六頁)

○「天照大御神、照は氏良須と訓べし。天照は、天に坐坐て照り賜ふ意。さて此大御神は、即ち今まのあたり世を御照し坐坐天津日に坐させり。されば月日は、今此御禊によりて、始めて成出坐せるやかし。へ此より前には月日坐ことなし。然るを世の識者、月日は天地の初発より自然ある物とし、天照大御神、月讀命をば、別なりとして、説を立るは、何の書に見えたる也。たゞ漢籍の理に溺れたる己が私ごとにして、甚古へ傳、に背けり。若日月奎

より坐々 ば、今茲ニ成出テ坐るは、何の神とかせむ。 **日ノ神** とあるなほ
をば、なほ曰いは別なりと説曲じとも、書紀には日月神に坐なむともいふを
ば、如何にかせむ。ひたぶるに外國の書の理説のみ泥て、如此さだかに、成
出坐る始を記されたる、御國の正しき古傳、を信ざるは、いみじき邪説に
非ずや。 (本居宣長、古事記傳、古事記大傳第六卷、一七七頁)

○「月讀ノ命、都久用美と訓べし。御名の義、師説に、綿津見、山津見などの如
く、美は持にて月夜持の義なりとあり。夜之食國を所知者す。大御神に坐せ
ば、然もありぬべし。さてこの大御神も即ち今天に坐し、夕月に坐せり。月の
光を即ち月讀之光とも萬葉によめり。」 (今上、第十卷、一六七頁)

口、葛花

○「あなかしニ、まのあたりに、天照大御神の御光を頂に蒙りながら、かゝる
邪説を吐出すべきものかはし。」 (葛花、上巻、大日本思想全集、第九卷、一〇〇頁)

○「**日神** は、即天つ、日にあし、ます御事は、古事記、書紀に明らかに見えて疑な
きと、今難有のかはあらず、いふこと、返りて、疑たるには有けれ。そも
此 **日神** は天地のきはみ、御照しましませ共、その始は皇國に成出坐て、

の皇統、即皇國の名として、今に四海を統御し給へり。さて此神、天の石屋
戸をさして、隠りましし時は、萬國常夜なりしに、いまだ生坐ざりし前の
常夜ならざりしは、いかにいふことは、児童といへ共よく心づきて、疑ふこ
となるを、今難有めづらしげに、こじぐしくいひたてたるこそ推れ。此一
つを以ても、返つて神代の古事の眞實にして虚偽ならざることをさしるべし。
もし後の 天皇の、造り給へる事ならんには、かばかり淺はかに聞えて、人
の信すまじき事を造り給はんやは。此所によく心とどめて味ひ見よ。すべ
て、神の御所行は、尋常の理むで、人のよく測り知るところにあらず。人の智は、
いかにかしこきも限ありて、小さき物にて、その至る限の外は、おれら
ぬものなり。さてその神の御しは、直なれども、返て淺はかに聞え、偽
のやうに思はるゝは、人の智の測知る限りと、邊にへだたれる所なる故に、
その説を聞人の心に疎く遠くて、入がたく信じがたきなり。」 (葛花上巻、今上
一〇五頁)

○「御國を、天地の外におかんとすといへること、亦にも見えたり。是はいか
なる事といへるにか、心得がたきを、つらつら前後の語を考へておはしかる

に、天照大御神は即天津日天津日にまゐりて、御國に生れさせ給ふことをいへるを、かくは難ぜるにや。此旨は、古事記日本紀にあきらかに見え、いささかも疑ひなき事なるを、余が新説の如くいひなせるはいかに。すべて此難者の眼は、漢意の毒酒どぶにくらまされば、古書の趣も分れざるにや。但し此惑ひは此人のみにあらず、近代の神學者流も、皆かの毒酒に酔て、天照大神、天つ日にて皇國に生れさせ給へることを疑ひて、とりどりにいひまけたる。其説みな、古傳の旨に背けり。余はさやうに、古傳に背ける私事は、凡てさとらず。そもそも天照大御神と申し奉るは即天津日天津日の御事にて皇國に生れさせ給へる御事は、今さら委く申すにも及はず。(全上、一三三頁)

○「これは外國の王共の、凡夫の子孫なるに泥みていふならん。吾天照の御祖は、かゝいふ今現に天地のきはみ御照し坐、天照大御神にまゐりて、さらば凡夫にはまゐらざる。大御父伊邪那伊邪大神も、靈異之児とたまひて、大に靈く奇くまします御事は、今さら申すもあろかなり。さるは人体にして即天つ日にましますと、いはゆる天狗仙人より外に奇き物はなき事と、固陋に思ひ定めたる、儒者の狹智管見に、驚きあやしむは、たとへば、衣服は布

より外にしらざる山里人の、始めて錦衣を見て、驚きあやしみて、是はもとよりかく織りたる物にはあらじ。布と書き緑色れるならんと思へるが如し。さて又、犬戎の遠祖は犬なりといふ説を信じてながら、皇國の御祖は天つ日に坐すこと、信ぜざるはいかに。既に人と犬とは異類なるを、犬の子孫にして人あらば、天つ日の御子孫にして人に坐すもなか疑はん。とにかくに漢國の説なれば信じ、皇國の説ならば信ぜざる、偏見といふべし。(葛花下巻全上、一五四—一五五頁)

○「抑異國に天照大御神即世を照し給ふ天津日に坐て、伊勢宮はその御靈の宮なる由の傳へなくて、明の代の書なども、伊勢州天照大神所居などとはしるしたれども、その天照大神は物何やらん。(全上、一六五頁)

○「神代の神は、今こそ目に見え給はぬ、その代には目に見えたるものなり。其中に天照大御神などは、今も諸人の目に見え給ふ。(全上、一七〇頁)

ハ、直 毘 靈

○「畏くも、大朝廷に射向ひて、天皇尊をなやまし奉りし北條兼時、恭時、又足利尊氏などが如きは、あなかしこ、天照日大御神の大御蔭をおもひはか

らざる穢悪き賊奴どもなりけるに、福津日神の心はあやしきものにて、世の人のなび従ひて、子孫の末まで、しばらく榮え居りしことよ。抑此の世を御照し坐す天津日神をば、必ずたふとみ奉るべきこととしれども、天皇を必ず畏み奉る事をば知らぬ奴も世にありけるは、漢籍意にまじひて、彼の國のみだりなる風俗を、かしこきことに思ひて、正しき皇國の道をえしらす。今の世を照しますす天津日神、即ち天照大御神の御子にましますことを信ず。今の天皇、すなはち天照大御神の御子に坐しますことを忘れたるにこそ。天津日嗣の高御座は、

註ニ、天皇の御統を日嗣と申すは、日神の御心を御心として、其の御業を嗣ぎ坐すが故なり。又其の御座を高御座と申すは、唯に高き由のみならず日神の御座なるが故なり。日には、高照とも、高日とも、日高とも申す古語あるを思へ。さて日神の御座を、次々に受け傳へ坐して、其の御座に大坐ます。天皇命にませば、**日神**に等しく坐す事に決し。かかれば天津日神のおはみろつくしみと、蒙らむ者は、誰しか。天皇命には、一の畏み敬び奉りて、奉仕らざるむ。(直毘重、大日本思想全集、第九卷、二二三—二四頁)

二、伊勢ニ宮割竹の辨

○「天照大神アマテラスいとしもかしこき。天皇のオホスミツノカミ大皇祖神にましまして即高天原をしろしめして帝ミコへに今も世々天照し給ふ**天津日**の大神にましますなり。」(伊勢ニ宮割竹の辨)

古事記傳には「古事記本文の驚くべき精密な註釋をなした。もとより本文の訓詁のみにとどまらず、古道を明め、古代神話そのもの、古代史、風俗その他に亘る廣汎な研究でその價値は不朽といふべく餘りに周知のことであらう。」(大思想エンサイクロペディア三六、思想名著解説九五頁)

以上を要約すれば、宣長翁は、皇祖天照大神はまさしく天津日(太陽)にまします。神代書の記載に於いてはすべて神の行ひは尋常の道理して測り知ることの出来ぬが當然である。そして天照大神は天津日で、我國に生れられたのである。「皇國の御祖は天津日にまします皇祖は今日のあたり并しまつる天津日である。これを難するものは却つて強ひるものである。伊勢神宮には今も世々御照します天津日の大神を祭り奉ると極論して居る。即ち彼は「漢意を去り、佛意をすて、上代純真の神の道を道とせよ。即ち神と齋き祀つて産葉日神の御靈より生れた。」

「ごころ」のまゝに生活せよ」と主張した。(今上名著評選九六頁)

二、平田篤胤

古道大意

○「第四、むすびの神」の條に、

それは先づ此の世界はたいさう廣く大きいことで、國も勿論たんと有る。その中で、我々國ばかりを神國ぢやといふは、どうかうぬほれかといふ筋にきこえるけれども、上にいふ如く、萬國の公論で、それに違ひ無いといふ證據を今具に申さうならば、まづ以て世の初め、神々からの云ひ傳へに、此の天地の無きことには申すに及ばず、日月も何もなく、たゞ虚空といつて大空ばかりであつたが、その大虚空といふものは、更に――はてしなく大きいことで、實は口にては何はともかともなく限り無きことで、その限りのない大虚空の中に、天御中主神と申す神がおはしまし、次に高皇產靈神又神皇產靈神と申し上げる二柱のいとも――奇しく草も妙なる神様が在らせられたでござる。さて此の二柱の皇產靈神のそのくすしきたへなる御徳によつて、そのはてしなく限りも無き大虚空

の中へ、その形いかにいはれぬ一つの物が出來て、その一つの物が何も無き虚空の中に漂つて居る様が、たとへば雲の一村つながら所なく浮いてゐるやうであつたといふことでござる。ところが、その一つのものから、ちやうど草牙の如くびら〜と角ど又騰つたものがある。その「あしかび」といふは草の芽といふことで、即ちその立ちのぼつたる形が草の芽の吹くやうであつた故に、かやうに申し傳へたものでござる。さてその登つた物の様は如何なる物ぢやと申すに、これはいかなる物といふこと、傳へがないによつて申されぬ事ながら、こゝろみに申さば、清い澄み明かな物でござる。なぜさう申すぞとなれば、これが即ち☐となつたもので、後に天照大御神の知るしめいでより、その御体の御光りの照りいまして、まのあたり天つ日と拜み奉るを以て知るでござる。……さて此の物が、萌え上り騰るほどに上へ騰つて、した、か廣く大きくなる。たとへば山から雲の崩え出る時は細くて、いはゞ草の芽の吹くともいふべき形に見ゆれども、上へ昇つて限りもなく廣くなるやうなもので、御國のいにしへ則ち神代に、「天つ國」とも「高天原」とも申しました唯に「天」とばかり申したでござる。」(世界大思想全集「五四」一五七頁)

○第六、神代の傳説(上)

「さて、先日、の演説に申しました通り、世の始め、かの大空の中に漂つたる一つの物より葦牙の如く萌え上つて天となり、その天の根となつてゐる一つの物の底にもまた一つの物が垂れ下り成り、それに國之常立神と豊野神とがお出來なされたでござる。その垂れ下つたる物を根の國とも根之坐洲國とも申したるが、これが後に斷り離れて今日あたり見奉る(月)となつたでござる。さてその天は、その萌え上つたる始めより澄み明らかなものであつたるところを、今また天照大御神の知らしめずことゝなつて、その御光りが照り徹つて、ます、明かなのでござる。

「註」略

さて此の天照大御神の高天の原を知らしめしたと申す御傳へを世の神道學者などが、天といふは都か、ことばで則ち天照大御神を天子の御位につけ奉つたことと天に送り上げたと言つたものじやなんかと、生かいらを申すけれども、皆心にまかせたる漫言で、天つ神か御傳へ、古の天皇命の尊き思し召しで正実と御傳へ違はしたる神の御事實を解き紛らしたる奸曲、その罪輕からぬことば、

「ざる。」(世界大思想全集、日本思想卷五十四、一六八—一六九頁)

○第七、神代の傳説(下)

「かくて天つ日は上へ上つて、大空の真中にしゃんと位を定めて、外へは動くことなく、一處に在つて、右旋りにくる(旋つてある。(これ天つ日の有様なり))。さてまた大地はその天つ日を中心して、それより遙かに遠き大空を右旋りに漂ひ行きて、大周りに一周りする(これ一年なり)。たゞし此の大周りの間に自己の旋轉ありて天つ日に向ふ時は晝を成し、反ける時は夜となる。この一旋轉を一日といふ。かくの如くに旋ること三百六十餘轉する間に、大空を行き、天つ日を大周して、また本の處へ歸る、之を一年といふ。さて、また夜見の國も、此のみざりに切り離れて月と現はれ、大地の外を周行して盈虚をなし、二十九日半餘にして本の處へ復る、之を一日といふ。これ即ち天日、大地、月夜見の今の如く成り整ひたることの大略でござる。」(同上、一六七頁)

○第八、神國の由縁

「さて、四海萬國生きたし生ける物、鳥獸草木に至るまで、その御蔭に覆れることなき天つ日、即ち日輪の萌え上つたる本つ御國で、その天つ日を知らし

て、天地の有らぬ限り、に世を御患ひ遊ばす。[日の神] 天照大御神の御生國、……
(全上一八七頁)

篤胤が國學の四大人の一人であり松坂に名簿を送りて宣長翁の弟子となり、國學の研究に一生を捧げて古道の顯揚につとめた事は普く人の知る所であるが、翁は天地日月の生成を論理的に説明し、日本國は天津日の生れし國で、日輪を知らしめし給ふは日神にましますと断じたることは極めて明快である。

三、服部中庸

「宣長の親愛する門弟であり、篤胤の交情厚かつた服部中庸である。宣長の同郷人で後年京都に住し、醫を以て業とした。」彼の著述に『三大考』一巻がある……彼の學説の骨子は、この天地開闢説である……既に天照大御神坐して天に坐し、こゝに高御産巢日神と伊邪那岐命の日之少宮を圖示し、

「日也即ち高天原なりける。されば、日は天照大御神にも非ず、其所知者御國にして、大御神は日の中に坐ます神なり。日の光と見ゆるは、實は日の

光にあらず、天照大御神の御光にそありける。月讀命は月には非ず、月の中に坐ます神なり……日即ち天照大御神知者し給ひ、皇御孫命は地の皇國を所知者し給ひ……」(平松一雄著「太陽と産めし」七〇頁)

即ち日神は日を知しめし給ふと断ずることは平田篤胤翁そのまゝである。

四、伴信友

通稱説五郎、名惟徳、後信友、特事員と号す。

安永二年二月十五日若州小濱城下に生る。

天明七年十五才にて江戸に出づ。享和元年宣長に師事せんとしたが、師歿したりしかば靈前に名簿を捧げて歿後の門人となつた。かくして小濱と江戸とを往復した。

その國体觀は「竹葉秘抄」に「中外經緯傳草稿」に見ゆ。今「竹葉秘抄」を見るに、

○「謹て古曲を稽るに、天地のはじめ天神たちの命によりて事始賜ひて、伊邪那岐伊邪那美二柱の大御神最初にまづ此大御國を生成給ひ、さて次々に諸の神々

ちをなむ生給ひける。其に、天照大御神は、大御父神の御事佑しによりて、無窮に天上を知食し、また天照大御神は皇孫瓊々杵尊に葦原千百秋之瑞穂國、冥吾子孫可_レ天之地也……件の神勅のごとく御子孫無窮に動かせ給ふ事なく、天津日嗣を受傳はらせ給ふ御事になむありける。故 天皇はもとよりおのづから天下の大君主に坐して、且萬民の大御祖に坐し、萬民はおのづからの臣にしてまた御子の義相備はれる故に八百万世の末までも天地のあらむかざり、此君臣の大道動く事無く、盡る期あることなし……（日本國体論一七九頁）

○ 信友は我國体の神聖を強調し、外國人の渡來を以て **日神** の思頼によつて生れた結果であり、又天照大御神の大御靈を託給へる御所であると主張して居る。（同上、一八三頁）

○ これ我國が日の本即ち天照大御神の統治し給ふ本つ國であつて、絶對的神聖なる國体に相違なきも、世界各国は日本の枝國で同じく **日神** の國造り坐し統治あらせらるゝ國々であり、又其國々の神々も **日神** の神慮に出たものであるから、これと崇敬するは何等不都合のことがある筈がない。……と主張して居る。（日本國体論、一七三頁、橋鹿春「伴信友の國体論一八四頁」）

翁は日神は無窮に天上を知食す天照大御神にましまして、我國は大神の統治し給ふ本つ國で、世界各国は日神の國造り坐々、統治せられる國々で、日本の枝國であると論じて居る。

五、橋 守 部

守部翁の學問の根源は 天皇と國土との考察に端を發してゐる。翁の日本國体觀は大八島にのみ限つてゐなかつた。むしろ、世界を包含して一となすものを日本と見てゐる。即ち

「天に二つの日は照さず、國にふたりの君まさず。 **日御神** の照いますかざり威吾、大君の食國なり。其の國々をさむる人は威吾大君の臣也。」

（神道辨全三、三七八）（日本國体論一八三頁、清水真澄「守部翁の國体論」）

天照大神は、万天下に君臨し給ひて我國と外國との隔を置き給はる。本居翁一派はこれ更に外國を天照大神の治下から隔て、之に誹謗の言葉をあびせかけてゐるのである。されば、斯く外國を誹ることは天照大神の御意志に反することになるのである。と。（同上二〇五—二〇六頁）

翁は伊勢の人で、國典を修め、本居宣長の説に反對して一家の新意見を出し、平田篤胤、伴信友、杏川景樹と併せて天保の四大家と稱せ(日本人名辭典五三七頁)られて居るが、日神即ち太陽の照します限り大君の食圖なりと主張して居る。

六、鈴木萬年——古事記正義

○「天照大神、天照は、天に坐して、照り給ふ意、即ちまかあたり御照し坐す意、高光と云に同じ、此大御神は、即ちまかあたり御照し坐す。人体に坐す神ならず。」(水谷清著「古事記大講第十卷、一六五頁」)

天照大神は天に照り給ふ天津日にして、人体に坐す神ならずとした。

七、教田年治——古事記標註

○「天照大御神……今現に見奉る大御影は、長けい大神の大御靈にぞおはすなる。抑日ノ神は天地初発、段に見えたる如く、葦芽の如燃上り、給へる物にて、是群臣の靈徳一物と凝成りて、中天と繞り給へり、然るに二大神の天降り給ふ時は國土とも生給はざれば、何と以て晝夜を分して云ふに、國土こそ未だ生竟(オシマエ)時、

給はざりけり。おのづから地となるべき物、空中に深か浮れつるを中におきて、其外を周りに給ふゆゑに深へるものに隔てらる、時を、夜とせしは、天地成整て後も同理りなりけらし。かゝれば日ノ御靈の周りに給ふは中天にして、高天原は又其外を繞れる國なりとおぼし、然れば、日ノ御靈は、高天原よりは、下方に當れるやうに闇ゆれど然らず、天上にして、日ノ御靈の御光の利ス方とす。是は、此地球と同じ理りなるべし、……扱天照大御神坐す後は、己命の荒魂を日御靈に移給へり、是は父大神の御寄佑にて、所所高天原と詔へるに、其趣をおのづから籠れり、かゝれば、天照大御神生させ給ふまで天津日は、天之御中主神及、二柱の神靈にましまして、天鏡尊と稱奉りしを、大御神譲り受させ給ひては、今も見奉る如く大虚に懸り坐す事靈いと稱奉るもおろか也。

又大御鏡に和魂を取付けて皇孫尊に授け給ひて後は、今も五十鈴宮に坐まして、現御身は秋津御神と万代も天ノ下知食す。天皇の御祖神に大坐すは、申も更に、穴とほと穴がしこし、古語に此水徳國を神國としも言ひ継ぎ來つるは、此の御趣さに依る事也、穴たふと穴かしこし、然るに世の學者たち、天照大御神を日ノ人体と二様に分けて説けるゆゑ、其理を探究むれば、口は説淨れり……

日の御霊の質を窺ふ事は得も及びがたき至愚の勞にて、神の御上とおぼ思み奉らざる業なるをかし。(水谷清著、古事記大講 第十卷、一六六頁—一六七頁)

天照大御神を日と人体と二様に分くべからずして、日の御霊につき云々するは至愚のわざで、神の上を恐れざる所以なりと論じてとる。

八、水谷 清——古事記大講

- 第一、天照大御神は、顕界に本位を置きながら、靈を主体となし、光明を以て國土の相となし、高天原全部の統治神として、中主隱身の直統を承継し給ひ、
- 第二、月讀命は、幽界と本位に置き給ひ、闇黒を以て國土の相となし、伊邪那美神の全的方面を表現して、黄泉の靈魂王の系統を承継し給ひ、
- 第三、建速須佐之男命……。

(第十卷、一〇七頁)

○「天照大御神」は高天原の三大神力たる「タカアハラ」神に涉らせ給ふ。
「タカアハラ」は螺旋的に光明無限に遍照する意義の言霊であります。天照大御神御自体が即ち「タカアハラ」そのものに涉らせ給ふのであります。

天照大御神と申す御名も亦た既に光明遍照の義であらせらるゝ事と詳知せねばならぬのであります。「天」は三世十方に渉る無限の法界を指し、照は光明遍照の義を示してゐるのであります。

皇位の御継承を **天津日嗣** と申し上げ、皇統の皇子方を **天津日高日子** と申し上げますのも、皆か其の根源が、大御神の光明から出てゐるものたる事を詳知せねばなりません。

〔註〕 照をテラスと訓むのは、既に本居翁の論ぜられた通り、此際の「テ」と「テラス」は自動詞と他動詞の區別と見るのではなく、**「テ」**のルと延音にして「テラス」と発音したまで、あります。併し天照大御神は萬有統理の主神として「照る」と「照らす」との自他の意義を一体として、自ら照り他と自然に照らし給ふが故に、單に自動の「テ」のみでもなく、他動の「テラス」でもなく、「テラス」と一如して自他一如の光明遍照身に涉らせ給ふのであります。アマテルと申しても、アマテラスと申しても、双方共差支ないものであります。テラスを延音にした「テラス」は、自他一如の発音と見る事の出来る最も妙味あるものであります。アマテラス

「オホミカミ」と發音するのが最も適當なりと考へられるのであります。

日本書紀には、天照大御神の御出生を次の如く申し述べてあります。
「既而伊弉諾尊伊弉册尊共謝白吾己生大八洲國及山川草木亦何不生天下之主有歟、於是共生日神オホヒルノカミ。此子光華明彩、照徹於六合之内。」

(3) 最も明瞭に「タカアハラ」の神なることを申述べてゐるのであります。大日靈貴オホヒルノカミと申す御名も、また光明を申す御名でありまして、オホヒルの發音に「大日」と當てゝゐるのを見てこれを知るのであります。

〔註〕ヒルは晝であつて、天日の輝く事を申すコトバであります。ヒルコ（水姫子）のヒルも光線の発射たることは、既に前巻に述べた通りであります。ヒルコのヒルを物質本位の光とすれば、大日靈貴のヒルは靈本位の光明と見るべきであります。……
……但しこの光明、遍照と云ふ事が、單に普通我々が考へるが如き光線の遍満するといふやうな意義だけではなくして、天照大御神の場合に於ても、大日如來の場合に於ても、非常に偉大なる無限、無量の光明なる事

を忘れてはならぬのであります。科學が進んで、太陽光線の外に、種々の放射線あることを知るに至つたわけでも光明の意義が稍々廣くなつた感が致すのであります。尚ほ左様な光明をも超越して、……天照大御神の光明は勿論、大日如來の光明に於ても其が直に「蓮華」であり、また「明鏡」であり、乃至「聯珠」の無量のミヒコギであり、且又光焰であり、光輪であり、轉輪相であるといふことを知らねばなりません（第十一卷、八一—二頁）

○(一)天照大御神は常磐に堅磐に榮え給ふ常住不滅の大神に在す。この事は常立神統の御直系として、天之常立國之常之御自体の御表現に涉らせられ、過現未を一貫して三世常恒の妙体を具へ給ひ、高天原に神靈カミナリり塞りまして、彌栄えに榮え、無窮に若返りつゝ、天地としりしめし、三災を離れ四劫を脱し、極乎昭々として、輝き渉り給ふを以て之を拜知するのであります。天照大御神を單に人体の神とのみ解して居る人々の誤れるは勿論の事でありませぬが、殆どあらゆる學者が、常住不滅の大御神、金剛不壞の大御神を、世に傳へ得なかつたことを返すも遺憾としねばならぬのであります。
(全上二頁)

(三) 天照大御神は唯我独尊の御尊体に在す。

一神即萬神、万神即一神は高天原の律則でありますが、實に大御神は一切を總合し、一切を總持して、御一体の表現と爲し給ふ大御神でありせられます。其から、カケリ駢身、カケリ限身等の一切無量の神々も、要は大御神の分身の神相に外ならず、イナヒナヒナ湖つては岐美二神の假凝身をカケリ耀身統一の御神業として繼承し給ひ、御一身の外に八百万神なく、御一体の外に万生万有の表現あることなく、永遠より永遠を通じて唯一至尊の御堂体の外には、未だ嘗て何等一物の存在なく、神もなく、佛もなくあらゆる諸相を盡く具備し給ひ、無窮の榮光を顯はし給ひ、御尊体に涉らせ給ふ事が明かであるのであります。斯く時間的には三世常恒の唯我に涉らせ給ひ、空間的には高天原に神塞に塞ります。万世一系天壤無窮の独尊に涉らせ給ひ、絶對安立の聖位に鎮まりまして、諸相を脱離し、不滅を現し、金甌無缺の皇護を授けさせ給ふ大御神たる事を拜知せねばなりません。常住不滅、唯我独尊は、大御神の御本質であらせられますから、今我等が大御神の信仰に没入して、絶對信順致しまする時に於ては、我等亦た直に常住不滅を確認し乃至唯我独尊を自覺するに至るべきが當然であります。(第十一卷、三〇—三二頁)

○ 天照大御神は輝く天体として、其神身を顯はし給ひ、ツル繞り爲す御機ツルのあやのまに、ツルあなうるはしの廻緯を管み給ふのであります。斯く、大御神は其の偉大なる御神業を天体の上に施し給ふのみならず、父神より賜へる御頸珠は萬神萬生萬有の根本生命が玉之緒に貫かれた大聯珠であらせられますので、頸幽を通じ、無限廣大の境をも、無限微細鏡をも一切に涉つて到らぬ限り、御王護と御經綸とを授けさせ給ふことを拜知せねばならないのであります。(第十卷、二六頁)

附 菊花御紋章の解説

「この天津金木四柱組二百五十六組の、円輪にして直に螺旋状であり、螺旋状にして直に放線なる妙相が、畏れ多くも我が御皇室の「菊花御紋章」の大本源であります。して、莊嚴無比なるものであるのであります。菊花御紋章は、實に聯珠脈々の無限のイヤヒロドノでありまして、直にまた光明照耀の八咫鏡の御相に涉らせ給ふ事を拜知致す次第であるのであります。菊花御紋章の十六放射の各瓣々々は、六合八紘を統べ給ふ大御神の威稜に涉らせ給ふが故に、菊花御紋章は、即ちイヤヒロドノの最も理想的なる整備完璧した

る光明心殿であり、直にまたカガリミ（耀身）御自体の御極代御靈代にても在らせ給ふ事とも拜するるのであります。（第十卷、二八頁）
古事記大講の天照大神に関する所説を要約すればその第十一卷一―二頁に自ら云へる如く、

「天照大神を太陽神と致しませば、月讀命は即ち月球であるを申すことに自然成つて参りまするが、天照大神が單なる太陽神ではあられず、全高天原の御統主に涉らせられ、萬神萬生萬有の主師親三徳具備の大御神として絶対統一の權威に涉らせらるゝ以上、天照大御神は太陽神即ち輝く天体の一表現として身を現はし給ふたのであり、」

更に皇室の菊花御紋章はその御靈代にまします深き宗教的哲理に入り詳細を極めて論じ盡して居る。

第四 神道學者と日神の信仰

一、神道に於ける天照大神の御位置

神道學者によつて日神の信仰がその中心思想として取扱はれて來たことは、今更事新しく述べる迄もなく又既に本居、平田以下の諸翁について述べたが、二、に現代神社に関する研究の第一人者であり、又神道學の權威である宮地直一博士の學説は神道學界に於ける天照大神の御位置を最も明確に學的に論明したものであると思ふ。曰く

○天照大神は御系統の上よりいへば、天祖として皇室の御祖神にまします二、に根本神様を置かせられてゐるが、延いて之に附帶する第二神ともいふべき從屬的關係に立つ時は、各氏々の氏神の大元にあつて是等を統御する重心たる地位に立たせられたので、先づ以てかやうな内外二重の關係について神徳の輝きを窺ひ奉りたいと思ふ。（神社細要四二頁）

天神地祇八百万神々の中にあつて大神が最高至貴の神位にましますことは、紀紀の古傳が之を立證して餘りあるので、實に是等の古典に於ける、が國の古傳説

は、皇室を中心とするものであり、更に煎じ詰むれば、高天原に於ける天照大神の御上を本体として展開するものであるといつて宜しい。(全四三)
天照大神は惟れ祖惟れ宗にましくて尊きこと二なく、自餘の諸神は乃ち子乃ち臣にまして孰もよく敢抗へず。
(古語拾遺)

かくの如く皇室の御祖神にまします天祖天照大神を大元として諸の氏神を始め其の他の神とが統制づけられて、その間に親子といふ温い血脈上の連鎖が結ばれ、同時に君臣といふ嚴かな名分上の區別が正されてゐる。即ち整然たる系統的組織が、形づくられて、大神は根本にましく、他のすべての神々はその御許に大神の廣大なる稜威に包容せられて、それぞれの位置を占められてゐる。これ即ち先にいつた念祖の信仰が、その他の信仰の相と共にいつまでも個々分立的状態に止まらないで、之を綜合する確乎たる中心力を見出して之が統率の許に活動するに至つたことを教ゆるもの、更に進んでは、天照大神を天地を通ずる統一神として、**日神**と仰ぎ奉ることにより神道思想に完全なる中心点の打建てられたことを示す所以であらねばならぬ。(宮地直一博士著「神社綱要」四三—四三) ○「併し、漸次其の中心の神としての天照大神に對する崇拜は、一神教的傾向を帯

びに至りしことは、最も注意すべきである。かくて、天照大神の御神格に依りて結合せられたる神々の道、即ち皇祖皇宗の道であつて、垂加神道に、

「神道は天照大神の道であり、大日靈貴の道であり、日の神の道」である。云つて居るのは、それである。実に、大神の大海の如き、その御人格は、他の神々の性を歸一融合せらるる事になつたのである。これを他面からみれば、吾々大和民族の國民的理想は、天照大神の御神格に表現せらるることとなつたのである。……此の**日の神**即ち天照大神は女神にして光彩陸離、明華六合を照すばかり奇し御子とあつたと記してある、國家創設者としての偉大なる御人格を保持せられし天照大神を共同の祖先として崇敬すると共に、八百萬神は天照大神に依りて統一せられ、恰も一神教的傾向を示すこととなつたのである。此の傾向は近江、奈良朝に於ける國家統一の精神に依つて明かなる形を成すに至つたものである。

(東洋書院「神道精神」所收、伊藤千眞三「日本倫理に於ける日本精神」一三六一—一三七頁)

即ち皇祖天照大神を天地を通ずる統一神として日神と仰ぎ奉ることにより神道思想に完全なる中心点の打ち建てられたことは、神道思想の完成は日神の信仰の確立によることを証せられたものである。

二、伊勢神道と日神の信仰

○「伊勢二所太神宮神名秘書」

度會家に於て朝廷に接近し奉つた最初は、度會神道の系統中時代的に第一位を占むる、鎌倉中期の人 **行忠** ぞその著にかゝはる、……（一卷）の奥書に……内々龜山上皇の敬覽に供し奉つたとある。……

「夫日本者神胤也、**日神** 増光於億々之季葉、天下者、皇道也。天皇還德於萬々之淳朴、君被崇神之故、通三之位無窮、神令護、君之際、明一之化乃總、神者君之内証、垂迹慈悲而同塵、君者神之外用、昭儉約而治國、神威莫不從助、君德莫不屬、……といふ神皇一体の國體觀念に基いて……

（神道精神五一六頁、宮地直一「大神宮兩宮の御事」）

○「大神宮兩宮之御事」に就いて

建武中興……の後をうけて起つたのが、こゝにいはんとする、「大神宮兩宮

の御事」を徴せらるる事である。

本書は、三重縣度會郡、吉津村、河内柳社仙宮神社に、…… 縱九寸七分、横二尺五寸四分、他の神道に関する記事と合せて一卷となし、總長八尺九寸二分、

「干時興國元年七月八日始て筆を下し、同九月六日是を誌し終る」とありて、
「……大神宮佛法僧をきらはる、御事、本地□□コト外宮（天）神水徳、□□

内空^{（宮）}

ハ地神の始陰神にて火徳をそなへ給へり、是一陰一陽ノ義也……

而も大日靈尊申、大日にはたまいい（靈）なり、法佛は皆大日如來の流出也、此神ハ大日如來の靈なり、故に此神には本地なしと申也、法佛あつて末とする故に、此處に佛法僧何の用あらむや…… 天者水徳之故降而洞萬物五穀ヲ養フ天下有情非情ヲ地神ハ火徳之故、上テ照テ萬物五穀ヲ長^{（シ）}天下有情非情ヲ

坂土佛の「康永元年參詣記」 故に **日神** は陽中に陰をふくみ、月神は陰中に陽をふくみ給へり、是れ一陰也一陽也。（全上一七頁）

「大神は **日神** と仰かれ給ふに…… 天御中主神の本名とせらる、止由氣皇太神は古典に明かなる如く御饌都神にましましその神名によつて一水の徳を受け給ふ神とせられたのも、今に始め。……（全上一七頁）

「上述の如く内宮の御事は、地神の第一代として形体具備の最初をなし給うて、御名を大日要と申すといふに出發して、形体の具備と神名の謂はれとの二事を物質と精神、即ち色心二法の觀念に分けて意識すると共に、之を心法の上より論じて大日如來の靈と判じ、仍つて大神に限つて本地なく法佛は皆大日如來の流出にかゝると稱する」
(全上十九頁)

即ち伊勢神道（葦合神道）は内宮の日神即ち火徳の神に坐すに對し奉り、外宮は水徳の神にましましてその御神徳に高下ましますさざる事を主眼として勅奠したることは先に北畠親房公の信仰につき引用した中村直勝氏の所説にも明白に述べられてをる所であるから外宮の御祭神が日神にまします信仰の上に築かれた神道であることはいふ迄もない。

三、垂加神道（山崎闇齋）と日神の信仰。

「物の道理の上に於て學問の上に於て明確に日本の國体を知り、日本の道徳を知るやうになつたのは、誰のお蔭であるか……その一人は山崎闇齋先生であり、他の一人は山鹿素行先生であり、更に一人は水戸義公であります。」

山崎闇齋先生は元は僧侶で……二十五歳のとき……佛教から出られるやう

（憲友第三十二卷第八号二五頁）
平泉澄博士「國史の眼目」

になつた………佛教………特に朱子學に入られました。所が段々佛教を研究して行かれます内に儒教の中に重大な過のあることに氣が付かれ………轉じて日本の神道に入つて來られるのであります。（全上第九号八頁以下）

即山崎闇齋翁は日本精神頭場の第一人者として何人も之を認むる學者である。彼の打建てた神道が、國体神道の主流をなす垂加神道である。

○天人唯一の道について

土金の傳、龍雷の傳に次いで、垂加神道に重んずるところは天人唯一の道といふことである。

「**天日** ハ造化ノ心ナリ、人ノ心ハ火ニシテ其靈天日ト一般ニ清明ナルモノ也モトヨリ天人唯一ナレハ天日ヲ以テ直ニ人ノ心ヲサトス造化天日トイヘトモ雲霧ニ蔽ル、時ハ其明隠レテ顯レズ人ノ心ヤ天日合一ナリトイヘトモ、人欲ノ汚ニ蔽ハル、時ハ其明暗ヲシラズ（中臣拔風水草序）」

これ等によつて知られる如く、天人唯一とは天と人、未生と己生、造化と歸化、の陰陽と人の男女、造化と人事、天道と人道、天の神と人の神との全一を意味するのであつて、畢竟今日の言葉で、所謂神人合一に等しいものであつたこ

とが疑はれる。(東洋書院「神道精神」二八二頁以下、所載岸本芳雄「垂加神道と日本精神の發揮」)

○神籙磐境の傳について、

且其の極秘とする神籙磐境の傳の根本精神が、日繼君を輔翼し奉つて以て臣子の分を盡すといふことにあるのであるから、垂加神道の極意とするところが一、單皇といふ点にあつたことは、極めて明々白々の事實である。……
翁聞齋謂、道ハ則大日靈貴之道而教ハ則猿田彦、神之教也。學レ道者故テ思ハ焉(神代卷風業集類)

道者 **日神** 之道而教者猿田彦之所導也 (垂加翁神說(垂加社語))

垂加靈社 釋曰、道者大日靈貴之道也。而教者猿田彦大神之所導也。(神道初傳授) 伴部安崇は此の言葉を解説して

神道と申すは、天照大神の道なれば、大日靈貴の道と云、道主貴の道と申ても同じ事也。貴とは天が下を治めたもちたまふを云、天津日と全く御一体にて天が下を治めさせ玉ふ也。然れば神の道と申すは、日の御徳を仰ぎ學ぶことなり。目當とする所、天津日にてまします。天地とても、日の出玉はんとて、あの如く開け玉ふなり、異國の道とのちがひめは、根元爰にあり。

○續 活續録

それ故 **日徳** をよく辨へて、是に叶ふ様に學べば、冥加を得て、萬善を身に持、一身より家國天下まで皆修り整ひ、太平の化に叶ふことなり。……此の道は、大日靈貴の道にして教は猿田彦の教といふことは、實に垂加神道の根本的立脚地であつて…… (全上二八六頁以下)

○續 録

「神道相傳の義共段々承り難有感心の餘り或時先生へ申上るは……但御元祖國常立尊と奉稱を初として **日神様** の御神勅行矣寶祚之隆……」

(聞齋先生と日本精神) 平泉澄博士七一頁)

○續 録

「皇統を仰ぎ崇ぶは勿論なり。但し何時何様の衰があらふかと常々恐怖するが今日の常務なり、**日神** の詔勅に違ひの有らふ也てはなけれども清盛もあり頼朝もあり、何時將門純友が出様も知れぬ、……」 (全上七二頁)

○神學大意 (玉木正英口授、門人松岡雄洲筆記)

「ワルイ君ヤ夫ニ出合フタラ、其時ノ不仕合トシテド迄モ君ハ君ト戴キ、父ハ父ト戴キ、夫ハ夫ト戴ク方ニハ氣遣が無イ、ソレデ日本ノコトタラ又簡易

ナハ氣ノ毒ナレドモ、放伏ノヤウナ氣遣ハナイゾ、ユ、ガ神道ヲ學ブ者ノ大根ノ極リ所ゾ、猿田彦ノ迎ヘ奉テ相待ト云、**日ヲ畏レ** 敬ムハ教ト云モユ、ハバ、垂加翁ノ「道者大日靈貴之道而教者猿田彦之教也ト云ヒヲカレシモコノ詮義ゾ……」 (全上山本信哉博士「垂加神道の源流と其の教義」二二頁)

○全書神籙磐坂の大事

「**日**」ト云ハ禁中様ノコト、日ツギノ御子デ、御代々**日**ゾ、**其日様**ヲ覆ヒ守ラセラル、道ノ名ゾ、去ニヨツテ代々**御日様**ノ御座ル處ハドコゾト云ヘバ、禁裏ノ皇居ガ代々**日神**ノ御座所ゾ……神籙トアルユヘ、今日ノ神社ノ事斗ト思フハソデナヒ、直ニ禁裏様ガ神様ゾ……」 (全上二一三頁)

○玉鏡集「五百箇眞坂之傳」

「五百箇眞坂樹とは神数百本にて、玉鏡の掛らせ玉ふ榊を四方より覆ひ奉りて、森の如く立てる事也。**日神**の御神体を此の如く覆奉る。此れ神籙なり。榊を神籙と云ふは是也」

「天子は則ち今日の**日神**にて在坐」

「太陽天日・天照大神・今上皇帝は、全く御一体」

(溝口駒造著「將來の日本と神道の新使命」一〇一—一〇三頁)

山崎闇齋翁は皇祖天照大神を日と仰ぎ、神道を日の神の道と稱し日様を尊び畏れ、更に天皇を直ちに日輪と稱し、「天子は則今日の日神、皇居は直ちに日神の御座所であり、正しく、太陽、天照大神、天皇は御一体にわたらせ給ふとの神皇一体の眞理(全上二頁)に透徹して居たのである。闇齋翁こそ日神の信仰に徹して國体の精華を深く把握した哲人と信ずる。

四、崎門俊傑の國体顯揚と明治維新。

皇祖天照大神を天日と仰ぎまつり天皇直ちに日の神と稱し奉つた山崎闇齋翁の垂加神道はその門下に熱烈眞摯なる幾多の尊皇愛國の志士傑人を輩出したこととは、正に幕末史の一大偉觀であつた。

直門正親町公通は無窮紀を著し、公通の弟子跡部良頭は南山論年録を著して子弟共に南朝正統論を高唱した。崎門の三傑の一と稱せらる、浅見綱齋は特に勤王の志強く「靖獻遺言」を著してその志を述べ、その門下若林強齋は神道大意を著し、楠公を敬慕崇拜するの餘り望楠軒と號した。又直門の舊詞鍊齋・直門桑名松雪の門下栗山潜峰(保建大記を著はす)。浅見綱齋の門下三宅觀瀾・觀瀾の門下打越撲齋の四人は、水戸考彰館の總裁となりて大日本

史の編修に功を致し、水戸學の根本精神に寄與すること多大なるものがあつた。

又幕末の志士竹内式部は闇齋翁の孫弟子玉木正英の門下であり、山縣大貳は直門梨木祐之の孫弟子加賀美光章の門人である。藤井右門は竹内式部の門人であり、高山彦九郎の交友として名高い唐崎常陸介は玉木正英の孫弟子たる谷川士清の門人である。

安政勤王の傑人梅田雲嶺と有馬新七とは共に我見齋の學統に屬し、橋本左内は、三宅尚齋の學統を受けた。

以上、日本精神所收、岸本芳雄「垂加神道と日本精神」二九一頁以下及平泉澄博士「闇齋先生と日本精神」八頁参照

「斯くの如く、闇齋學派に屬する人々は、皆何れも、大義名分を重んじ、尊王愛國の念を基調とし、或は學說に於て、或は実践に於て、各其精神の実現普及徹底に努力したのであつて、然も其の大分部が、何れも多かれ少かれ直接間接に垂加神道の流を汲み、ここに我國體に對する力強き信念が、培はれ養はれてゐたことに氣が付かなければならない」（日本精神二九三頁）而も、垂加神道は、「日の神の道」であり、皇祖は因より天皇を直ちに天日と仰ぎ奉ることが、其

中樞信條なるが故にこれ等俊傑志士の信念の中心が日神の信仰にあつたことは云ふまでもないことであらう。

「又大日本史及び、日本外史の陽には殆んど、別個の働きと見えながら、内実には闇齋先生の思想と深い関係があつて、先生の精神の發現の一と考へても差支へない事を注意しよう。即ち日本外史の著者頼山陽を見るに、その父春水は塩谷道哲に學び、その道哲は、久米訂齋に學び、その訂齋は三宅尚齋の高足であり、尚齋はいふまでもなく闇齋先生の高弟であるから、（文田翁論）先生の精神は是等の人々を通じて遂に山陽に感化を映へてゐるのである。」

（平泉澄博士著、闇齋先生と日本精神二四一三五頁）

「しかも先生の學は机上の戲論にあらずして、直ちに之を實踐にうつさんとす。即ち尊王の論は直ちに斥霸の説となり、又現實に現はれて直ちに勤王の行動とならざるを得ない。こゝに時勢切迫すれば、この精神は大の如き熱を發し來つて門下身を以てこの學を驗せんとするに至る。崎門が、幾多の犠牲を出だし、幾多の肉弾を發して、明治維新の鴻業を翼賛したのはこれが爲である。」（全上三五頁）即ちかゝる大業を成就した崎門に於ける、日本精神の中核は日神

の信仰であつたのである。

第五 兵法家の日神信仰

一 北條氏長……………北條流兵學

慶長十四年（一六〇九）江戸に生れた。元和七年（翌八年素行生る）十三才にして始めて尾畑景憲の門に入つて兵學を學ぶ。山鹿素行は寛永十三年十五才にして景憲（六十五）及び氏長（二十八才）の門に入つて兵法を修めた。

（堀勇雄著山鹿素行上巻一八一頁）

○大 星 傳

一 大星トハ天ニ在リテハ日輪ナリ、地ニ在テハ天照太神也。日ハ 君ヲ象リ、月ハ臣ニ象リ、星ハ象氏ニ象ル也。人類ノ至ツテ尊キモノハ君主也、人君日徳ヲ其身ニ体シ四海ニ照臨シ玉ハバ別天下乎平也、天照太神ハ我國始祖ノ神ニシテ、直ニ日徳ヲ備ヘ玉ヒヌレバ、日ノ神ト稱シ奉リ、……………太陽精即日神也。

日ハ太陽ノ精ニシテ象星ヲ生ズ、大ハ一人也、星ハ星也、一人日ニ生ズレバ天照太神也。（同上、一九二）

明を帯ぶる時始めて神心に至るのだ。と
 天照太神は我國始祖の神である。日輪の徳を具足して地上に一人先づ生れ給ふた。我々衆民は日輪の光を受けて居る星の如きものであつて、若し我々が太陽を表象する天照太神を尊崇して太神の光を我身に受けて萬事を照らすならば、即ち此の日徳を我身に体得するならば、神心明かとなつて必勝の道が開けるのであり、茲に日本兵學の極意があると共に、人間の踏み行ふべき忠孝の道が存するのである。

「其徳全備の日輪を尊崇し奉て我が主宰とし、其光明にて萬事を照す時は七情節にあたり事に触れて應衰窮りなく必勝の道に備る也」

「如是日徳によつて立命智識ある人ならば、此身は即日神の分身、此心は、即日神分附の心なり。此の神心を人々方円の体中に備へえりもとに背ひ奉り、常に敬ひ崇んで、修力怠らざれば、大明の光を發する也。」(全上、一九三—一九四頁)

「我身は日神即ち天照太神の分身であり、我心は日神分附の心であることを知り、此の神心を我体中に備へることは、『事大星』と稱するもので……」(全五五頁)

「以上は北條氏長の兵學を概説したものであるが、其の特長は第一に兵學を戰術より教學へ、即ち一つの思想体系にまで、發展せしめたことであり、第二の特長は武士階級本位の、武士階級の爲の教學であることである……」(全上二〇一頁)

第三の特長は天照太神の信仰を基調とすること、即ち神道を其の中心的指導原理とすること……」(全上二〇三頁)

第四の而も最も重要な特長は「日本的」であることであつて、

「大星傳口訳」に「乙中甲ニテ日神分附ノ心ヲ備ヘ、流レノ御末ヲ叙ミ、修業久シクシテ其源ニ至リ、本覺ノ眼ヲ開ク傳ナレバ、其人ヲ眞ニ日神ニ引合セ奉ル心ニテ乙中甲ニテ諸ニ立テタル誓言ヲホドキ還スナリ。當流日本流ナルコト爰ニ知ルベシ」

と論ぜられた如く、氏長によれば兵學は「我國始祖ノ神ニシテ直ニ日徳ヲ備へ玉レ、天照太神の御末の流れを汲むべき道であり、日神ノ御影ニ隨フベキタメノ教レであつた。」(全上二四四頁)

とあるが如く「甲州流兵學は、かゝる戰國武士のイデオロギ―を反映して居る

のであつて、北條氏長の教説は、天照太神に對する信仰を中軸とし（全上二
三七頁）「天照太神に對する信仰こそが兵學の根本原理であることを強調して
居る。」（全上二四の頁）即ち、天照太神は日徳の神にましまし、日の顯現な
れば、天照太神の信仰は直ちに日輪の信仰であつた。そして之が自家兵學の根
本であり、純日本的なりとの自覚に立つてゐたことは大いに注意すべきことであ
る。

二、兵學諸家と武士階級

北條氏長の兵學に於て眺めた、その中心樞軸をなす日神の信仰は、單に北條流
一家の傳統にならずして我國兵法の諸家に廣く傳る思想的主流の一であること
は次の所説によつて判明する所である
「而して山本勘助の甲州流、氏長の北條流、素行の山鹿流を始め正傳流（草薙
流）河陽傳、近松傳、佐枝傳、神軍傳等の各流兵學に於て「與傳」とされて居
る「大星傳」は、支那の兵家占術には無いのであつて、日本兵學に獨特のもの
であり、「我國に於ても山本勘助以前にはその傳の確實な存在を證することが

出来ない」から「勘助を以て大星傳の創始者とする。」（全上二四の頁及び
有馬成甫氏「大星傳に就いて」軍事史研究、昭和十一年六月號参照）即ち兵
家の與傳とする大星傳の大星は即ち日輪を意味するものでありその信仰が、兵
學の中心であつたことは極めて明瞭である。之によつて之を見れば、日神の信
仰は、兵學を通じて戰國以來、深く武士階級の信仰基調をなしてゐたことは、
疑なき事實と考へられる。

第六、近世勤王の志士と日神の信仰

一、山鹿素行と「中朝事實」

山崎闇齋と略同時代にあつて、殆んど、全様の根本精神を以て其の純志至誠愛國の思想を永世に不朽ならしめたのは山鹿素行先生である。江戸に在つて「聖教要録」を著し、幕府の怒に觸れ赤穂に流された。罪人としてこゝに蟄居十年、生前何一つ報ひられるに至らなかつたが、こゝに子弟の薰陶と中朝事實の著述によつて永世に輝き渡るに至つた。

時は物徂徠が江戸にあつて東夷といひ、物茂郷と稱して一世を擧げて支那かぶれの時代であつた。先生は我國を以て世界の中心とするの意を示して支那の中華に對し中朝と云ひ、中朝事實と著した。事實は歴史の意である（憲友序三十二号所載 平泉澄博士「國史の眼目」六頁以下参照）

○中朝事實、皇統章

「伊弉諾尊、伊弉册尊共議りて曰く、吾已に大八洲國及山川草木を生あり、何

か、天之主たる者を生まざらむやと。是に於て、**日神**を生み、大日靈貴と號す。……一書天照大神と云ひ、一書に天照大日靈尊と云ふ。……此子光華明後、六合の内に照徹せり。故に二神喜びて曰く、吾息多しと雖も、未だ此の若く靈異の児有らず。……次に月神を生む。(乃木希典訓兵、乃木希典廟宇、大正十四年丙辰、敎化資料「中朝事實」賜天寶一、四六頁)

謹按。是れ中國其主を定むるの始なり。

……黄さは即**日神**、伊勢州に鎮坐す。大神宮宗廟の籤、神本朝の元祖なり。月弓尊者月神なり。是れ又伊勢の別宮たり。……(全上、四九頁)

竊に按ずるに、天神天下の主を生まんと欲して**日神**以て生る。故**日神**を以て地神の太祖、朝廷宗廟の第一とす。……(全上五二―五三頁)

○一書に曰く、**日神**天石窟に入るの時、思兼神の議に従り、石凝姥神をして、日像の鏡を鑄せしむ。初度鑄る所、少しく意に合はず。是れ紀伊國日前の神也。――次度鑄る所、其狀美潔――是伊勢太神なり。(全上、七六―七七頁)

○賞罰章

「二神共に**日神**を生む。此の子光華明彩、六合の内に照徹す。故に二神喜び

て曰く、吾息多しと雖も未だ此の若く靈異の児有らず。久此國に留むべからず。まさし早く天に送りて授かるに天上の事を以てすべし。故に天柱を以て天上に擧ぐ。次に月神を生む。其光彩日につげり。以て日に配して治むべし。故に之を天に送る。(全上、三三―三五頁)

○山鹿流兵學大星傳に於ける大星とは太陽のこゝりであつて、これは「兵法異義講録」に、「大星とは古人深く秘して名する所也。日の出づる所は勢盛なり。故に星の字を用ふる」と云ふ説あり。大星すら時あり、是を以て真理の傳起れり。傳授の式は、師弟七ヶ日潔齋して傳ふるこゝり也。委しく書き顯はさず、真理大星を傳授すべし。

日生すに云ふ心を以て、太陽を大星といふ。

また窪田清音の「大星秘録口授」に、

「日ハ陽ノ精ニシテ至尊極勢、之ニ向フモノハ必ず破ラル。之ヲ背ニ負フテ必勝ヲ得ル。日ヲ大星ト稱スルハ陰語也。」

とあるによつて明かであり、……日を背にして敵をして日に向はしむるようにするにも、太陽の位置によつて変化あることを教へたもの……(坂野雄著、山

山鹿流の兵學が其の師北條氏長にうけた日神の信仰を以て推せられ
るが、特に前掲大星傳によつて日神即日輪の信仰が依傳としてその中軸をなして
居ることは、其の秘奥を傳ふる大星傳といふ大星が太陽の陰語であること及び
これが、その奥義、秘傳であることから自明のことである。

又中朝事實の記録は殆んど、日本書紀そのまゝの引用と見るべきであるが、素行
先生の國体思想の根柢に、深き日神の信仰があつたことはその日神の御名を反覆
稱するに十一回に及ぶたることに現はれてゐるが、本書の内容を見る時殊にそ
の然る所以を知るのである。

又伊勢神宮は皇祖日神を祀り、日像の御鏡を以てその御靈代とし奉ること北島
親房公の信仰と全く符節を合するが如くである。

二、大石 藏之助

「従つて山鹿素行先生はその思想の最も円熟した最も目覺しい發展を遂げまし
た晩年といふものは罪人として遇せられたのであります。先生の生きて居られ

る間にこれといふ仕事は何一つ出来なかつたのであります。所が実に驚くべき
ことでありますが、この先生の精神がズツト後へ残りまして、先生が歿した後
に於てこの精神を受けて、日本正史の中で何人も消すことの出来なない大きな光
を發せました人物が三人ございます。第一が大石藏之助良雄、第二が吉田松陰
先生、第三が乃木大将（憲天第三十二卷、第十号所載、平泉澄博士「國史の眼目」一頁）
大石藏之助が、その大業成就の最大動因は、その師山鹿素行先生に學けた。「中
朝事實」にあらはれた國体觀念であり、山鹿流軍學にうけた。日神の信仰をな
ければならぬ。彼大石が、熱鉄の大望と、冷然として、水の如き理智に包んで、
武士道の精華たる士道の大精神を千載に垂れたのは、全くその師に學けた、こ
の信仰と思想と軍學であつたのである。

三、吉田 松陰

○開眼讀神代兩卷玉へ、吾々の先祖は誰か生んだものか、辱くも二尊に生で貰て
日神に教且浴て貰て天壤と窮りなきものが、俄に君父に負くこと勿体なくは
ないか、（松陰全集卷四六七の頁、人ノ文ヲ評シタ一節）

○恭惟神州之建基、深且遠矣、太古二尊、已生八洲、又生山川草木、因生日神、

為天下之主、日尊風神又從而生、於神州之基始建矣、**日神** 已為天下之主、

因為萬世日嗣之祖、至今凡親生于八洲者、仰山俯川、撥風氣、見月光、蒙二尊

之澤、以戴**日神**之嗣、與神世何以異哉、(卷三、五頁)

○帝二天命ヲ慎ミ今日ノ道理ニ不逆シテ天地ノ道ニ應ズル處、兵法ノ秘術ナリ、

凡ソ戰ハ不可向日、向日則必敗、其ノ據所ハ神武天皇日、向ハ國一、起リ大和ノ

國ニシテ長髓彦ト戰ヒ大ニ敗レ元ヲ始メ討死シ玉フ、軍ヲ備ノ中州ニ返シテ曰

ク、吾日ノ神ノ末ニシテ日ニ向テ戰フ、故ニ敗レ、吾德化ヲシイテ日ヲ背ニシ

テ戰ハバ勝ツコト疑ヒナシトノ玉ヒシニ果シテ然リ云々(卷一四一四頁、コレハ松陰ノ文

章ニ非ズ、山鹿流ノ大星目錄口訣ナリ)

○凡ソ人臣タル者、木生ノ前ヨリ君恩ニ生長シ一衣一食ヨリ、一田一廬ヨリ、君

恩ニ非ルハナシ、況ヤ其重祿高位ヲ世々ニスルオヤ、身體髮膚父母ノ賜ヲ所ト

云トモ父母相考ヨリ皆君恩ニ生長スル所ナレバ頂ヨリ踵ニ至ル迄、皆君ノ物ニ

非ルハナシ、瞑目シテ此身根本ノ來由ヲ思ヘハ感激ノ心悠然トシテ興リ、報効

ノ心勃乎トシテ生ズ(卷三、三七五頁)

○「吉田松陰の國體論」廣瀬 豊(日本國體論所載)

「水戸学の棟梁、會澤及豊田の連中から、日本に生れて日本たる所以を知らんて

どうする」と云はれて愕然として悟り、六國史其他の古典を讀んだ。實際吉田

家にあつた山鹿の著書は僅少で、就中國體論に關係あるは僅かに配所政筆一冊

であつた。而もこの本は兄梅太郎と松陰とが半分づつ筆寫した。中朝事實は、

安政四年の正月に江戸の久保から寫して貰つた。其時、「中朝事實遂に研究感

激の至罷在申候」と……。

松陰は水戸学の影響を受けた。會澤安の「新論」と三宅觀瀾の「中興鑑言」に

接したのがはじめ、新論は安政六年迄六回もよんだ記録がある。其他何回よん

だかわからぬ。象山潜峰の保建大記其他も愛讀した。大日本史は安政三、四年に

よんだ。

安政二年の四月から野山獄同囚の爲に孟子の講義をし。六月から更に其講義を

筆録した。之が「講孟劄記」で、安政三年六月終つた。これを同年九月の始め

に元藩校の學頭であつた山縣太華に見て貰つた。太華は林述齋の門下で、國史

論纂書を著し、一見相當の國體論家の様であつたが、元來が支那崇拜家で、朝

華論になると極めて曖昧な態度の一人であつたから、松陰のこの著を見て孔孟を侮辱し、且つ、幕府を攻撃するものと考へ、大に歎しめた批評を加へて返して来た。松陰は之を見て大に落膽し、大に論争した。その中に松陰の曰……

夫那が君臣の分明かならず、或は君となり或は臣となる。故に忠孝一致しないが、日本はさうでない。即ち天日ノ嗣永ク天壤ト無窮ナル者ニテ、コノ大八洲ハ天日ノ開キタマヘル所ニシテ、日嗣ノ永ク守リタマヘル者ナリ。故ニ億兆ノ人宜ク日嗣ト休戚ヲ同クシテ復タ他念アルベカラズ。若夫征夷大將軍ノ類ハ天朝ノ命ズル所ニシテ其職ニ稱フ者ノミ是ニ居ルコトヲ得。故ニ征夷ヲシテ足利氏ノ職職ノ如クナラシメバ、直ニ是ヲ廢スルモ可ナリ……と、

山縣は之に對して「天日とは太陽をいへるにや」と最近物理学の學説を引出して冷笑一番し、次に「日本」といふ用語の語原などを述べて居る(日本國體論ニ二頁—二四頁)六年の長きに亘つて獄中に在りて、悠々孟子を講じ、安政六年十月廿六日江戸の傳馬町の獄に殺され、小塚原の回向院に死体を棄てられたその短ハ一生が「天日」

ノ。嗣。永。ク。天。壤。ト。無。窮。ナル。者。ニ。テ。コ。ノ。大。八。洲。ハ。天。日。ノ。開。キ。タ。マ。ヘ。ル。所。ニ。シ。テ。日。嗣。ノ。永。ク。守。リ。タ。マ。ヘ。ル。者。ナ。リ。故。ニ。億。兆。ノ。人。宜。シ。ク。日。嗣。ト。休。戚。ヲ。同。フ。シ。テ。復。タ。他。念。アル。ベ。カ。ラ。ズ。と。う。不。孜。の。日。神。の。信。仰。に。住。し。て。ゐ。た。こ。と。は、本。文。を。讀。む。者。の。直。ち。に。氣。付。く。所。で。あ。る。と。共。に、先。生。は。事。に。當。り。絶。食。し。て、天。照。皇。太。神。と。藩。主。元。公。の。御。神。靈。に。祈。念。し。た。(日本精神研究方法論所載、廣瀬 豊、吉田松陰の至誠論 二九四頁参照)こ

四、乃木大將と児玉大將

乃木大將が山鹿素行を崇拜し、中朝事實を愛讀せられたことは、衆知の事實である。かゝる大將にして、其師素行先生の日神の信仰を継がぬ筈がない。「乃木大將が熱誠なる太陽崇拜者であつたことは、大將の人格から推して、言はずと知れたことであるが、日露戦争後、英國皇帝陛下の戴冠式に、東伏見宮殿下に扈從して、東郷元帥らと共に参られた際船上にて、

朝な夕な拜みまつるひんがしの空にかざやく **天津日**の神
と詠ぜられ、又その盛典に列して後、歐洲各國を巡つて帰られる時にも、やけ

リ船上で

ひんがしに豊榮登る 天つ日 のかほみちわたる大海の原
 と詠ぜられたのも明かである。(村田太平著「法悦に生く」六八頁)
 児玉大將亦た日ノ神の信仰により白露の大戦を祈られたことはよく人口に膾炙してゐる所である。

第七、學者、思想家の日神信仰

一、思想家と日神

イ、佐藤 信 淵

天文地理、動植物學より曆算測量の學より蘭學に至る迄深き造詣あり。又經世濟民の法と説く信淵の信仰が極めて論理的なのは一異彩である。

○天柱記 第一、開闢篇

……支那國の説に、太古の初め、盤古氏と云へる神ありて此の天地を造れり。日月は即ち盤古氏の兩眼なりといふ。此は我が伊弉諾大神楳敷の時に兩眼より日神月神の生れたりといふ古説と訛り傳へたるなるべし……
 (三六〇頁)

「それ萬星みな 日輪 を中心として運回するの数を知り、且つ大地の自己に旋轉して晝夜を分つの理を知るといへども、元運私運の靈機を知らざるは、例へば自鳴鐘の旋轉して時を指し且つ鳴動するは、その中に種々の車あり。

重鎮ありて自然に運回するものなりとして、人の工夫して之を造りたるものなることを知らざるが如し。……」(三六二頁)

「また『古事記』の始めに、『高天原』といへるは大虚空をさすなるべし。天地の既に開けてより以後は『日輪』を辨して高天原といふ。此の辨は下に詳かきり。……」(三六五頁)

「而してその万星既に分出し、『日輪』既に凝定するに及んで、乃ち彼の天瓊をたるものなり。これより以來彼の分生の諸星、宇宙の大氣と共に、皆『日輪』を中心となし、天柱を以て樞軸となし、恒に西より東に運ることを環の端無きが如くにして、永く休息あることなし、之を名づけて産靈の元運といふ。」(三六六頁)

「また産靈大神の神聖を生せんことを欲して効勞を極めて此の天地を鍛造し、既に神聖を得るに及んでは、何事に之を用ふるといふに、たゞこれ産靈の大業を譲るのみ。故に豊日雲神の聖徳成就するに及んで乃ち産靈の大業を悉く皇大神に譲り、遂にその身を隠し給へり。これより後は、天照大神、天上万機の大政を統べ治め、八百万の神に帝たり。……」(三六九頁)

「故に皇祖天神の、此の世界を造らば、天を以て神の居とし、地を以て人の居とし、世界あり以て靈魂の居とし。この故に生を人間に受けたる者は上天の神意を知らずんばあるべからず。既に上に論じたるが如く、人は皇祖天神の愛を矜するところにして、天照大神の煦育するところなり。(世界大思想全集、日本思想第五十四、三六〇—三六九頁)

要するに、皇祖天神は、天を神の居として天照大神天上万機を統べ、八百万神を統べ給ふ。日輪は高天原であるから、天照大神は高天原にあつて統べ給ふのである。この論であり、頗る天文学的傾向の顕著なるはその特徴である。

ロ、伊藤裕氏の日本精神原論

「我が郷土の光覺佐藤信淵翁が『天柱記』公刊の際に於ける尊に倣ひ、敢て知己を後世に俟ち以てこの業の大成を期せんと決意した次第である。(序文五頁) といはれる者有は、研究十年の結果、『我等の大始祖と仰ぐ所の神は、宇宙をれ自身の頭れであつて、宗教上の觀念の神とは異つたものであること』が分つた。(今二頁)といふ。

○第一部原理論、第一章日本精神の發詳

「太陽系の創始は即ち日本精神發祥の時なのである。」(一八四頁)

「神、即太陽ではないか。或は神は太陽を叫び、かき給ふ所の御靈を叫ぶか。元來宇宙それ自身は神であり、神は宇宙であるのであるから、宇宙を意味する天地は即ち神でなくてはならぬやうにも考へられるのである。……之を要するに、太陽と神との二者は、相即不離、一にして二、二にして一たるが如くに辨される。」(一八五頁)

「高天原は太陽系の中、天部……(一九六頁)……太陽といへども大宇宙生命の産み出せる子である。その産みの子の世界に親たる神の住み給はれぬ答もないではあるまいか。……私が神皇の示し給ふ如く高天原を天即太陽界となし、天津神のなりませる都とし、長くも天照大神の知しめし給ふ所であると信じて疑はざる所以、是に存するのである。」(一九八頁)

「特に太陽の國、即ち日の國たる高天原の大統を継承せられて、全太陽系に君臨せられ給ふ所の天照大御神様がこの地球の一角たる我が大日本國に御降誕されましたといふことは、天佑の最も大なるものでありませう。」(二七〇頁)

「遂に天照大神の御降誕となり給ひ、更に展開して、大皇家高天原の皇位を踐ませ給ふに至り、再展して、其の正嫡本幹の御子が、此の瑞穂國を治らせ給ふ萬世一系の天皇となつて、天壤と共に動きなき事となり、名實ともに日の國となり、神の國となり、日の神の本の國となつたのであります。」(二七一頁)

「天照大御神は、葦原京の千五百秋之瑞穂の國に生まれませる神様であるが、茲に、大皇家たる高天原に参り上りまして、大統を継承せられ、日の神とならせ給ふたのであります。高天原は、日の大國、即ち太陽の國の大都であります。日の國、即ち太陽の國は……(二七五頁)」
「天照大御神は、元來日の神であらせられ、日の神として、葦原京の中つ國に生まれましたが故に、國は日の國となり、日の國の徽號として、日章旗が出来たのも實に天祐と思はねばならぬ。」(二八〇頁)

○ 結論

「この大精神は、二十億年前、己の一角たる高天原に、太陽を創始された時、此處に顕はれて、其子産靈ノ神に創始せる新事業の經營一切を委任せられて

元位に遷御せられた。太陽の子たる惑星は、それ／＼皆、産靈ノ神の子達に
よつて經營されたやうであるが、我が地球は、天津神の命以ちて詔り給へ
る第一の神勅によりて、伊邪那岐ノ命、伊邪那美ノ命が御經營の仕に當られ、
この二柱の神の修理國成し給ふ所となつたのである。二神は、この大業を遂
げさせられ、我が豊葦原の瑞穂國に於いて、太陽系を統しめすべき天照大御
神を産み給ひ、「汝が命は高天原を知らせし」の第三の神勅を賜ひて、高天原へ
昇せ奉らせた。そこで天照大御神は、第三の神勅を御授けあらせ給ひて、天
孫瓊杵尊と瑞穂國の萬世一系、天壤無窮の大統の皇祖として、豊葦原瑞穂
國に天降せしめ給ひました。是に於てか、宇宙精神は、天降ましまして、大
日本精神となつた譯であります。」(五八〇頁)

伊藤氏の説が佐藤信淵翁の學説と更に、現代科學を加味して、發展せしめたるも
ので、遂に日本精神は宇宙精神であることにまで、到達して、日神の意義亦、
極めて明瞭なものとなつて居る。

ハ、日神の信仰と日章旗

別項に日章旗が論じられたからこゝに、日章旗研究の權威松波仁一郎博士の所

見を一瞥する。

○「神武天皇の皇族は即ち國旗なりと云へないこともない。天祖天照大神が、
天孫を降臨せしめ給ふたとき、その御真影は自然と皇族國旗となつたと思へ
ないこともないのである。併し、かういふことは一種の口碑傳説に止まつて
確証がないから、さういふ議論は避けることとして、太陽たる日像の確かな
文書に顯はれたのは大寶元年一月一日である。」(日本精神講堂第二卷所收、松波仁一郎
博士、「日章國旗の意義由来」二五七—二五八頁)

「我が日章旗も亦同一であつて、その精神的の由来する所は、遠く天祖にあ
りて云はれ、旗の中に自ら天祖崇拝の意義を包含してゐる。抑我等日本人の
最貴最高として尊崇するところは皇室の大祖先たる天照大神であつて、有難
いことには、大神は我々一同の共同の大祖先に坐しますのである。故にその
御方の尊影を本体的形式とする國旗は、天照皇大神は、日の神に坐し、歴代
の天子は、日の御子に坐しますことを知つてゐる。故に我々はこの御旗の
下に集り、この御旗の下に協力しなければならぬ。かくしてこそ始めて神人
一体の熱血を以て何事にも勇往邁進し得るのである。」(同上、二六四頁)

右は日章旗は皇祖日神の御尊像なることを明記したものである。

二、二宮尊徳と天照大神の信仰

○「二宮尊徳と神道」……鈴木義一氏

「釋迦も孔子も皆人であり、その物したる經書經文は偏したものであつて、決して完璧とは言はれないと考へて、これに真理を認めなかつた氣概こそ尊徳の神道人としての真面目を彷彿せしめるものである。言擧げを極端に忌嫌つた我々日本民族の祖先も亦かしの如き直観力によつて、總べての事象を認識し解釋したが故に、日本民族を永遠の彼方にまで伸展せしむる原理を把握したのであつた。尊徳が、自然を師とし、人の作爲になる不完全な書着を離れて天地の經文を心服を以て味讀したが、故に、我が民族の祖先の生活態度に接近し古道即ちまことの道を以て開闢の大道、天照大御神の大道なりと認識し得たのである。」
(東洋書院「日本精神」三三三頁)

○古道に續る木の葉をかきわけて天照神の足跡を見ん、(二宮翁夜話——日本精神研究方法論、一六〇頁)の歌と共に、翁の信仰の中心たる天照大神は、國史に現はれ給ふ皇

祖を拜するに止らず、天地開闢の大本源、大真理の絶対神にましますことは明であつて、日神の信仰の發現であることが伺はれるのである。

三、神話學者

イ、日本神話傳説の研究——(高木敏男)

著者は外國神話學の最初の開拓者である。

○「樗牛……は二神は天地の神なり、是れ後に太陽の標蹄たる天照大御神……大陰の標蹄たる月讀命、及び嵐の標蹄たる須佐之男命を生み給ひしにては知らるべし。」(六七頁)

「樗牛はその太陽神話説を証明せむが爲に、古事記より数多の徵証とするに足る可き文字を引けり。其の所説……大体に於て正當なるを認む。」(七八頁)
「嘲風が分析的解明の結果として、得たる総合的断案によれば、素尊は天上光明神に對して地下靈、**日神**に對しては月の靈、海の靈にして、社會的には天津日嗣の君に對しては敵國或は邊陲の首長、正大に對しては邪惡、温和に對しては暴威の人格の供へたり。」(七六頁)

○「天照大御神は元來太陽神であるけれども、日本神話に於ては全く英雄神に進化してゐるから、其の子孫は連綿として皇室の祖先に續いてゐる。」(二七頁)
 「日本神話の天照大御神は太陽神である。其神話は太陽神話として解釈の出来る多くの分子を含んでゐる。此神と素戔嗚尊との争に關する一段の記事が**日神**と暴風神との争の記事として説明することのできる事、太陽神話の性質が此記事の中に、殆ど遺憾なく發揮されてゐる事は今更事新しく……」
 (四三七頁)

天照大神が太陽神にまします旨を明確に認めてをることがわかる。

四、人類學者

國民の日本史「大和時代」——西村真次

○太陽崇拜(宗教の推進力)

新石器時代の終末に近ういた頃、舊世界の人類は、二つに分れて、其一半は東方を憧憬し、他の一半は西方を渴仰した。ヨーロッパの石灰横穴や、巨石古墳から発見せられる死体の多くが、東枕として仰臥されてゐるのは、彼等が西に

春づく夕日を眺め得る爲めであつた。西方洋土の觀念も、西王の信仰も、かうした基礎的信仰から其の端を聞いたのであつた。これから西方民衆の宗教に反して、東方民衆のそれは、東方に憧憬れる形式を具へてゐた。私達が、今日も尚ほ死ねば西枕或は北枕に安臥せしめられるのは、豈榮昇る朝日と望み得るやうに計畫した祖先の心的産物の痕跡を辿つてゐるのである。東方君子國の觀念も、佛法東流の信仰も、日出國の誇りも、旭日禮拜の習慣も、皆かうした東方憧憬の基礎的動因から生れた結果に外ならなかつた。太陽は人生に取つて最大最強の自然現象であり、どんな古代民衆もそれを崇拜することから免れることが出来なかつた。西の果てのエジプト民衆がラーと信じたやうに、東の果てのソングラスは、オールヒメと信じない譯にはゆかなかつた。(一五〇頁)

○「太陽複合文化」——それを新興混血民族「日本人」が建國と同時に彼等の様、の祖先から譲られたものであるといひたい。その要素を並べると、

- 一、太陽崇拜
- 二、赤色崇拜
- 三、褐色赤器

(四四頁)

○ ツングース族の太陽崇拜にも、巨石建造に類した文化を伴つて来たから……この信仰が東方崇拜といふ不思議の信仰を作り、彼等をして東方に移動せしめたこと……文獻に現れてゐる著しいものにはカムヤマトイハレヒコが生駒山脈を越えて大和に入るのは、日に向つて進む譯であるから、敗戦するのにも無理はないといつて、熊々、熊野から、遠廻りして行はれたといふ説話がある。——(四四一—四四二頁)。

○ 日の女神と火の女神(舊アイヌ種族の移住)

日と火とは彼等にまで同一であつた。日の女神が首座で、其次位に位するものが火の女神であると考えた。

……怒ろしい火の女神の常住の宿は、時には火柱を立て、常には黒煙を噴く火山である信じ、従つてそれをも崇拜する事になり、フネ、又アリの峙立つた姿の見える地方には、前よりも永く足を止めた者があつた。(富士山の崇拜)(六一頁)。

○ 琉球神話

いづれにしても、イザナギ、イザナミ両神の創造神話は、細部を除いては餘程

古い形式のもので、原日本人形といふべきものであらうことは、長い間同じ人種でありながら、懸け離れて、殆んど全く異つた生活をしてゐた琉球に残つてゐる開闢神話によつて証明する事が出来る。それは「アリキエトノオモロ双紙の二番目の「昔始めからぬ節」と題するオモロである(全文省略)。之を現代語に訳すると、「太古初めに日輪の大神の照り輝いてゐた。日輪の大神の初めに、日の神が、日の神が見送かし、俯し眺めて、アマミキヨを、召し出し、シネリキヨを召し出し、島造りを命じ、國造りを命じ、許多の島々、許多の國々、島を造り、終るまで、國を造り、終るまで……」。

二神の子の中、アマテラスは太陽神であり、ツクヨミは太陰神であり、又サハヲは暴風神であり……これを自然現象の神格化であるといふ人がある。(高木敏雄氏、比較神話学、五〇五頁以下)

○ 赤色崇拜と太陽崇拜

古代日本民衆が總ての種族を異にした他の民衆と共に、赤色染料を愛したことに不思議はないが、私は赤色崇拜が、必ず太陽崇拜に關係を有つてゐるといふことに論及せずには居られない。この太陽崇拜と赤色崇拜との存在

を併せて證明するものは、即ちいつの間にか、誰れが作り誰れが主張するともなく、自ら制定せられてしまつた日本國旗の意匠である。これは何人にも否定出来ない。日本民衆の宗教的潜在意識の外部表現であらねばならない。(四四三頁)

○天体崇拜

原日本人が崇拜した自然中では天体が最も顕著なものであつた。……彼等が尚故郷にあつた時、彼等の同族と接壤してゐた匈奴は太陽、太陰を崇拜し……ツングース族もまたそれに感化せられることを免れなかつたであらう。日本神話に於ては、これらの光体は神話化せられて、太陽はオホヒルメムチと一致し太陰はツクヨミと一致し、星辰はツツノヲと一致してゐる。しかし原日本人では、太陽が女性、太陰と星辰とが男性で、他の民衆が殆んどすべて太陽を男性、太陰を女性としてゐるのと異つてゐる。此事は日本神話の特徴で、同時に原日本人の宗教思想と、社會組織との他から異つてゐたことを窺はしめる証拠となつた。

太陽崇拜に伴ふ祭式は、土俗學的に觀れば大分痕跡が残つてゐるけれども、考

古學的にそれを證據立てることは困かしい。たゞ伊勢の二見浦に於ける夫婦岩は、忘れられた遠い昔から朝日を拜む場所となつてゐる。夏至に太陽が其岩の間から昇るといふ風に信じられてゐる。(二〇八―九頁)

附 伊勢は太陽崇拜の靈地

天照大御神が、伊勢に祭られてゐるのは、事實は太陽神との關係からのことらしい。現今でも二見浦の夫婦岩が、日之出を拜する場所となつてゐる点から見て、伊勢は古代に於て、太陽崇拜の靈地とされてゐた事は想像に難くない。事實大和地方に於て九州に於ける日向と同じ地を求めれば、それは伊勢海岸をおいては外にはない。云々といふ説もある。(水谷清著、古事記大講、第二十六卷、一四五頁)

西村博士は該博な人類學的、考古學的、又土俗學的知識によつて、太陽崇拜といふ信仰的土俗の上に立つて、天照大神が太陽神にまします旨を詳説して居られる。これは、真理に基ける信仰的眞實を、學理に基ける論理的事實によりて論究叙述したものであるが、兎に角、天照大神が太陽神にましますことは、動かすべ

からざる事實であることが、言明せられてをることとは、見違ふことは出来ぬ。

第八、歴史學者と日神信仰

一、古典其まゝの叙述に止めたるもの

イ、「帝國史略」……有賀長雄

○第一章神代、二節三神分治

「伊弉諾尊、伊弉册尊三子を生み給ふ。長子と大日靈尊と申す。光華明彩四方に照徹す。二神喜びて宣はく、「吾が子多しと雖も、未此の如き靈異なるはありず。早く天に送りて授くるに天上の事を以てすべし」と。次に月の神を生み給ふ。其光彩日に並げり。故に天に送る……」(一頁)

○第二章 神武天皇建國、二節倭ノ國及長髓彦

「五瀬、命孔待坂に於て流矢を眩暈に受け給ふ。磐余彦尊之を愛ひ策を運らして宣はく、「我等は長日ノ神の子孫なり。而るに日に向ひ虜を征す。これ天道に逆ふなり。是きて弱きを示し、神祇を禮祭し、日を負ひ影に墮つて戦はんには若かず。則及に血ぬらずして虜自ら敗れん」と(一五頁)

共に日本書紀のまゝを引用して何等の説明も加へてゐない。

二、合理的に説明せむとするもの

(4) 神代史研究——松本芳夫

○「從來日本人は、皇室の祖たる天照大神と日神なりとし、従つて原始日本民族の信仰が、太陽崇拜なるかに思惟してゐる。……而して日本の古史に於いて、太陽崇拜を立証するに好都合なる日に關したる字句は極めて多く発見せらるゝ。古代日本の男子の名にヒコ、女子の名にヒメを附するものが多く而して、これは日子、日女なりと云はれてゐる。又神武天皇がナガスネヒコ征討の時、吾は日神の御子にして日に向ひて戦ふこと良日す……日を背負ひてこそ撃ちてめ」と云つて日神の子孫なりとの信念を表明してゐる。又天照大神が日神であり、他の諸神にてその名に日字を附するもの、極めて多いことは事實である。或は祝詞の語句に「朝日の豊栄登に」「天の御蔭日の御蔭」「吾宮は朝日の日向心處、夕日の日隠る處」「天津日嗣」等があり、記紀の歌中には「朝日の咲栄え來て」「高光る日の御子」「朝日の日照

る宮、夕日の日かざる宮」とあり、其他「朝日の來向心國、夕日の來向心國」等がある。これ等によつて、古代日本人が太陽を讃美したる事實は明白である。しかしこれを以つて、直ちに古代日本人が太陽を崇拜したりと云ひ得らるゝであらうか？ 古代日本民族の信仰が、太陽崇拜なりとなす説の依據する最も根本的な基礎は天照大神が日神であるといふことである。名目上は事實さうであつて吾々は毫もこれを否定しない……（二二四頁—二二六頁）

○「吾々は天神において太陽神たるの要素よりむしろ、英雄的祖神たるの要素の多きを信せんとするのである」（一三八頁）

○「しかしこの場合の日神は祖神觀念が、太陽神なる觀念を類化してなれる天照太神を指示せるものなるが故に、太陽神そのものを意味せず、むしろ強く祖神を意味し、従つて單に神裔なる觀念が主であつて、日なる觀念は之に附帶若くは借用せるものに過ぎぬ……」（一三一頁）

この説は古代史上に於て天照大神が日神たる事實を認めながらこれを合理的、常識的に説明せむとしたものである。

(4) 日本古代史新研究——太田 亮

○第四編天神民族の故國、第十章天祖に對する卑見

「天祖の御諱について種々の説がある……即ちヒルメの尊はヒルコのみと御兄弟であらせられたが、ヒルメの尊は廣大無限の御徳を備へた人格者であつて、恰も天地を照らす太陽にも比べ奉るべき方であらせられた上に、その御名が日（太陽）と音が通ふので、後世尊に對する崇敬は太陽崇拜と混同し、尊を日の神と信するに至り、それに應じたる天照大神と云ふ御名も出來たものであらうと信する。之に反して姪子命は御徳がそのみでなかつたであらう。」（二五三頁）

これ亦、天照大神が日神たることを認めながら、御神祖たる故之を合理的に説明せんとしたものである。

(イ) 日本民族学論考——中山太郎

○四、古代神靈觀と祭祀の起源といふことについて、天照大神に對し奉る自己の學説を述べて居るが、餘りに卑俗に隨つて最多い極みと思ふが故にこゝにはその引用を省略した。

(ロ) 合理論者の動向

○新井白石

中山太郎氏は純史學者でなくして民俗學者であるが、古代神典の所傳の合理的解釈は遂にこゝまで隨つて來て、それこそ、古代人の信仰の上に築かれた神典が、合理的に解せんとして益、不合理となり、はては、畏くも天照大神の御崩年を考へ、御陵を比定せなければならなくなり、愈々不明闡黑の世界にとざされるの外はないのである。史家の中にもこゝろした自縄自縛の合理的説明を以て古代神典に向ふ輩もあることに注意せねばならない。

「白石はその著古史通に於いて神代の記事を神業とせず、凡べて人事として解釈し、神の國といふ想像世界に起つた説話でなく、みな大八洲に起つた史的事象となし、主として舊事本紀により大膽なる新解釈を加へた。」（黒板勝美博士著 新國史の研究、各説上四頁）

「白石……天之御中主 天皇も即ち人倫に坐まして上古の君主也」とし「其以下の皇神も悉く人倫に坐まして今日の人と同じくである。」（神道精粹、三五二頁）

即ち神典を合理的に皆人の世の事として説明せんとした最初の人には新井白石であった。彼は西洋紀聞等を著していち早く西洋思想を取り入れやうとしたことは明かなことであるが、この古代史を悉く人の世のこととする、即ち古代人の信仰を除外した國史研究の態度は、著しく神徳比喩の諸説を生んで、明治以後の歴史學界、殊に歴史教育上より、國民精神の中核たる國民的信仰を奪はざるに至つたのである。

その著しは一例として、

(本) 神代史の研究——津田博士

をあげよう。「其後神代史の研究に独自の見解を發表せられた津田左右吉博士はその神代史の新しい研究及び神代史の研究なる著書に於いて、記紀の神代卷をば或る時代の人の作爲の物語と考へた大膽なる前提から研究を起して居られる、この説によれば或る物語を作るのは餘程知識の発達した後のことか、あらうから、**應神天皇**、**仁徳天皇**の二朝より多少の年月を経た後、即ちいかに早くも**雄略天皇**の頃から、**継体天皇**若くは**欽明天皇**の前後に作られたものと見ねばならないとし、……」(黑板博士、國史の研究八頁) とある如く神典は

全く作爲の物語なりと断じてをるのである。

三、神話を神話として神典に對するもの。

イ、國体新論——黑板勝美

○神話

「我國に於ては國土の創造を傳へられて居る神話が二つ傳へられて居る。尤もその一は支那に起つた所謂道教の色彩を帯びてゐるもので、日本書紀の開卷第一にある……然るに今一つのものは……我民族固有のものとして考へ得られるもので、古事記や日本書紀に於る**磐・冉**二尊の大八洲生成神話である、即ち**伊弉諾命**、**伊弉冉**の二尊が淡路島を肥衣とし、四國、九州、本土を初め大小の島々と生み給ふたといふのであつて、尚ほ此等の島々と生みられた後に山川、原野を生み、更にその後水、火、風、雷等の神を生みたまへ、最後に日神、月神及素戔嗚尊へ暴風の象徴せしめらるゝ等を生み成されたこの神話の解釈についてはこれです。多くの學者が、種々の説を立て、……如何にも今日の常識から考へれば、尤も……の推測ではあるが、それ

は今日のやうに知識の程度の進んだ思想と、我々の祖先の原始時代に於ける幼稚なる思想とを同じやうに考へた誤謬に坐する説である。神話と直ちに歴史として解釈するのは、神話そのもの、研究をしないからである。知識の程度を極めて低い時代に於て出来た神話は、我々の祖先が信じてゐたまゝの神話に過ぎない。とこにその時代の社會に現はれて居る思想が窺はれる。(六六頁以下)

○太陽神

太古の神話に於いて天照大神が皇室の御祖先であらせらるゝと共に、また太陽神として崇拜せられたまふことゝなつてゐることは、先づ誰しも兼付くところである。元來我等日本民族の原始的信仰に、自然崇拜の現れて居つたことは、既に述べて置いた次第であるが、その自然崇拜の一たる太陽崇拜が、我が國家組織や社會組織と結び付けられたところに特色があり、天皇の神聖なことを示して居るのである。

固より太陽崇拜は、必ずしも我國のみの專有物ではない。……然し我が國の太陽崇拜は、たゞ單に太陽崇拜として單独に現れて居るのでなく、天皇

の御祖先たる天照大神が太陽の神格化されたものとして、神話の中に存在す。かのは注意すべきことである。

神話によれば、天照大神は高天原を支配したまふために御生れになつた御方であらせられた。そして一面に於て、天皇の御祖先たる人間神といひ、現れ給ふのみならず、また他の一面に自然崇拜そのもの、佛を認め得られることは古史をよむものが直ちに看破すべきでないであらうか。しかも大神が男性として現はれ給はず、女性として現はれたまふのに、我々の祖先が、天皇に對し奉る思想を窺ふことが出来る。

……我國の氣候が、温和であつたことは、恐らく太陽を女性と認め奉るに至つたのであらうが、その太陽が天照大神と結びつけられ、天照大神がまた女性として現はれたまふことになつたのであらう。

太陽はその光線を四方八方に極めて公平に放射するものであつて、しかもその太陽を天照大神と結びつけた場合と現はれるところの思想は、天皇が國民に對し一視同仁といふ事実の上に即して居らるゝことを思はしむる。従つて天皇の御稜威に現はれた光を受け得ないものは、其の受け得ないものゝ方に

弱点があるので、天皇はいつでも太陽の如くすべてものと同じ光を投げ
與へて居らるゝのであるといふことが此の天照大神に對する信仰にあらはれ
て居ることを考へなければならぬ。

三種の神巻の一つになつて居るところの神鏡が、天照大神の御神体となつて
居るのも、此の思想から當然起つて來べきことであつて、天照大神の詔に、
「此の鏡をみむことなほ我を見る如くせよ」とあるのも此の結びつきを説明
したるものと辨きなければならぬ。既に太陽と仰がれ給ふ天照大神は同時に
神鏡にうつされたとすれば、天照大神の大精神は又此の鏡の如く照徹隠すこ
ころなくすべてのものが最も公平に何事も有りの儘にさらけ出して國民の前
に臨み給ふことであり、同時に、天皇の御姿は恰も、鏡に映ゆる國民の姿で
なければならぬことがこゝにあらはれて居るのである。(九二頁—九六頁)
國体新論は大正十四年五月初版を出し、天皇陛下の天覽に供へ奉り、皇后
陛下聖攝政殿下の台覽を仰ぎ奉つた名者である。

著者黒板博士は、東京帝國大學教授として、文學界の大御所の一人であつた。
従つて本書の説は、最も總健中正なる、文學者の見解を代表せるものである。

即ち天照大神は、天皇の御祖先にましまして、日神(太陽)と仰がれ給ふこ
とは、日本古代以來の思想であり、信仰であつて、天皇の絶對にましますこ
と(今書九九頁)の根基をなすものなることを、ひそめて居らるゝのである。

口. 綜合日本史概説——栗田元次

「神代に於ける靈妙不思議な物語は、主として古事記、日本書紀によつて傳
へられて居るが、……これ等の物語も古人はそのまゝ事實として信せられた
が、後にはこれを合理化せんとして比喻と見る考が盛になつた。神事は人事
なりと唱へた新井白石の如きも、その主なる代表者である。然し神代の物語
の中に、假令歴史事實の反映が皆無でないとしても、總てを事實の比喻とす
ることは到底不可能である。我等はこの國民的最古の説話について、その含
む意義を考へ、上代國民の思想を見るを以て満足せねばならぬ。(栗田元次教授著
綜合日本史概説上二—二頁)

「この二尊の國生は大八洲即我國土を生まれたので、決して世界の創造では
ない。即我國土は山野草木まで、皆皇祖たる天照大神と同じ父母から生まれ
たもので、その關係は同体不離であり、初めからその主として生れた天照大

神の御子孫が、天日嗣として、永遠に統治せらるべきものであることを示して居る。その關係を生産による血族關係とした所は、族制時代だけに、これが最も重んぜられたためである。天照大神は月讀尊と共に天上に輝く日月に擬したもので、高天原へ上られたのは、天に居て此國を照し、この國を支配せられると見るべきであらう。(今上、一二頁)

「日向の高千穂峰に天降られた。……この降臨の地を日向高千穂としたのは朝日の直さす國、夕日の日照る國であり、その名の日神に縁ある上、大和から最も遙い西の端の火山は神祕的な物語の舞台として最適するためであらう。(今、一七頁)

恩師乘田先生は、教育の學府に多年文學を講ぜられ、國史教育界の最高權威であられる、この先生にして「天照大神は……天に居て此國を照しこの國を支配せられる……」と述べられたところ最も注意すべき点である。

四、國民的信仰に立脚せるもの

平泉 澄博士

平泉博士が、日本精神の鼓吹と國体明徴の爲に思想界、學界の第一線に立って敢然として、戦つて居らるゝことは人の知る所であるが、その著「聞齋先生と日本精神」及「憲友第三十二卷第七号より第三十二卷第十一号に至る講演筆記」「國史の眼目」を見るに、氏が熱烈なる日神の信仰者、山崎闇齋、佐久良東雄を讃嘆せるを以て、氏の日神の國民的信仰に對する態度は極めて明白である。殊に「國史の眼目」は昭和十三年「二月より三月にかけ四回に亘り憲兵學校の學生並に職員、憲兵司令部、東京憲兵隊職員に對し爲されたる講話の筆記」である(憲友第三十二卷、第七号、二頁)ことから見て極めて責任ある講演なることから見て、更に明瞭なりところである。

第九、宗教學者と日神の信仰

一、元享釋書——虎閑師練

師練は南北朝時代の禪僧で、十才にして叡山に入り、龜山天皇の御知遇を辱くした。學は古今東西に涉つてゐたが、國史には全く盲目であつた。曾て建長寺に寧一山を訪ひ、第二回目の會見をした時、一山は本朝高僧の遺事を問ひ、師練答ふることを得ず、この一山の質問こそ師練に深き日本思想を生み出す機縁となつた。師練は之を深く遺憾として眼を國史に向くること十四、五年、終に日本國体の世界無比なる所以を認識し、偉大なる日本思想の所有者として史上に輝やかしい足跡を遺すに至つた。彼が十五年間の業績は元享釋書三十卷である。(國史大辭典、九七三頁)

○元享釋書卷十七 王臣篇

「神世一百七十九万二千四百七十餘載、人皇二千年、一利利種系禪讓して未だ嘗て移革せず、相胤亦然り。關浮界表豈是の如き至治の域有らんや……」。

……夫物の自然たるや天下皆之を責ぶ。其の造作たるや、亦之を重んぜず。吾國史を讀むに邦家の基は自然に根さすなり。支那の諸國未嘗てこれ有らざる。是吾國を稱する所以なり。其所謂自然たるや、三神器なり。三器は神鏡なり、神劍なり、神璽なり。此三皆自然天成に出するなり。初天照太神天宮に在るや、其孫瓊々杵尊を召して曰く、葦原中國は吾孫胤統御之地也……我國一極系造端として無窮なるは、天造自然の器の致すところなり。之に因て言ふ、千万世後と雖も撥奪の虞有らざる。豈其天造神器者、佗氏異育の玩弄する所ならんや。又支那の三皇五帝は、我鸕草一神の季世なり。天日神を視れば、曩古遼邐比と爲すべからず。昌人なる故、我國皇裔五十餘世、年曆二百万載、一極並代四表撥無し……」。

師練の日本思想は決して一片の文字の主産物ではない。國体の徹底的認識より送り出したもの……。(日本精神論所載、橋本実、「日本精神の把握と國史の認識」一五〇—一五六頁)

師練は佛徒であつて純史學者ではないが、その著は、彼を宗教史家たらしむるに至つた。その著に日神に就いて詳論する所はないが、前後の所論よりしてその思

想の日神の信仰を深く内にた、へて居ることは明白である。

二、日本宗教史——比屋根安定

○(五)太陽神の天照大神

「日本書紀」が天照大神につき、「此子光華明彩、照徹六合之内」と叙し、また、本居宣長が「直毘靈」「玉かつま」「古事記傳」にて解したごとく、天照大神は、太陽神である。天照大神をもて太陽神と看做した例証は、神武天皇が、長髓彦征伐に利あらず、「吾は日神の御子にして、日に向ひて戦ふこと良らず……日と背に負ひてこそ撃ちてめ」と宣うた消息に徹せらる、

(六)月神の月讀命 (五四頁)

○「我は(神武天皇) 是れ日神の子孫として……」の傳へは太陽を崇め、方角を運ぶ信仰告白である…… (七五頁)

○「昨夜夢みたまはく、天照大神、天皇に訓へて曰はく、朕今頭八咫鳥を遣さむ……」またこれは太陽崇拝と神鳥傳説との混合である。(七六頁)

○本地垂迹説に關する傳説

「元草紙書」に、聖武天皇東大寺を創んと欲して……天平十三年、行基法師に舍利一粒を授け、勢州に詣り皇太神宮に獻せしむ……行基……還りて奉しければ、上大に悦び給へども、猶は行基を廟使とするは、朝議に協けざらんとして、十一月三日重ねて、右撰射橋公(右大臣諸兄)に勅し、勢州に詣らしむ。十五日に復命せり、その夜、夢に大神、帝に告げて曰く、日輪は是れ眞靈遠那也、帝この意を得て造宮せよと、言ひ訖りて日輪の相を現じ、その光輝々たり、帝覺めて感激し給ふ。故を以て東大寺の大佛は、高さ十六丈、蓋し毘盧に擬するなり……と。(二七五頁)

前者が信仰的なるに反して、極めて冷静に、天照大神は、太陽神なることを断じ、更に本地垂迹の説は日輪の信仰に對して、興起した旨をのべて居る。

第十、宗教家と日神の信仰

一、本地垂迹説と日神の國民的信仰

○東大寺要録卷一所載大神宮弥宜延平日記

「天平十四年十一月三日右大日正二位攝朝臣諸兄、勅使となりて伊勢大神宮に参入す。天皇勅願寺建立せらるべきの由祈らる、所なり。爰に件の勅使帰参の後、同十一月十五日夜、示現レ給ふ。帝皇の御前に王女坐しまして、金光を放ちて宣はく、當朝は神國なり、尤も神明欽仰し奉るべきなり、而るに、**日輪**は大日如來也。本地は盞舎那佛なり、衆生は此理と悟解して當に佛法に帰依すべし。……御夢覺給ふの後、張堅固に御同心発し給ひ始めて、件の御願寺を企て給ふなり。東大寺と謂ふは是なり。」（國史大辭典二七四頁）

佛教思想傳來の後日本固有の思想即ち惟神の道と衝突し我々の神々の信仰を如何にすべきか問題となつたが、その中心となすものは日神の國民的信仰であつた。こゝに、日輪即天照大神は、大日如來也との本地垂迹の説が打立てられたの

であることは、この記載によつて明瞭である。又、前記の行基に関する傳説も亦之を證明して餘りあるものである。即本地垂迹の説は、日神の國民的信仰を目標として興起したものであつて、佛教徒、就中空海はじめ眞言密教の徒は悉く日神即ち天照大神を大日如來の垂迹とし、大日如來は天照大神の本地とするの信仰を今日に至る迄繼續して居るのである。

尚上記の記載と殆んど同一の所傳は、群書類從卷第三、神祇部三、太神宮諸雜事記第一、昭和四年十月刊行續群書類從完成會發行、七十六頁に載せられてゐる。○「更に進んで理論の上では本地垂迹説となつて現れた此の説となしたのは僧行基である。行基は天智天皇の七年和泉國大島郡に生れた人なり。聖武天皇に崇信され、民間でも非常な尊敬と受け、畿内に彼の建立した寺院が四十九もあつた程である。彼の有名な東大寺も、行基が聖武帝に請ひて建立したもので其の理由次第を見ると、行基が皇太神宮に七日の祈願をなし、帝は靈夢に感じて、盞舎那佛が本地の其の迹を垂れたのが**日の神**で、兩者同一であるとの信念を得た、これが本地垂迹説の源をなすものである。」（行の皇道精神、九四頁）。

○「尚面白くことには、後世この太陽崇拜を中心として大日如來と天照大神とが習合せられて、全く同一の信仰せられるに至った事實である。是は彼の名僧行基が主唱した所であつて、遂に奈良の大佛の鑄造となつた。大佛は毘盧遮那即ち天照大御神との合体であつて、佛と本体とした。所謂本地垂迹説は當時未だ主唱せられなかつたらしいが、此精神が漸次発達して確説となり、是れより本地垂迹神道が発生するに至つた。此の場合に就いて言へば本地が毘盧遮那で垂迹が天照大御神である。」（太陽と産め、九〇頁）

二、日蓮の日神信仰——田中智學著「大國聖日蓮上人」

○「いよ／＼開宗に先ちて、一七日、降魔の大ニ昧と修し了り、自ら名を日蓮と改稱した。満願の朝即ち建長五年四月二十八日の晩天に擧げた開宗の大儀式が人間の前でなく山頂「旭ノ森」で踵々と東海を揺り出たる天地萬物の總名代、日本國の唯一表徴たる天の日に向つて為され、この時始めて「南無妙法蓮華經」の玄題を唱へ出した事」（五七頁）

○大廟の立誓

「濁つた叡山に清い法水は流れない。さらば比叡の山々よ。時は建長五年の春花の盛りの山道を、天台笠を傾けて下りてゆく出家一人。その姿は出山の釋迦に似て神々しかった。……死を以て貫かんとするこの大寺、大志の志、先づ第一に日本の宗廟たる伊勢の大神に申上げねばならぬ。此日本は「天照大神の國」である。法華經は「天照大神の心」である。一國弘通の鹿島立は、伊勢の太廟から始めねばならぬ。心中の大秘を、此神に申立てねばならぬ。往く道々には花春風に舞ひ、旅笠の上には流鶯春を送り人を迎へ、雄心勃々の裡、言ひ知れぬ幸福が輝いてゐた。」

伊勢は間あひの山やまの「常明寺」に宿り、精進潔齋して、神路山峰のあらしも澄みわたる。天祖の御座近く、黙禱祈念のまことと籠めた。神をば天照といふ。國をば日本といふ。又教主釋尊をば日蓮と申す。

（観、一八一）

日蓮上人が天照大神を云はれる事は、猶ほ法華經を云はれる如くである。天の

日。が。日。本。か。ら。始。つ。て。全。宇。宙。を。巡。り。照。す。こ。と。は、
世界を照すが如くである、日の國に、日の法華經を弘める日は、今日の神
に吾志と冥奏すべく神前に端坐したのである。太陽の児日蓮が、今 太陽の神
の、前。に。冥。奏。し。た。志。願。い。は。何。か。そ。は。云。ふ。ま。で。も。な。く、

日蓮によりて日本國の有無はあるべし！

といふ抱負である、その保証としては、意中深く藏した責任の表白たる「三大
普願」であつた。

我レ日本ノ柱トナラン！

我レ日本ノ眼目トナラン！

我レ日本ノ大船トナラン！

(全一六一—一六四頁)

○大神の國

「建長五年四月二十八日に、安房國長狹郡の内東條の郷、今は郡なり。天照
大神の御厨、右大將家の立て始め給ひし日本第二の御厨、今は日本第一なり。
此の郡の内、清澄寺と申す寺の諸佛坊の持佛堂の南面にして、午の時に此の
法門申し始め(類六二)」

これを第一の理由として、安房が天照大神の栖み給ふ國だといふ信仰から、二
の地と立宗の聖地とせられたのである。(一六五頁)

○護國漫荼羅

「上人は身延の大駁を破つて、嚴かに山上に現れた。蒙古が征東軍を繰出し、
けた五月の十五日といふに、敵國降伏の神文は、護國漫荼羅として雄觀堂
容整然と圖頭された。これに撰んだ五月十五日といふ日は、盛夏の正中で、日
のたも盛んなる時としてある。日の國の 日の神 の血を、亨けて、日の教へたる法
華經の行者が、日の子いして、日の威徳を彰はすのである。(四九〇頁)

之によつて日蓮が、伊勢大廟を日神と仰ぎて深く信仰してゐることは明瞭である。
従つて日蓮の流れを汲む法華信徒が擧つて、同一の日神信仰を有することは云ふ
までもないことで、その信徒について質せば、直ちに明瞭なる所である。
即ち真言宗に於ては天照大神と大日如來の垂跡たる日の神と特し、日蓮宗に於て
は直ちに天津日即ち日神と仰ぎ奉つてゐることがわかる。

三、聖徳太子十七條憲法講話——曉鳥 敬

○「用明天皇はまた歌うた香手かで姫ひめ皇女をもつて伊勢の日の神を祭らしめられたのであります。」（二四—二五頁）

○「神武天皇様が難波から大和の方へお這りにならうとあそばしたとき……自分おんは日の皇子であるのに、日に向つて道をとつたのは思おもひがた。自分は日を背そむくに負おんひて、日の影をふんで遠くより外とほにならぬだ。」（四二—四三頁）

「この直毘の精神の上に、こゝにお生れになつたのが天照大神即日の神でありますのであります。この日の神のお光によつて、全世界が明るく照されてゆきま

す。」（六六頁）

「日本の國の先祖は神様だ。その本は太陽だ。太陽は神様である。すべてが神様の子だ。」（二二四頁）

○その柔和を愛する日本人は、太陽を自分の祖先と崇めて居ります。天照大神を太陽あまのひとして、崇めて居ります。我々がその太陽のお照のもとにあるといふことは、非常に明い熱と光を持って居るといふことを現します。又世界中の國の中で、

日本ほど偉大な國名はないと思ひます。日の本です。世界中が太陽に照されてをる。その太陽が、我々の祖先だといふ日本人は、世界中を自分のものとして考へます。日本人は、萬物一体の魂に目覺めた國民なんです。……全世界が日本の祖先のお照しの下にある、全世界が日本だといふ大きな理想を持って居ります。……

明治天皇の御製に、

四方の海みなはらからと思ふ世に

なご波風の立ちさわぐらん

……太陽の照されてあるところは皆日本だといふ偉大な魂が所謂和であります。（二五四—二五六頁）

「あの太佛は「華嚴經」の中の毘盧舍那佛です。これは大日如來であり、又大照大神、日の神とも仰ぐことが出来るのであります。聖武天皇は行基菩薩をお使として、伊勢大神宮にお遣しになつた。そして天照大神は毘盧舍那佛であるといふ神のお告を授けられた。これによつて太佛が建立されたといふことです。大日如來は天照大神である。日の神である。天にかつては太陽と現れ、地

にあつては鏡に現れ給ふた。それを人間の姿になし、て刻んだのが大佛であります。だから奈良の大佛は天照大神で神と佛陀と一つであります。神佛一体です。(一九〇—一九一頁)

天照大神を太陽と仰ぎ、更に大日如來と同体なりとする信仰に徹した所見が明確に現はされてくる。眺鳥師は浄土教界の新人であることは世にしる所である。

四、國體の信仰と佛教——稻津紀三

○大義「杉本五郎中佐遺著」

「世界一家の達成は、天皇道に依るあるのみ。我國体こそは宇宙最高の道徳否宗教なり。世界を救ひ得る唯一無二の大真理なり。國号日本を三思せよ。太陽を國號となす大信念を省察せよ。天皇を「天津日嗣」と申し奉る正に千省万思せよ。皇國の大理想自ら明かなるべし。」

これ皇國民の心からなる叫びでなければならぬ。(七〇頁)

○「皇は……人間のために現身したまふた天神の御姿でもあるわけである……それはひびと、いふ言葉の上にもあらはれてゐる。ひびとは「日の徒」の意味だと

いふ、そして男を意味するは「日の子」、女を意味するは「日の女」である

から、人はみな太陽の子であると思ふのが、日本人の人間觀になる。(七六頁)

○「天照大神の御心をもまた大日靈尊と申し奉つてある。そして弘法大師は、法性法身の毘盧舍那如來についての「大日」といふ譯を大變重んぜられたが、そのとき大日靈尊と憶念し奉つてをられたのではないかと思はれる。大日如來は……日本の佛教に於いては大日靈尊を象徴し奉つてあることを思はねばならない。……そして方便法身として安樂國を治らし、光明名號を以て衆生を攝化する蓋十方無碍光如來は、まさに、寶林を象徴し奉つてあるものといふことが出来る。(二三〇頁)

稻津氏は宗教体験と宗教哲理とがねて達してゐる。人と思ふが、その所信は、眺鳥師と一步越えて、現人神に對し奉り如來(日神)の象徴と拜し奉らんとする信念は、たとへ遠慮しながらのべてあるにしても關齋先生の信仰を髣髴せしめるものがある。

五、本間 俊平氏

「主婦よ一家の太陽であれ、
本間俊平、

我々は神の子であるといふ大きな自覚を持って頂きたいといふことでもあります。この自覚をお持ちになると、大分今までのお考へが違つてくると思ひます。

神様はどういふお方かと考へてみますと、太陽即ち神様で、恐れながら天照大神様は太陽の現れ給ふた御方でありせられると信じます。

我が日本國は、大神様の御子孫に當らせられる大君の治しめす神國、せして我等國民は大君の子供なのであります。つまり太陽のお光を頂いてゐる國民である。各自の胸には太陽が宿つてゐるのだ。このことを自覚してください。

（雜誌「主婦之友」第二十三卷第一号、昭和十四年一月一日発行、六〇―六二頁）

本間氏が基督教徒として世に知られてゐることは申すまでもないことである。

六、黒住教の信奉する天照大神

○「心はこころ也、何かこころと申せば、日月分身こころ也。されば、我心の元は皆一つ也。其一つこそ天照大神なり。」（龜井寫本）

○「凡そ天地の間萬物生々する其元は皆天照大神なり。是萬物の親神にして、其の御陽氣天地に遍満り、一切萬物光明温暖の中に生々養育せられて思む時なし。実に有難きことなり。」（門人星島良平の「傳」）

○「太陽にしても歐米の自然科学の糟粕を嘗めてからは、一つの日球として物質化して見るこれが世間一般の常識となつて居りますが、是は大間達の邪義でありまして、精神的に見るのが本當であります。太陽を神として見ますと、太陽こそ、**日神**でありまして、天照大神が天地宇宙に光臨して在らせらるゝ、現実の御姿であります。

そして絶対なる斥力と引力とを保持し、光と熱とを發散しつゝ、一瞬の体みもしなく、爛々として動きつゝ、生きつゝ、在らせられる所の無限の一大生命こそ誠と生きものの、本体であつて無限の光門、無限の御力の根本、天地に絶対唯一の誠の

「御一心」であられます。」（倉光知天氏「天照大神の大道」一三二頁）

○「新神道諸派の中に於て、最も克く神道の真髓を闡明し、最も円満に宗教的及び道徳的発達を遂げしに止まらず、最も深く精神的にまで発達したのは黒住教である。恐らく黒住教は神道の発展すべき極致に到達したものである……」

……教祖黒住宗忠は……文化九年即ち翁の三十三歳……舟岐の疾を得た……翁病革るを知るや、其天命なるを覺悟し、今生の永訣に先づ太陽を拜し、次に天神地祇及び祖先考妣を拜し……是より一向心を以て心を養ひ、翌年三月十九日偶々病瘳を出で、沐浴して太陽を拜したところ、積日の病痲霜の如く消えて快癒した……其年冬至の日即ち十一月十三日の旦、出でて太陽を拜した所が、陽氣胸間に透徹し心氣頓に快活となつて天地生々の靈機と自得し、翁の所謂治物を捉へて天命を直受した……是れ翁が三十五歳の時であつた。是より後翁は一意神明を拜する事とし、自ら天恩の厚大無邊なるを思ふと共に、又衆庶をして普く**日神**生々の靈光に被浴せしめる事を以て天職と信じ、營々孜孜として道を説き教を弘むること三十七年の久しきに及んだ……其教旨は皇太神の遺訓を守つて、天叙の尊倫を勤カシ、常に天照太神を禮拜し……」

（太陽を産め、九四―九六頁）

即ち、黒住教は、日蓮宗の如く、又真言宗の如く、間接的の**日神**信仰でなくして、全く直接に正面から日神即太陽を天照大神と仰ぐ宗教であることは以上にて、も伺ふことが出来る。

第十一、文献に現れたる現代人の日神信仰

前掲の諸項は主として国史を一貫せる日神信仰についてその事實を眺めたのであるが、本項には現代人の日神信仰を表明せる諸文献を列挙して、日神の国民的信仰が毅然として臺頭しつつ、ある事實を一瞥したいと思ふ。

一、行の皇道精神——渡辺偉哉

○ 太陽神の崇拜は世界至る處の民族が持つ信仰だが、大和民族の場合には他民族のそれと遠つて、天照大神は事實の皇祖であり、又天御中主の神靈が皇國に具現したる靈異なる神靈で、その神靈は、御歷代に續く靈の實在を信仰してゐるのである。そして其のお徳の偉大なる所から、吾等は是を理想的に象徴し、太陽崇拜の思想と聯結し事實と理想と一如となつて崇敬して、永く國祖の神である（渡辺偉哉氏著「行の皇道精神」昭和十年發行）六四頁）

○ 「山本信哉博士は、神の力は接頭語で、意味はまゝい、例へば黒い事を萬葉集（十三卷）に「か黒し」とあり、弱き事を源氏物語に「か弱し」と云ふが如きである。神の「ミ」は「ヒ」が濁つて「ビ」となり更に「ミ」と轉じたものである。

故に「日」こそ神の本源である。

(全上、一五九頁)

「神は日である」とは、神の本源は天照大神であるといふことである。まことに吾等の大神は智情意の三者を包含してゐる。真善美をよく表現された「日の神」こそ我が民族全体の神である。あたかも太陽其の寸紅の光輝を山上に現はせば天下の闇黒忽ちに破られて萬物悉く森々羅々たる如く、太陽の光明が智慧の本源である如くである。「日の大神神」の温然によつて萬靈は為に生を悦び、百彩は為に妍を競ふのである。あたかも太陽の熱が情の本源である如くである。一陽の力よく萬星を統一し、萬有為に無限の生と發展の過程をめぐる如く、大神神の力は意志の本源である。實に大神神の神靈は智情意の本源を一身に鐘め、現實に我等が上に赫々と照覽ましますこと、あたかも太陽のその如くである。此の故に吾が上人は大神神の神靈が太陽に發現し給ふたものと信仰し、太陽を崇拜したのであつた。我等が大神は天照大神であつてはならない。神は日である。智情意の本源である。萬靈の歸する處であり、萬有の發する處である。

……本質的に天照大神と太陽の關係を説明すると、我が産靈の神の靈異なる作用、即ち産靈によつて天御中主の神の神靈が表現されたものである。一は人類を總覽統治したまふ宗家の祖として天照大神となり、一は萬物を生成化育する太陽として表現されたのである。四章の神の御言葉(本書一八三頁以下)は大神及び御歴代の天皇に續く神の本質より發する皇道精である。レ(全上一六一—一六二頁)

「我等の神は遠つ御祖である。父の父その父の父を溯つてゆく時我等は竟に我が「日の神」の神靈に達せねばならぬ。我等は實に「ヒト」(人)「日」(日)連してある。「日の神」の光胤を受けたい族である。「日の神」の生成發展したる迹

である。そして現にいま日の光を受け日の熱を享け、日の精製料理し給へる食を受けて生を營むことの出来るのは天照大神の神靈の御力によるからである。己れ神によりて生くとは比喩ではない。吾人に於ては眞に現實である。吾等は神に依りて生れ、神に頼りて活き、更に永遠に生或發展して行くのである。此富饒房も神皇正統記に云つて居る。

曰わが神は天日之靈にましまして、明德を以て照臨したまふ事、陰陽におきてはかりがたし。冥顯につき覆みあり。君も臣も神明の光胤を受け、あるは正しく勅を受けし神達の苗裔なり。誰がこれを仰ぎ奉らざるべき。……勅神を受け継ぎ給へる君は現人神におほします。換言すれば宇宙靈の本系本源即ち源靈である。(全上一六二—一六三頁)

ちよみにいふ。本書の巻頭には平沼驥一郎氏の「皇道唯一」の題字が載せられてある。

二、世界を統一するもの——大森朴堂

本書の著者は「大禮使典儀官」として大正四年十一月に行はせられた大正天皇の御即位式に参列(全書一—三頁)されたりであり、本書の巻頭には、南次郎、一戸兵衛、加藤寛治、武富時敏諸氏の題字と、小磯国照、永田秀次郎諸氏の序文とが載せられ「日本民族の天賦の禀性」と、日本精神の真髓と、我國体の本質とは、略々説き盡した事と信ずる」と著者自らその「はしがき」にのべてをる。

○「秦真次大將は「太陽と國体」といふ著書に於て、天照大御神は太陽の徳を表現するものである。従つて其傳ふる所の神祇も太陽の徳を代表するものである。

と説き、

「三種の神器は、古來智・仁・勇の三徳を表現するものと説かれてゐる。夫れも尤もではあるが、之は太陽の三大作用の表徴である。智慧の鏡は太陽の光線作用を表はし、仁の璽は太陽の温熱作用を表はし、勇の劍は太陽の生命の作用を表はしたものである。」(大森朴堂著「世界を統一するもの」(昭和六年刊)七二頁)

○「然らば鏡は如何といふに、鏡は大御神の御神勅に依れば、^{わがみたま}曰専ら我魂と仰せられて居る。こゝでは、御自身の全神格を表徴されて居るのである。其意は、大御神は、陰陽一如の大神であつて、宇宙の全一太祖神たる天之御中主大神の極徳を顕現せられて居る。日之大神、陽の神であつて、然かも女神として現はれて居ることが之を證明して居るのである。」(全上八二頁)

○「天照大御神の御神格に就いては、考古學的に、史學的に、宗教學的に、比較神話學的に、文學的に、哲學的に、各々各様の立場から、異なる意見もあるであらう。吾々は、かゝる學究的態度を避けおほらかに見るを至當と考へる。宇宙萬有を、無始無終に統制する創造の大根元、太祖神たる天之御中主大神の

極徳を顕現せられ給ふのが、天照大御神であつて、大神は伊弉那岐大神の稜核し給ふた直後に生れ給ふた三の貴の子の筆頭である。澄明の極致の神である。次いで生れ給ふた月讀命は月球を支配し、建速須佐之男命は地球を支配され、天照大神は太陽に在りて、高天原を治し給ふことは、古事記の示す所である。本居宣長大人は「天照は天に坐して照り賜ふ意」として此大神は即ち今眼のあたり世を御照し坐します天津日に坐せり、されば此御神によつて始めて御成出で坐せろぞかし」と叙べ極秀哉大人は

「日球の光明の六合に渉るべきことを知らしめず大神にまします」と説き、木村鷹太郎氏は

「大神は平和に於て、武力に於て、世界統一の神にして、天照とは希臘語にても、完全円満全權統治を意味する也」と解釋して居る。

其他大神が太陽を表現せらる、といふ意見は殆んど一致して居る。太陽が太陽系の中心として、地球月球は勿論水星より海王星までの遊星及此等

の遊星に附随する諸衛星をも統制して、天行の息まざる如く、天照大神の極徳により、萬有は化育生成の恩恵に浴して居る。大神は、太陽の化神たるが故に、太陽の徳は大御神の徳となるのである。即ち、中心体として完全なる統制を為すと同時に、光と熱とを施さる、が太陽の徳であつて、同時に大神の神徳である。三種の神器は此等の諸徳も皆包摂して居る。

天照大神の徳は、時間空間を超越して、之を統一し、一黙に凝集把握する真にあるは勿論である。

天皇の地位は即ち、天津日嗣の高御座であつて、我國統治の御地位であり、祖宗の徳を兼け紹いで、之を萬民に施すの地位である。

而して吾々は日子(彦)日女(姫)であり、赤子として共に喜服して一体を成して居る事は、一は此偉大なる天照大神の極徳に因るのである。故に天照大神は根元であつて、我國土臣民の一切を包摂した其全部である。天皇は現人神として、大神を代々に体现し給ふのである。こゝに我國体の搖ぎなき金剛不壞の力が存する。(今、九二―九五頁)

○日向岸の日出づる國の日の本に生れ得し吾々は、天津日嗣天皇の治下に、日

子として、又日女として、日の丸の旗を掲げ、悪らかなる日輪を仰ぎつ、躍進又躍進を續けて居る。

日の大神、天照大御神も照覽あれ、必らずや、吾々に幸あるやう御守護を給る事と確信する。(全、一〇〇一—一〇一頁)

「我神道に於ては神鏡を直ちに神靈として見、神鏡は天照大御神御自身の御魂であるが故に、大御神を禮拜すると全然同一である。……」(全二二—二二頁)

○「陽を表徴する左眼から、女神たる天照大御神が生れ、日の大神として現はれた如きは、意義深遠である。」(全、一五一頁)

○「鏡博士は『古い神道では左を貴びます、左は直、右は曲でありまして「直」は直の意味である。従つて左が貴く右が劣つたものと見て居る。又「皇國では天照大神を太陽に模らへて申上げて居りますが、南に向つて居りますと左から日が御出にまつて、右の方に入つてしまはれ、右に入つて光を失はれたかと思ふと、又左から出て照らさるる。従つて左を貴び右を次のものと見て居る。』と説明されてゐる。」(全、一五八—一五九頁)

三、太陽を産め——平松雄一

○「是れこそ真に光華明彩六合に昭徽する(敏日、日本書記日神出生章の文字のま、)太陽である。此の太陽國家、我が日本の真文化を八咫に光被せしめるのが天賦の使命である。」(平松雄一著「太陽を産め」昭和十二年刊、序、六頁)

○「藤田東湖の正氣歌に神州誰カ君臨、萬古仰天皇、皇風冷六合、明德俾太陽」(全四二頁)

○「我が神の道が減る時、即ち我國の終焉である。併しそれは天つ日の神の宣りませる天地のむねを窮みなき日の本の國の生命に於ては断然あり得ないのである。」(全五五)

○「これ程天孫民族は優秀にして偉大であつた。自餘の小種族の如きは旭に露の如きものであつたらう。真にそれは旭日の如き威力と恩徳とを併せて先具した優秀にして偉大なる種族であつたればこそその遠き天つ御代にも其が中心として靈徳真に天日と仰がれ給ふ天照大神は御生れました。大御神こそは、天神地祇八百万神の代表に在りまし、諸の神聖の御徳を中心に給へ給ふ至靈至徳を体现せられた御神である。」(全八一—八二頁)

○「茲に於て自然崇拜に於ける神の最も高大莊嚴なる太陽神と、實在の人格崇拜に於ける神の極致である。天照大御神との神格結合の歴史を回顧すれば、最も興味ある事である。」(全集、八七)

「されば最も正しき學說として眞に近きものは沼田噴藤の述べてゐる所だらう」と田中藤能正も詳しく論じて居られる。噴藤が「級長風」に

「道^{ちみち}早^{はや}振^{ふる}神^{かみ}代^{しろ}の故^こ事^じには、譬^{たとへ}喻^よも多^{おほ}かり。大^{おほ}日^ひ靈^{たま}尊^{みこと}は、神^{かみ}聖^{みこと}にてわたらせ給へば、父^{ちち}母^{はは}の御^み讓^{ゆる}りをうけつぎ、神^{かみ}の道^{ちみち}のまにまに、食^け國^{くに}をまつりごち、蒼^{あざ}生^うを仁^にみたまふものから、穀^こ植^うわざより、衣^い織^おすべに至^{いた}るまで、つばらかに導^{みち}き、ねもごろに教^し王^{わう}へり。その德^{とく}は、廣^{ひろ}く及^{およ}び、普^{あま}く被^かり、至^{いた}らぬくまなきこと、たとへば猶^{なほ}天^{あま}津^つ日^ひの御^み光^{ひかり}天^{あま}下^{した}を覆^{おほ}ひ、六^む合^あに照^てりとほれるが如^{ごと}し。故^{ゆゑ}に上^あが上^あ、下^{した}が下^{した}造^{つく}、おしなべて、皆^{みな}。即^{すなは}日^ひ神^{かみ}にてわたらせ給ふぞとおもほへき。か、れば誰^{たれ}名^なつけまゐらるとなう。日^ひの神^{かみ}とあかめ奉^{たが}る風^{かぜ}俗^よとはまれりけり。」

と謂^いつてゐるのは、大^{おほ}日^ひ靈^{たま}尊^{みこと}の御^み靈^{たま}德^{とく}を瞻^{あは}れ仰^{あや}して、天^{あま}照^て大^{おほ}御^み神^{かみ}とし、日^ひの神^{かみ}とし、太陽^{たいやう}の光^{ひかり}華^は明^{めい}彩^{さい}を以^もつて、象^{さう}徴^{てい}的に尊^{たが}崇^{たが}し奉^{たが}つたのである。それが後^{のち}代^{だい}に

至^{いた}つて、太陽^{たいやう}崇^{たが}拜^がの信^{しん}仰^{やう}と結^{むす}合^あせられ、因^よ襲^{おそ}の久^{ひさ}しき遂^{つい}に天^{あま}照^て大^{おほ}御^み神^{かみ}即^{すなは}太陽^{たいやう}の信^{しん}仰^{やう}と觀^{かん}念^{ねん}が構^{かま}成^{せい}せられて、遂^{つい}に又^{また}、抜^ぬく能^よはざるに至^{いた}つたのである。

斯^かくの如^{ごと}き信^{しん}仰^{やう}現^{げん}象^{さう}は、佛^{ぶつ}教^{きやう}の大^{おほ}日^ひ如^に來^{らい}と釈^{しやく}迦^か如^に來^{らい}との關係^{けんが}に於^おても觀^{かん}られぬのである。大^{おほ}日^ひ如^に來^{らい}は、太陽^{たいやう}神^{かみ}話^わの最^も高^{たか}級^{きゆう}的^{てき}のものであつて、哲^{てい}學^{がく}と宗^{しゆ}教^{きやう}の極^{きよく}致^ちを表^{あらわ}現^{げん}せるものだらう。是^{こゝ}と釈^{しやく}迦^か如^に來^{らい}とを同^{どう}一^{いつ}佛^{ぶつ}と觀^{かん}るのは台^{たい}密^{みつ}の信^{しん}仰^{やう}である。大^{おほ}日^ひを法^{ほふ}身^{しん}佛^{ぶつ}とし釈^{しやく}迦^かを応^{おう}神^{しん}佛^{ぶつ}とする。」(全集、八八—八九頁)

○「誠に天^{あま}照^てる日^ひは其^{その}の御^み靈^{たま}德^{とく}を完全^{かんぜん}に我^{われ}國^{くに}土^{つち}と民^{たみ}族^{しゆ}との上^{うへ}に與^あへ給^{たま}ふた。茲^{こゝ}にしも人^{ひと}天^{あま}感^{かん}孚^ふして天^{あま}照^てる日^ひは正^{ただ}しく我^{われ}が國^{くに}に神^{かみ}として御^み生^{なま}れましました。畏^{おそ}くも天^{あま}祖^そ天^{あま}照^て大^{おほ}御^み神^{かみ}の御^み神^{かみ}勅^{しやく}は萬^ま世^{せい}一^{いつ}系^{けい}天^{あま}壤^{じやう}無^む窮^{きゆう}の我^{われ}國^{くに}體^{たい}の基^{もと}本^{ほん}に對^{たい}する萬^ま古^こ不^ふ易^いの大^{おほ}宣^{のたま}言^{ごん}である。同^{どう}時^じに我^{われ}神^{かみ}道^{みち}の大本^{だほん}である。」(全集、九九頁)

○「我^{われ}が國^{くに}は、太陽^{たいやう}に依^よつて建^たち、太陽^{たいやう}に依^よつて照^てされ、太陽^{たいやう}に依^よつて守^{まも}らる、國^{くに}である。故^{ゆゑ}に我^{われ}が國^{くに}には、祀^{まつ}る日^ひの神^{かみ}と、仰^{あや}ぐ日^ひの神^{かみ}と、祈^{いの}る日^ひの神^{かみ}との、三^{さん}信^{しん}の日^ひの神^{かみ}在^あります。即^{すなは}ち歴^{れき}史^し的^{てき}日^ひ神^{かみ}、自^じ然^{ぜん}的^{てき}日^ひ神^{かみ}、神^{かみ}靈^{たま}約^{やく}日^ひ神^{かみ}が是^{こゝ}である。此^{こゝ}の三^{さん}信^{しん}の日^ひの神^{かみ}は、また妙^{めう}合^がして唯^{ただ}一^{いつ}絶^{てつ}對^{たい}の日^ひの神^{かみ}と仰^{あや}がれ給^{たま}ふ。日^ひの神^{かみ}長^{なが}く統^とを傳^{たづ}へ給^{たま}ふ。日^ひ子^こ日^ひ女^めはいやさかにいやさはに、大^{おほ}御^み神^{かみ}として、

天皇に仕へまへりつ、天地のむた窮みまき我が日の本の国は誠に神国である。太陽を産むといふことは此の神国の自覚を新にすることである。(全一〇八頁)

○「自然崇拝教に於ける太陽神は、進んで、神人教に於ける人格神と成り給ひ、今や神聖的なる汎神教的内在神と成り給ひ、祈り熱き者の表に産まれ給ふ。此の神や、理論的認識の世界を超越して、靈活的なる実践的認識の世界に示現し給ふ。此の神を我が表に産む。

定れ太陽を産む極致である。(全一〇三頁)

四、国体憲法學——里見岸雄著

○「かくて皇位とは何国の元首として統治権の總攬者である地位。まして「此ノ憲法ノ條規ニ依リテ行フル者としての地位よりも、本来的に古く、深き民族基本社會統治者の地位でなければならぬ。即ち現人神として尊崇敬仰され来つた地位を皇位といふのである。現人神たるの民族的信仰は、單なる政治國家的機構の中から生れ出たものではない。天照大神の御名及び、その神格といふ「アマツヒツギ」の古語といふ、いづれも太陽トテムの存在を反映するかと思はれるが、若し然りとせば、皇位なる概念は、現人神の信仰と一貫し

て、政治國家の首長たるの地位よりも更に深く、民族基本社會の内奥に於ける最尊最高の地位として把握せられたものであることは言ふ道もない。

(里見岸雄著「国体憲法學」昭和十年十月發行二八四頁)

○「皇室祭祀令制定の理由書に……蓋神人源ヲ一ニシ上下祖ヲ同クス……(全、三一六頁)

五、自治民範……権藤成卿

○「權原宮が大和に建設せられた時……鳥見山中に靈時を立てて皇祖の靈を祭られたる詔に「郊祀天神用申大孝」と言はれたのは、親しく國民に先だちて追考の儀範を示されたのである。天神といふのは皇祖在天の靈を指して斯く稱せられたことは勿論にして……」

(権藤成卿著、自治民範、昭和七年版、二五〇頁)

○「崇神天皇の時に至て、国情急変しや、中央集權の必要を感せられ、茲に於て日本民族古来の信仰により「太陽」を伊勢に祭つて之れに「皇祖天照太神を配せられ、祭政を介離し、不逞を討伐せられ……」(全、五二九頁)

「雄略天皇の時に至つて、是れもかの太陽と同じく、日本民族古来の信仰たる

五穀の鹽を丹波より伊勢の外宮に移し、之に等し 皇祖に待して衣食住の斡旋に當りたる豊受姫神を配せられて、國民に社稷の重んずべき所以を示された。(全集、五三〇頁)

本書はその凡例によれば、一本書大正八年五月稿を起し、十一月業を終へ、後篇八講は、皇民自治本義と題し、自治学会之を刊行し、御台覽の栄を蒙り、己に五版を重ねたり。(全集、一七頁)となり、又、巻頭には「宮中顧問官公爵藤原朝臣實輝上レ大正九年二月の上表が掲げられて居ることによつて本書の巻間の著書とその選を異にする所以を知ることが出来る。又著者の人為は世間周知のことである。

六、將來の日本と神道の新使命——溝口駒造

○「此の二神の修理因成の事業に於て、最も輝きある事蹟は、日の神大日靈貴の生誕である。(書紀本文引用)と雄勁を調子の文で書き現してゐる。此の事は伊弉諾、伊弉丹二神の修理因成事業の完成を語るもので、其の修了と共に、英主を撰んで宇宙の主宰者と定められたのである。」(溝口駒造著「將來の日本と神道の新使命、昭和十二年刊、九〇頁)

○「殊に我々の神代史を強力に權威づけけるのは、この天孫の降臨が宇宙の主宰神にして且つ太陽神の靈光を以て名づけられ給ふ天照大神の神勅と、ムスビの靈徳を具有する高御産巢日の神勅とを以て送られた事である。」(全集九四頁)

○「皇師が孔舎衛坂の隘路で長髓彦軍に前進を遮られたため草香津方面に迂回行進せられたとき、背に「日神」の威を負ふて進み直したといふ書紀の記述は、其ま、に神意の奉行を語るものと云はねばならぬ。」(全集、一〇四頁)

七、日本信仰——加藤一夫

○「われ／＼の祖宗もまた太陽を尊崇されたであらうと云ふことである。そしてかう云つたことからわれ／＼は、津田左右吉氏の如く、わが國には太陽崇拜の事實がないなどと云ふことが出来ず、太陽崇拜の信仰から天津日嗣と云つたやうな大思想も出で、大日靈貴または天照大神または天照大日靈尊、と云つたやうな御盛徳をわれらの皇祖に奉るやうになつた事情をも知ることが出来るのである。」(加藤一夫著、日本信仰、昭和十三年版、四四頁)

○「私はこの物語(建國神話を指す)によつて、日本建國の心理的事実を知るこゝとが出来るからである。更に詳しく云ふならば、わが古代日本人が日本の建國

に當り、何と云ふ精神で國を肇めたかと云ふことを知るし共に、その精神は信仰まじには發露し得なかつたと云ふことを悟り得るからである、そしてそれは、たとひ純粹の歴史的事實でよいとしても、心的歴史の第一階段を示すものであるといふことに於て、甚だ重要なる記録なのである。

一、日本は神の御こ、ろによつて肇められた國である。

二、神はこの日本國の主であり、日本國は永久に神の國である。

三、神國日本は、神によつて治めされ、神によつて保たれ、神の御意志の行はれる國である。

四、神はこの日本國に永遠無窮の皇統を垂れさせ給ひ、日本國を天つ日嗣の國たらしめる。(全四六一四七頁)

○「日本人の太陽崇拜は、後に、大日靈貴、もしくは天照大御神を日神として崇拜したと云ふことによつても知られる。たゞこの思想には甚だ複雑な要素が含まれて居ると共に、甚だ高尚なものと成つて居るから、これをもつて直ちに、天崇拜といふことは出来ないだけのことである。日本人が高天ヶ原の主であり、日本の主であり、皇祖の神であるところの天照大御神をもつて、日神

に擬へたと云ふことから考へて、日本人が、如何に太陽を崇拜して居たかといふことがわかる。(全、七〇頁)

八、皇統國体精義——四宮憲章

本書の著者は皇明會長大教正といふ肩書があり、その巻頭には「右ハ 天皇、皇右兩階下、皇太后階下ニ献上被致候ニ付 御前へ差上候段申進候 昭和二年九月五日 宮内大臣一木喜徳郎 四宮憲章殿」と記された、本書三冊御献上申上げたことに対する宮内大臣の一書の寫眞が掲げられてあることによつて、本書の性質の主要を知ることが出来る。

○「會澤正志齋が新論に、天つ日嗣、世々宸極に御し、終古易らず、國とに大地の元首にして萬國の綱記まり、誠に宣しく宇内に昭臨し、皇化の及ぶ所、遠通あることなかるべし。

といつて居るが、此の理想は、克く天照皇大神の御名に現はれて居るのであつて、本居宣長は、古事記傳に於て、天照大御神の照はテラスと讀むべきで、そのテラスはテルの延音であると解して居る。げにテラスを他動詞的に見るよりはテルの自動詞に解する方が大御神の大神格から考へてもせうでなくてはなる

まい、而して宣長は四海萬邦この御徳光を蒙らまいことはなく、何れの国もこの御徳光を蒙らまいことはなく、何れの国もこの大神の威徳に依らなければ一日片時も立つことが出来まいと云つて居る。然り實に然りである。大神の御威光は東西を問はず、古今を論せず、時間空間に彌倫し遍満し居るのであつて、その御威徳は、總てひとしく平等的に全世界の人物に及ぶのである。これ我皇道の以て人道的たるるところにして、亦以て皇國が平等博愛の思想を以て建国とする平和主義たるの國体たるをも證し得るのである。

本居宣長の歌に曰く

さしいづるわが日のもとの光より

こまもちこしも春を知るらん

（四宮憲章著 皇國國体精義、昭和三年第三版一七五—一七七頁）

と本居翁並に相澤正志齋の所説をそのまゝ引用せることにより著考の天照大神神に対し奉る見解は明瞭である。

九、國家と宗教——田川大吉郎

○「斯の如く、父母、祖先を以て神に配する。神に配して父母祖先を祭ることとは、

日本にも行はれたが、それは、支那のみに行はれて、日本には行はれなかつたかといふに、私は日本にも行はれたと思ふて居る。例へば

人皇の世に及んで、太神を尊崇し、以て日に配し稱して **日神** と曰ふ（**國史略**）

とある。この太神は、畏れながつ、天照太神のことである。天照太神を尊崇し日に配し奉つたと申すのである。（田川大吉郎著、國家と宗教、昭和十三年發行、二三四頁）

十、神道の宗敎学的研究——加藤玄智

著者加藤博士が、宗敎学者として、殊に神社對宗敎の問題について造詣深きことは云ふまでもないが、今、本書に收められた日神信仰に関する、部分には、今直ちに手にすることの出来まい文献が多いこの真で誠に貴重な史料である。

○「初め聖武天皇が、奈良の大佛を御建立になつた時は、天照大神が、神の政許を夢の中に、天皇に與へられたのに由ると傳へられてゐる。元亨釋書（一八一）に曰く

其夜、上夢、皇太神告曰、

日輪

是毗盧遮那也、帝得此意、為興營、言こ

現曰輪相其光赫如也帝覺感敬（系、一四、九四三）レ（加藤玄智博士著、神道の宗敎学的研究 一九〇一頁）

○「籙氣記曰く、伊勢所宮、無始無終、大元宗神、亦一念不生神（續群書類從、五九、三、一三二）也

御流神道口決鈔に曰く、「天照大神者、本覺之正体、周遍法界、無始無終之体也、天照大神者、正座天上、常照一法界、利萬類之天曰、是れ熊澤菴山が、その実体天地一源の神道也（三輪物語、三、神道叢説、八〇）といつた所以である。

多田孝泉は此意を得て、宇宙萬有に、汎神論的解釈を施して曰く、「花に啼く鶯は妙經を誦し、水にすむ蛙は和歌を吟ずる、皆これ、かれは知らずとも、我が眼の前には、かけまくも畏き天照大御神の御光にまむありける。（略解古事記三、五〇）也

黄鳥の啼々たるにも、蛙声の聞々たるにも、天照大御神の靈光を拜するに至つては、是れ則ち萬有神教である。井上正鉄公亦歌つて曰く
忘る、ま天照します大神の

御末まりける此身まりけりレ

（全、二〇〇一—二〇一頁）

○「矢名氏の日本紀神代口訳（下）に曰く

天下皆 **日神** の齋度まり、本心発見大語了すれば、一心の **日神**、五体の齋度を、自由にきこしめすまり（東京帝國大學圖書館本）（全二〇七頁）

○本朝文集（六七）載、天原長成の贈蒙古國中書省牒（文永七年正月）に、凡自天照皇大神、耀天統至日本今皇帝受日嗣聖明所覃、莫不屬七廟右稷之、得一無二之盟、百王之鎮護孔明……故以皇土永號神國非可以智競非可以力爭（日本國太政官牒蒙古國中書省、附高麗使人牒送、東京帝大史料編纂部）（全上、二五六頁）

○「神道はその起源に於ては多神教であつたが、時代精神の進歩と共に、萬有神教や唯一神教や、哲學上の唯心論的傾向や、諸種進歩した方面を發露し來つて、こゝに佛敎中に於ける大日蓮即ち摩訶毘盧遮那 *Ma hā Vairocana* と、天照大御神とを融合歸一するに至つた。我國太古の神話に於ては、本居宣長の云ふて居る通り、眼に見へる儘の物質的太陽そのものに外ならなかつた天照大御神も、宇宙に遍在する一大心の靈光と見うる、に至つた。故に辰會家行は曰く

大日靈貴尊、此名**日神**也、日則大毘盧遮那如来智慧毘之應變化 即除
暗遍照之義也 (類聚神祇本源、三、續々群書類從、二七)
御流神道口決鈔に曰く

天照大神者、本覺之正体、周遍法界、無始無終之体也
廉氣記に曰く

伊勢西宮、無始無終、大元宗神、亦一念不生神 (續群書類從、五九、經、三、
一三二)

斯くして、聖武天皇御建立の奈良の大佛は、天照大御神と盧遮那佛大日との一
致融合の思想信仰の上に出來上つた産物と考へらるゝに至つて、此に同一神人
同格教系の神道と、佛教との堅き握手は、自然の結果として成遂せられたので
ある (全集、二八八—二八九)

○「皇祖に在す所の天照大御神の靈は、佛教哲理の最終原理である盧遮那佛と同
一視せられて來ることには、前既に説明した通りである。斯くして天照大神は宇
宙に満ちたる無限遍照の一大靈光として寫象せられ、宇宙萬有は、皆此光輝の
一顯現と考へらるゝに至るのである。故に多田孝泉は

春の花秋の紅葉もおしなべて天照る神の光まりけりと歌む……

斯くの如く考察して來ると、天照大御神即ち我が皇祖の靈は、直ちに又宇宙に
遍滿せる大實在であり、十方世界をも照耀する所の普適の大光明となつて來る
而して神道は元來神人同格教であり、十方法界外をも照耀する所の普適の大光
明となつて來る。而して神道は元來神人同格教であるから、各人は又是れ天照
大御神の一顯現とも考へらるゝのであつて…… (全集、二九五—二九七)

○「平田篤胤翁自身も、亦天照大御神に就いて左の如き見解を述べてゐる。

与宇恐天照大御魂は、伊勢の内宮にましまして、御本体は世界萬國を照し給
ふ **日輪** に被遊御座、皇國は其御誕生の御本國にて、天皇はその御子孫
に被爲在候へば、世界萬國悉く皇國に従ひ奉る可きは勿論の事に候。

(大道慈周、全集二、三) 曰し (全集、三〇九)

十一、神道の話——小倉鏗甫

○「(伴部安崇先生曰く) 神道と申すは天照大御神の道なれば、大日靈貴……の
道と云ひ、**道主貴の道**と申しても同じ事也。(中略)
されば、神の道と申すは、**日の御徳**を仰ぎ学ぶこと也。目當とする所天津日に

てまします（神道所傳口授）

（小倉鏗爾著、神道の話、昭和十三年刊、一四頁）

○「（堀秀成先生曰く）さてその神性とは（中略）皇祖神の定め給へる法は即ち神道にて、其法の隨に天の下治め給ふをいへる言にて（中略）

その天の下治め給ふ御業は、**天津日の神**より嗣々に嗣ぎ傳へ給ひし御業なる由を知るべし。（古道提綱概略）

（會澤安先生曰く）神州は**日の神**の御國にして、太陽の光りを發する所なれば、上古より神聖の君、民を教へ給へる道も、自ら正大光明にして、天日の照臨ましますが如く毫釐も暗きことなく、知り易く従ひ易き大道なり。（迪華篇）（全、三〇）

○「（文学博士山本信哉先生曰く）……既に惟神の神は天照大神であると認むる時は、惟神の道は即ち天照大神の道であることは固より當然である。天照大神は其のお徳を太陽になぞらへて居ります。あらゆる物質に光と熱とを與へる太陽、此のお互日本人のみならず、全人類に光と熱とを與へさうして全人類に生命を與へる所の太陽の徳は、如何にも公明正大であつて、之と國語では清き明

き直き正しき誠の道といふのである。千古変らず、如何なるものでも公平にお照しになる。これを教には**日の光**ゆぶしむわからず**山**まじと申します。太陽の光が如何なるものでも如何なる處でも區別しないうで、公明正大にお照しになつるといふ事をかう申したものであります。此の太陽の公明正大なるが如く、清き明き直き正しき**日**まこと**山**の心を持つて居られる御方が即ち我が皇室の御先祖であらせられる天照大神であります。……（「日本精神文化」第一巻第一號所載「日本思想史摘録」）（全、三九―四〇）

○「（文学博士加藤玄智先生曰く）更に黒住教を例證して考へて見ると、黒住教は全光教とは遠つて、其祭神は、日本國家の皇祖に在す神、天照大神である。伊勢の皇大神宮に奉祀せられた神様である。國家宗紀の神に在す。然し黒住教の奉祀する天照大神は、伊勢神宮の天照大神とは自ら其性質を異にして、黒住教の開祖黒住宗忠個人の宗教体験に映じた天照大神である。日本國民ならば、誰れも彼れも取り除けなく奉祀する皇祖たる天照大神ではなく、黒住宗忠個人の特殊の宗教経験に上り來つた天照大神である。……そこに古典上の天照大神と遠つた方面の天照大神が黒住教に於て現はれ宇宙に遍満する至誠と我々人

闇の心と天照大神とは、畢竟一に帰すると立てて来る天照大神の信仰である。これは一方では人心の中に内在する天照大神に在すと同時に、宇宙原理の至誠そのものに外ならない。斯る天照大神は、人々具足備々円成である。斯く天照大神を解釈し来れば、それは我國家の歴史上に所謂天照大神で無く、全宇宙各個人に遍在する天照大神である。又道德的に云へば、それは至誠そのものに外ならないと云ふことになる此に黒住教が伊勢大神宮と同一祭神、天照大神を奉祀し乍ら、その教は既に國民的宗教の範圍を脱して、世界的宗教の國內に一步履み込んだ所以である。故に黒住教は金光教と同じく、神道の中に現はれた普遍的宗教であると云ふことも出来よう。(神道の再認識) (全五四頁)

○「文学博士飯島忠夫先生曰く」それで幽谷(藤田幽谷)は日本の道を説く時にも、我が國と支那とは遠つて居る。神と天とが合一して居るのが日本の國体であると言つたのであります。神天合一といふことは、どういふ意味かと調べて見ますと、神といふのは、皇祖天照大神のことです。それから天といふのは宇宙に於ける天でありまして、儒教でいふ天であります。(中略)天の神様と、皇祖の神様と合一してお出でになるのが、天照大神であります。(中略)

祖孫が祖を天とし、天を祖とする云々と説いたのを、平田篤胤が賛成した學說と同じものであります。それが後期の水戸學の根本教として入つて来たのであります(皇道思想の覺醒) (一)

○「かゝる御威徳高き神であらせらるゝので、太陽になぞらへて 日の神 とも

申し上げます。太陽になぞらへ奉らねばならぬほど、その御徳は、至大至明至誠至善至純至正の至神至靈至尊にてゐるのであります。太陽は世界人類の仰ぐべきもの、その太陽にもなぞらへ奉るべき御徳高き、大御神様は世界人類の仰ぎ奉るべき神であらせられ、その御延長で御一心御同体にまします天皇様の御徳には世界人類がその御心を被つて順服し奉るべきものであり、(沢田順義先生は) その徳廣く及び、普く被り、至らぬくまなきこと、たとへば猫天津日の御光、天下を覆ひ、六合に照りとほれるが如し、故に上が上、下が下まで、おしなべて皆、即 日の神 にてわたらせ給ふぞとおもほえき、かゝれば誰もけまゐらするともなる、日の神 とあがめ奉る風俗とはなれりけり(飯長戸風) (全集、一六五—一六六)

○「玉木正英先生曰く、大日靈貴、大は赫美の辭、なるとは日の中し、四海を

照し給ひ、日徳十分なる時を云ふ要は女神の義、貴は持たり、天下を持ち玉ふの義、造化御人体の御神號差別無し、天照大神とも **日神** とも申奉る也、大日靈貴は、身化御人体也、御女神也。正(玉籤集) 橘守部先生曰く、可天照大御神を、大日靈貴と稱せる、此の比屢咩の咩は、統にて、皇祖神、皇尊と稱す、須賣(すい)に同じ、武智は、持にて、**天津日**を 統々持たす意、(稜或道別)と、

飯田武郷先生は……大は尊稱、日は日、要は女性、貴は美稱であるといふのです。長谷川胎道先生は、大日靈と申すは、大日靈の約(つづ)れる也、貴は即ち持なるを以て日は天日の地上に在る時を申すことにて、夜に対する辞を

り。天日の照し玉へる晝(ひる)を持ち司ち玉へる御方と申す義まりと見えたり。(皇道述義) 正……飯田季治先生は可即ち天上を照覽し給ひ、日の政を撰り持た

せ給ふ意の御名である。(日本書記新講) ……私は大日(即ち大いまる日、永遠無窮の日(年月)在らせらる、女神で、その永遠無窮を持ち司り給ふとい

ふ意味の御名である。(全、一七〇一七三)

○「法学博士寛克彦先生曰く可天照大御神の主なる御性質としては(中略)先づ太陽の輝くことは他に光を與ふることであつて、他に光を與へずして自分だけ

光り輝くことは有り得ぬ。自ら輝くのは、それぞ他を照らす所であらう。従つて、其の行動には自他の區別はない。それが光の徳であり(中略)天照大御神は、總てを依怙最負をく照らして下さる御方であり、其の御光に依つて萬物が生成して行くので、愛の神であらせらる、(中略)愛に依つて、永遠に萬物をお造り下さる神様であらせらる、この神を中心として栄えつ、ある大和民族の信念は、生々として若々しいものである。正(全一七七一七八)」

○「(文学博士植木直一郎先生曰く)……天照大御神、天照大神、大日靈貴、天照大日靈尊、此等の御名はいづれも皆「日」に關係の深いものは無い。然しながら、此れ等は皆、この大神の廣大無辺なる神徳を崇めて後に奉りたる御稱号であつて、我等の祖先は、之を稱へ奉るのに、何等より以上の言辞を有せざりし為めに、之を永久天上に赫照して、六合に光被し萬物其の恩賴に依つて生成化育する太陽に比し奉つて、崇め稱へ奉つたのである。(団体講話)(全一八六)

○「予の研究の結果によると、我が國語の神、即ちカミの力といふ言葉は、接頭語であつて、意味はまい。否無いことはいないが、現今では、上に添つて居る方で、殆ど其の本義を失つて居る。而して、カミのミといふ言葉に、大切な意味

があるとは予は考へる。然らば、ミには如何なる意味があるか。予の考へでは、カミのミは、原とヒ即ち日で太陽を謂つたものである。日本の神といふ語は、原と、太陽崇拜から出て居るのであると斯様に思ふのである。一体日即ち太陽は、六合を照徹する所の光と、萬物を生育する所の熱とを有し、人間の生命の本源であつて、(中略)太陽を崇拜することは、實に世界的、人類的であつて(中略)況して我國に於ては、日本民族の根幹たる天皇は、神代をがらに、**日神**の日嗣の御子即天照大神の御子孫であらせられ、明津御神、又は現人神であらせられるといふ堅き固き信念を有する國民に於てをやである。(山本信哉博士「惟神の出典と其の新解釈」(「国学院雑誌、第三十九卷、第三、第四、第五の各號に連載) (全、一九八一—一九九頁)

士、宮本武藏——吉川英治

昭和十三年十月二十三日大阪朝日新聞夕刊に載せられてゐる吉川英治氏の連載小説宮本武藏は近來の讀物として有名であるが、こゝに記された日神信仰は文藝家の作品に現はれた实例の一つとして採ることゝした。

宮本武藏

(二五〇)

空の巻

(無断上映上演を禁ず)

吉川英治作

石井鶴三繪

八重垣紅葉 (三)

蛭々と、道は山を巡つて、やがて、東を望む平地へか、つて来た。

とたんに、伊織は、

「あつ、日の出！」

指さして、武藏を振り鶴つた。

「オオ！」

武藏の顔も、紅に染まつた。

見る限りが、雲の海である。坂東の丘野も、甲州も、上州の山々も、雲の怒濤の中にうかぶ蓬萊の山々であつた。

「……………」

伊織は、口をむすんで、姿勢を正し

て凝然と日輪を見てゐた。

餘りに大きな感動は、少年を啞にさせてしまふ。伊織は、何と云つていいの
か、分らなかつた。

自分の體がゆうを旋つてゐる血液と、その太陽の赤いものが、ひとつみ
いな気がして来た。

だから伊織、

〔太陽の子だ〕

と自分を思ったが、それではまだ、彼の感

動と、人間精神とがひつたりしなかつた。

で彼はなほ黙つて、恍惚としてゐたが、突然、大きな声でどまつた。

〔天照皇大神さまだ！〕

振向いて、武蔵へ、

「ね、先生、さうでせう」

「さうだ」

伊織は両手を高く翳して、十本の指を透かしてみた。そして、

またどまつた。

「お日様の血も、おれの血も、同じ色だ」

その手で、伊織は、拍手を打った。そして俯し舞みながら、心のなかで、
凝と、

—— 猿には親がある

—— おれにはない

—— 猿には大神祖がない

—— おれにはある！

と思つて、微かに立ちあふれて来た。涙がまがれかけて来た。

その涙の疼きが、唐突に、伊織の手や足を動かし始めた。伊織の耳には、ゆ
うべの岩戸神樂が、雲の彼方で聞えてゐるのである。

「—— タラン、タン、タン、タン、—— どん どん……」

箆を拾つて舞ひ出した。神樂拍子に足を踏み、手を流し、そして、きのふ覚え
たばかりの神樂歌を謡つた。

あづさ弓

はる来るごとに

すめ神の

豊のおそびに

あはんどぞおもふ

気がつくくと、武蔵はもう彼方を歩いてゐる。伊織は、あわて、駆け出した。

道はまた、樹林のあるだへは入つて行く。—— もう参道が近いのではあるま

いか、樹々の姿に自から統一がある。

十三、二宮尊徳尊全集、現代事業篇

二宮尊徳先生の信仰の根底と道徳の淵源は、天照大神即太陽の信奉にあつたこ
とは、既述の通りであるが、先生の流れを汲む報徳教の思想と信仰と道徳、並
に之が具体的実践の現れたる報徳社の事業が、現在我國の、思想界並に經濟界

に偉大を働きをなしつ、あることは何人も知る顕著なる事実である。今尊徳先生の遺徳を顕揚せんとする者の、悉くが、天照大神即太陽の信仰を根本としてる現実を模範しようと思ふ。

○報徳道は、天照大神天地開闢の大道を明にし、之を宣揚するものであり、世界の大道にして古今に通じて謬らさず、中外に施して傳らざる日本精神の真體である。

因に報徳の會合に於ける儀禮にあつては、御神號幅と稱する三幅の掛物をかけて儀禮を行ふ。即ち中央に一段高く天照大神の幅をかかげ、その右下に二宮先生の肖像幅、左下に報徳訓の幅をかかげ……これは申す迄もなく天照大神を初め奉り、萬世一系の、天皇を神と仰ぎまつり、天照大神開闢の大道たる、皇國精神の真體たる二宮先生の報徳道を実践躬行して、以て、皇道を扶翼し奉る事を赤心こめて誓ふのである

先生の歌に「故道につもる木葉をかきわけて天照神のあしあとを見む」とあり、歌の意は我が國には立派な天照大神の大道、建國の大精神があるのに、

人々これを忘れ、當時外國の思想文物にかふれた為に、道徳經濟兩難に陥つた

のであつて、これを打開するには天照大神の大道を研究し、これを明かにするより外に道がない。その事を木葉に埋もれたる古い道に譬へたのである。

報徳道は、天照大神は萬物を生か発展せしむる 太陽 であつて、天皇を太陽と仰ぎ、明つ御神として崇敬し、皇恩の無限に感激して居るのである。……」

(吉地昌一篇、解説二宮尊徳翁全集刊行會、昭和十二年刊五〇頁)

○「翁曰、佛書に、光明遍照十方世界念佛眾生攝取不捨と云へり。

光明とは、太陽の光を云ふ。十方とは東西南北乾坤巽艮の八方に天地を加へて十方といふなり。念佛眾生とは、此の太陽の徳を念じ、菓子一切の生物を云ふ。夫天地間に生育する物有惰蠢動の物は勿論、無情の草木と雖皆太陽の徳を慕ひて生々を念とす。念ある物を佛國故に念佛眾生と云ふなり。神國にては、念神衆生と詭をべし。故に此念ある者は洩さず生育させて、捨置はずと云事にて、太陽の徳を述し物なり。則ち我が天照大神の事なり。此の如く太陽の徳は廣大なりと雖も芽を出さんとする念慮、育んとする氣力を乏し物に任方なし、芽を出さんとする念慮、育てんとする生氣ある物なれば、皆是を芽だたせ、育たせ給ふ。

是太陽の大徳なり、夫我無利足金貨附の法は、此の太陽の徳に象りて立てたるなり。』(全、五一頁)

○「まことの神道は天照大神の大道を行ふにあり。』(全、五二頁)

○報徳道が日本精神の真髓であり、日本精神が、天照大神の大道にして、世界の公道たる以上、萬国の指導精神として、やがて全世界に取り入れらるゝに至るべきである。……

また二宮先生は、古道とは、皇國固有の大道を云ふと云はれ、天照大神開闢の大道は、皇國固有よりと稱せられたが、惟に天に二日まなく、地に二君まなく、一の太陽が全世界を照すが如く、斯の道に立つものが、萬國を一つに治むるは必然である。而して、太陽の徳を備ふるもの、將に其の使命を賦與せられたものである。』(全、五八―五九)

○「先生の道が徹頭徹尾、天照大神の開かせ給ひし皇國の大道天皇中心の大道を明かにする事にあつたのによつても、明瞭であつて、……年々歳々天皇の恩を忘る可からずとある。若き時より、伊勢神宮にも参拝し、無上の喜びを感じて居る烈々たる誠忠の心は……又天皇に対し奉つても當時の尊皇論者の如

く、公々然たる態度で、尊皇を論じないで、歌にことよせ、比喻に托して天照大神の大道、尊皇の大義を説き之を實行して居たのであると云へよう。……』(全、六七一―六八頁)

○「富山縣振興報徳會(社)趣意書

……刻下の經濟窮狀を打開し、富榮の実を擧ぐる道は、實に天照大神開闢の大道に基き道德經濟一元の教義と之れが實現の様式を具有し以て興國安民の道を完ふし得る二宮先生の報徳の教に依るもの最良なりと信ず。……』(全、一九六頁)

イ「沃心誓約書(一)

……二宮大先生の立てさせ給ひし仕法雛形により、協力一致、以て、天照大神の開闢の大道を行はんことを誓ひ奉り候。憶ふに古采此道盛まる時は國榮え、斯道衰れば國衰ふ、天地開闢以來、天地の大徳を享け、祖宗開闢以來代々の鴻恩に浴し。……』(全、一九七頁)

ロ「決心誓約書(二)

開闢の大道は、皇國日本の使命なるに、……二宮先生、夙に開闢の大道を以て日本国民の進むべき道となし。……

今や時代は新興日本の躍進を希ふの秋、我等は二宮大先生の遺教を奉じ、生活を整頓し、相共に力を盡せ、其の職にいそしみ、上下一円融合し、大日本報徳社の指導の本に、愈々報徳の道に邁進すべく茲に連名、調印、誓約を證し、遠くは、天照大神の大前に、近くは二宮大先生の靈前に告げ奉るものなり。」
(全、一九六一—一九八)

○「新時代の部落自治五郎丸社」(富山県東砺波郡鷹栖村)

……二宮大先生の立てさせ給ひし仕法雛形により、協力一致以て天照大神の開闢の大道を行はんことを誓ひ奉り候。」(全、二九一頁)

以上は報徳社に於てか、る真摯熱烈なる誓約をなし天照大神(太陽)を拜し、天祖の大道を實踐せんと誓つて、懸命の努力をなしつ、ある実一例である。全国各地の同種の結社は何れも略同様の信仰の下に時代の波を勇敢に征服しつ、あることが、この誓約の裏面にほのかに窺はれると思ふ。

十四、神まがらの道—— 覚 克 彦

覚博士が古神道の研究に就いて、雄大深遠な哲理と国体神道の奥堂を究めて居らるゝことは、何人も兼認するところであらう。博士の学説は、神道学者と

してその項に挙ぐべきであるが、二、には特に、現代に於ける日神信仰に関する学説の代表たらしむる意味を以てこゝに掲げることにした。

「此の書は紀元二千五百八十四年大正十三年二月二十六日より同五月六日に至る間に八回に亘り沼津御用邸にて、皇太后陛下の御前に於て東京帝國大学教授法学博士覚克彦が進め奉りし講演の速記にして、其の後同人をして補修せしめられしを爰に、命を拜して印刷に付せしものなり。」(全書巻頭)とあることによりて、書本の性質、並にその内容が、如何に權威あるものなるかが明かである。イ、神典の性質

ノ、神典は全一として解釈すべきこと

大日本族は言挙げせずして神まがらの精神になつて真面目に生活する上から意味あるものとして世の中を觀察し記憶して参りました。このうるはしき気分を其の終古事記、日本書紀が傳へ来つて居ります。斯かる言傳は言傳のままとして、然る全一のものとして之を味はねばなりません。徒らに原因結果の關係のみに便り、言傳へを構成するに至つた現実的の材料のみに分析し了りましては全く魂の分らぬことになつてしまふます。夫では太

即ち其の食した食物に分析してこれこれの集まりなりと申すのと同じこと
になります。是より材料を従として、出来上りたる全一を主として、日本
族は、生命の要求をどういふ風に覚つて居つたかに就き申上ぐる心組で
ございます。(一三三頁—一三三頁)

2、自然科学上の事実の言傳へではございませぬ。(一三三頁)

3、偶然を超越する作用即ち表現作用でございませぬ。

決して一度にお造りに成りませぬ。神様より造り換ひを遊ばしました。

……日像の鏡をお造りの時も度々鑄て新くに出来上つたと申します。

(一三五頁)

口、日神の御出生

「伊邪那岐神様が更に進みて一番貴いお頸の襟を遊しました。先づ左の御目
を洗ひ給ひし時に成りませる神様は 天照御大神様右の御目を洗ひし時に成
りませる神様は 月讀神様……」

我が目前蓋ふ繁見ゆ立ち出でて遠き神代を登る日に見ん。(一六一頁)

「此の目の中には人格者の精髓が全体籠つて居ることは……されば此の宇

宙の有り難き懐しき意気込の神様の御精髄たる一番大切なる御目よりして、
光の御神たらせ給ふ 天照大御神様及び 月讀神様が御生れ遊ばしたと申す
日本族の言傳には如何にも表の様々意気があり、又深い意味の寓せられてあ
ることを感じます。(一六七頁)

「北半球に目を建てて居りますから、通常の場合には有難いお日様を仰いで
居りますと左の方からお昇りになり、右の方にお降りになります。彌々栄ゆ
ることを尊ぶ日本族は、昇る方を貴んで沈む方を従と見て居ります。お日
様がお上りになりますと左の方を上とし、お日様のお這入りに来る右の方を下
と致して居ります。

戦争の如き非常の場合には、汝等でない。我こそは、**日の神様**の御末

であるぞとの御心で、お日様を背に御負ひになつて征討を遊ばすこともあら
せられましたが……大君は神に対して給ふては現人として日に白む **日の**

御神の御光を仰ぎ、之を反映して一般人に臨みお照しになりますから、其の
場には左の方が、上る方になり、右の方が没する方になります。(一六八—一六九頁)

天照大神様は宇宙神の左の目よりお生れ遊ばし、月讀神様は宇宙神の右の御

目よりお生れ遊ばしました。月讀神様は光の神様として、天照大御神様に次いで明るい神様であらせられます。「月」とは日に並いで明るいから、得た御名であると言ふ書記に見えて居ります。(一七七一頁)

……御生み申して天地を造り来つたけれども、なかく仕上げとはなうざりしを、今此の三柱の御子を御生み申すことにより天地創造が出来上つたと思し召し給ひ、御子様たる神神の貴い中に於ても、是等三柱の神神は貴い御子様であると思はせられました。此の三貴子は人間の御先祖であらせられます。平面的に見奉れば、人間の本質たうせ給ふ神々で、縦に時間の上に於て見奉れば、人間の御祖先であらせられます。現に天子様は申し上げ奉る道もななく、日本人の悉く、世界の人の悉くに輝きつ、あらせらるゝ人間の本质たる神様であらせられます。(一七七一頁)

八、日神の御霊

天照大御神様の輝きいますを喜び給ひ、御自身の御頭元より御霊魂をお抜き取りになり、彌々之に心を込め彩されて、「是を汝の魂となして高天原を知らし召せ」と仰せられつ、天照大御神様に御授けになりました。

宇宙の根源たる「有り難き懐かしきいざな」を本質とし給ふ伊邪那岐神様が「宇宙の根源たうせ給ふ一切の神神を御一体として有し給ふ御自分の御魂」を抜き取り、天照大御神様の御霊を御本質と為し給ひしことの信仰は諸々の天つ神様と天照大御神様との裏表し給ふ御一体たることの信仰に外なりませぬ。「天地の大生命」と「人間のいのち」とが根本に於て帰一すること、人の生命は天地の大生命の表現たることの意義も窺ひ得られます。

天照大御神様御自身が天地の大生命の最高表現神たうせらるゝのみならず、その御光を以て一切を照らし、是等をして泄れなく、宇宙大生命の表現者たらしめ給はれます。(一七七一―一七四頁)

然し宇宙の根源たうせ給ふ大神様が肉眼に見ゆる玉を授け給ひしものと思ふは淺はかなる考に非ざるかと存せられます。例の通り「靈」又は「いのち」を玉に事寄せて申したるもので、(一七五頁)大神様は自主者最高者におはしますし、萬我萬物の一切の要求に応じ、一切に其の宜しき價值を分配し給ふ御神にて、其の御作用を「しらしめす」と稱するのであります。

……古事記に、伊邪那岐神様が天地を創造し給ふに當り、袂に袂を重ね

結果漸く生み給ひし 日の神様に彌々確實に宇宙の御靈を御授け遊ばす段は、如何にも簡單明瞭にして且意味深く有難いことでございます。是が固体の神と云ひたる所以、とこしへに彌栄ゆる所以でございます。(一七六一―七七頁)

二、皇祖

天照大御神様は、人間の御祖先は人間の本質の神様であらせられ、皇皇は此の貴い。天照大御神様の御本系とましまし、日本族は此の皇神様の嫡流でございませう、嫡流と申す嫡流中の御本系は皇皇であらせられます。……日本族は他民族を神の公けの御子に非ずとは申しませぬが、少くとも日本族自身は、正々堂々たる神様の嫡流、嫡族日流、日氏、日族、日の本族からであると思つて居るのでございます。(一八六頁)

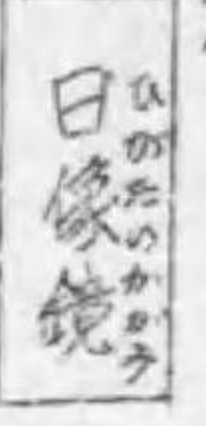
ホ 日神

及び須神と和魂及び荒魂 (一九四頁)

天照大御神様はかやうなる神様でありまして人間としての生命の光の神様であらせられます。(二四三頁)

ハ、天石屋戸

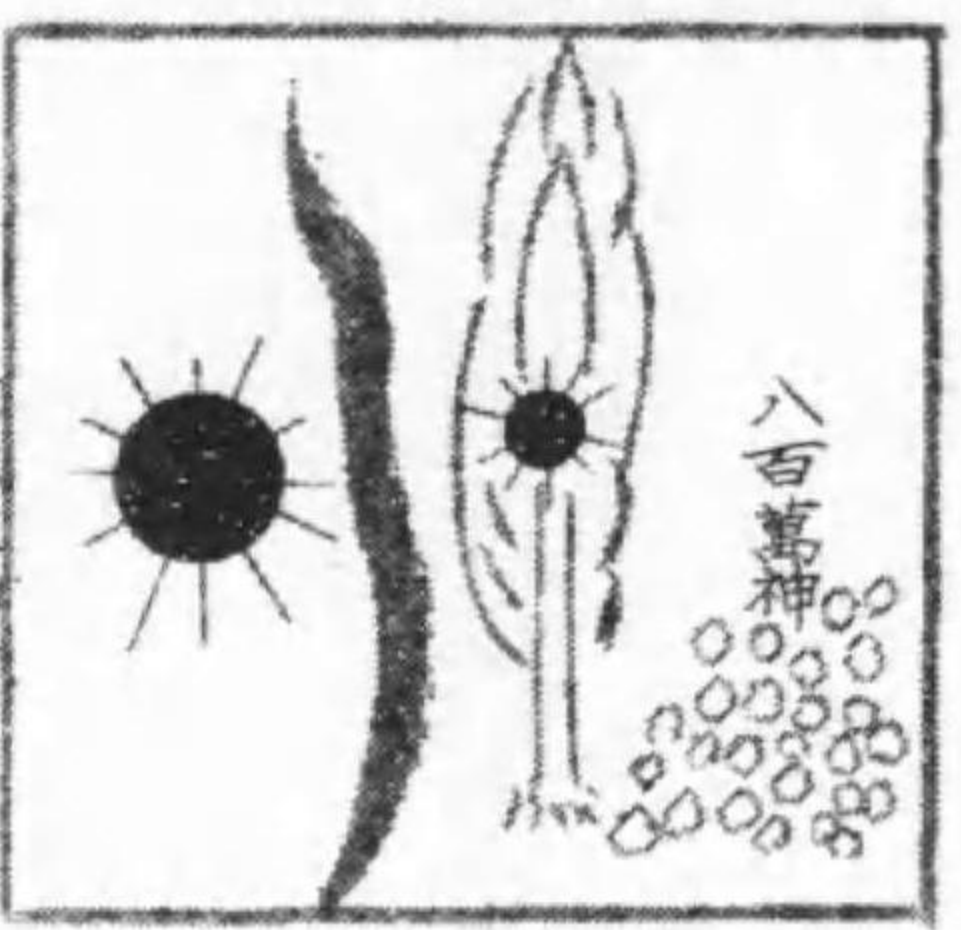
中つ枝に



を懸く、かやうに致しまして此の五百澤真栄木の中つ枝

に 天照大御神様の御姿に擬へた御鏡もお懸けになりました。

鏡の像日 (一)



天の石屋戸の圖

神御大照天 (二)



(三二九―三三〇頁)

ト、ひかげのかづら。天照大御神様の和魂を意味する「ひかげのかづら」(日蔭蔓)五條々身に纏はれました。「ひかげのかづら」は響きの上で日光、又は日靈に當つて居ります。(三五二頁)

チ、日像鏡

石屋戸外に懸けられし光輝ある日像鏡の御本体ではありせられますが、兎に角今は石屋戸を閉てて独り内に隠れていらせられます。然るに五百津真栄木の中つ枝に懸かれる日像鏡はやかに上は萬世一糸の 天皇を照らし、之を以て御自身の延長しとし、下は 皇族臣民たる八百万神を照らし、高天原全体を清明心の世界ととし、動いては自他、内外、神々と場所との區別なく痛痒の一笑に帰一致して居ります。(三五七―三五八頁)

日像鏡は、石屋戸の内に入ります。天照大御神の御像にして……(三六〇頁) 天の戸はのどかにあけて神路山杉の青葉に日影さす見ゆ。(皇后陛下御歌) (三六五頁)

天照るや日の大神は拜がまむ人の心印とし昇ります。(三七三頁) リ、明治天皇の御製に

波風はしづまりはてて四方の海にてりこそ渡れ 天つ日 のかげ
と仰せられし如く 天照大御神様の御光が無限に八方十方に神は伸ひしと道進
する有様を賞讃し奉つた言葉で、ございませすが……(言葉とは「あま手伸し
といふを指す。三七三―三七四頁)

本書にあらはれた神代の言傳への意義は誠に深遠雄大、而も清新豊潤明瞭いはん方なし 妙にゆかしきを覺え日の大神の御神徳を仰ぎまつるのみである

十五、国体の本義——文部省

結びとしてこゝに教育の中心 たる文部省が「国体を明徴にし、国民精神を涵養振作すべき刻下の急務に鑑みて編纂した。」(同書巻頭) 国体の本義が如何なる態度を取つてをるかを観ることによつて、これまで、日神の信奉についてや、曖昧に見られがちであつた教育界が、急角度を以て熱誠を現しつゝ、あることに注意したいと思ふ。

○「又日本書記には

伊弉諾尊・伊弉冉ノ尊共に謀りて曰く吾れ己に大八州国及む山川草木を生めり何にぞ、天下の主たるべき者を生まざらめやと。是に共に「日神」を生みまつります。大日靈貴と號す。一書に云く、天照大神、一書に云く、天照大日靈尊。此の子光華明彩しくして六合の内に照徹らせり、とある。

天照大神は 日神 又は大日靈貴とも申し上げ「光華明彩しくして六合の内に

391
431

照徹らせりしとある如く、その御稜威は宏大無辺であつて、萬物を化育せらる。即ち天照大神は高天ノ原の神々を始め、二尊の生ませられた国土を愛護し、群品を撫育し、生成発展せしめ給ふのである。(昭和十三年再版本 一三一—一三頁)

昭和十四年二月六日印刷
昭和十四年二月十日發行
(非賣品)
著者 丸山敏雄
東京市赤坂區青山南町五ノ七五
發行者 土井永市
大阪市北區禰上町電停前
三子ヤ商店印刷部
印刷者 道家親彦

終

